

# 人 の 一 生

「ゆりかごから墓場まで」といことばがあるが、この「人の一生」は、境町一帯における多くの人々のゆりかご以前の出産から始まり葬制に終る。

安産のききめがあるように、蛇のぬけがらを腹帯にまくとか、荒紙の産泰様にお祈りするとか、積極的なものとともに、妊娠中にしてはならないという多くの禁忌が採集されていて、神秘的な出産に対して強い関心を示している。出産に統ぐ、お七夜、食い初め、初節供、お誕生など行事を見ると、いつにかわらぬ親心を感じられる。ちなみに、この土地のゆりかごは、薬のかごで、イジメ、イズメ、ツッコと呼んでいたが、今は使っていない。

呑電様にお願をかけ、または弟子にしてもらって、七つ坊主にしたたり、十坊主といって、十才まで頭を剃っていた者もあるという、やがて十五才になると若者の仲間入りをする。若者宿・娘宿はなかったようである。

いつの世にも、他からはワカイシ理屈といわれる若者独特の生き方がある。次第に崩れては行くが、チョウ頭と呼ばれる指導者の下に団体行動をとり、その枠から外れる者は、非難もされ、罰を受けたのは、単に仕事の上だけでなく、男女関係においても例外ではなかつたようだ。

婚姻について、下淵名・中島の詳細かつ多彩な報告がある。新夫婦の前に出す膳の飾り物を作つたり、嫁が門に入る時に、外から笑あおいだりして若者が活躍する。

終局の葬制に関しては、出発の産育に匹敵するほどの行事があり、そ

れは遙か後の三十三年忌の葉つき塔婆を建てる時にまで及び、断ち難い人の世の縁を示している。

本稿では項目にしたがつて、地域毎にまとめておいた。

## 出産から誕生まで

### ○本島

出産と夫 初子のときに父親がいるときから、父親がいないとなかなか子供が生まれないという。夫はお産のときには手伝いをしない。

産の神 子供をさすけてもらうためにお祈りする神様は産泰様と二夜様。

安産を祈る神様も産泰様と二夜様。

出産に立ちあうと考えられている神様は、産泰様と水神様。

便所神 便所まいりはお七夜のときにする。お七夜に氏神様へおまいりしてから、便所神へおまいりした。身内の女の人がつれて行つた。箱はうきとお産との関係については、よく言つていないが、ほうきはまたいたり、のつたりしてはいけないとついている。

分娩 初産のときは、実家へかえつとうむ人もある。出産の方法は、もとは坐産（今でも高まくらをすると、お産のようだといふ）。ねて産むようになったのは、今から三十年ほど前からである。同じ人に産婆はどうあればあさんといい、近所の素人の人であつた。

何人もとりあげてもらえば、おつきあいをした。

エナやヽソノオの始末むかし（四十年ほど前まで）は、とぶくろの

下にいた。最近では火葬場でやく。

うまれてすぐ赤ん坊に着物をさせるのはおばあさん、すぐのませるものはマクリ。これは裏屋から買ってきた。

胎便はカナババといった。紙でとつてしてた。お産のあと一週間ぐら

いは、洗い水は便所のわきに穴をほっておいて、そこへしてた。

初湯にはうまれてすぐ、とりあげばあさんがいた。この水も便所わ

きの穴にすてた。

うぶ毛は、むかしはうまれて一週間か十五日目の祝いにそつた人も

あり、七つぐらいまでそらずにいた人もあつた。うぶ毛をそるのは家の

もの。そつたうぶ毛はもつたらないといつて、っぽ山へする家もあつた。うぶ毛はもつたらないから、人にふませないためといつた。

っぽ山には子供をあそばせるお神がいるといい、線香をあげて子供がよくあそぶようにとおがんだ。

子供がうまれるとすぐ母親の里からかつおぶしと米（力米といふ）をもつてきた。

赤ん坊のことをこの辺ではアカという。

お宮まいりがすむまでは、赤ん坊は欄を渡つてはならないといった。

産飯 うぶたてのこはんという、子供がうまれるとすぐに白めしをた

く。これは、みんなにたべてもらえば、その子が将来富貴になるといつたので、大勢の人に食べてもらった。

うぶめしは、うぶゆをあびせたあとにたいて、たべてもらう。

近所まわりはお七夜のとき、本家などの女の人がつれて行く。このと

き、女の子にひたいにべにをつけ、男の子にはなべずみをつけた。

産明け 男は十五日 女は二十一日。このときお宮まいりをする。宮

まいりをしてから赤イチゲンとして、里へ行った。母親と一緒に行つて泊つてきた。このとき赤飯をもつて行く。母親は体やすめをしてくると

いう。長い人は半月ぐらい。これは、どんなに人手がない家でも行く。

大抵一週間ぐらいは泊つてくる。なお、里方でお宮まいりはしない。

食いぞめ 生まれてから百日目に食いぞめをする。このときには白めしをつくる。

食いぞめのときには、近くの川から小石を五つぐらい（數は不定）ひろつてきて、お膳の上にのせておいた。石をかじらせて、歯を丈夫ににするためといふ。なお、はしまきを割つてつくつた。米を一、三粒赤ん坊の口へ入れるまねをした。

初誕生 誕生もちを赤ん坊に背負せるが、これを背負う子はすくない。誕生もちのことは、ぶつついもちといつて、子供がつぶれるまで背負わせた。もちは、母親の親元と近しい家へくはつた。

チブタ 赤ん坊が生まれたときのチブタはいいから、神社へおまいりしてもいいといつた。

子供をうんでから一年間は、子供をつれてお宮へは行かない。墓へ行くと血があがるといった。

## ○上 武士

腹帯 五ヶ月日の犬の日に腹帯はする。腹帯は昔は亭主のフンドシを

まけといわれた。その長さは七尺五寸三分、または一丈である。中にハビのヌケガラを入れた。

出産と夫 初産の時に夫が家にいると、次の時から夫が留守にするとななか出来ない。初産の時留守にするとその逆なる。

昔は出産の時夫が石ウスを抱いて家の廻りを三度廻ると安産といわれた。

身分け場所 婚家のナンドでお産はする。今はコザ（表の奥の部屋）で生む。

出産の方法 昔は坐産であったが、今は横臥して産む。

赤子に着せるもの 昔は生れるとボロにくるみ、それから着物を縫つて

た。生れる前に着物を作ると思いついた。

すぐ飲ませるもの マクリ、またはホウズキの根の汁。

胎生便 カナババという。

初湯 生れるとすぐ湯を使わせ、昔はそれを明きの方に穴を掘つて捨て、天トウ様にあてぬよう三週間位ふたをしておいた。今は外の便所に捨てる。

初生毛 お七夜におろした。この時、後の首の毛は残して七つ位まで残しておいた。これをチン毛ともトトの毛ともいった。

後産 エナという。ヤキ場で処分したが、今は火葬場で処分する。ヘソのオ これはヨシの茎で切った。とつておいて大病の時にげずつ飲ませる。ヘソのオがいたむとその子は育たないといわれ、ウジ神(家敷神)に供えた。

産の神 産泰様、塩釜様、柄木の岩舟の地蔵様。妊娠するとお参りに行く。代人でもよい、もらつて来た御撰米を食べると安産という。

産氣づくと産泰さまの護符を飲ませる。

便所神 お七夜の日、女兒は額にベニ、男兒はナベズミを付け祖母に抱かれて、両隣と自分の家と三軒の便所を廻る。便所參りといふ。

宮詣り 男兒は十五日、女兒は二十一日鎮守にお詣りする。この時は家家からウブ着(晴着)がおくられ、これを着せる。

この日まで外出はさせない。

命名 名前はナフツケ本があつて命名した。最近は伊勢崎神社で命名してもらいう。また東武線の鷺宮(子育)へも行く。

男が欲しい時は女兒にアグリと命名する。

産婦は出産後二十一日間外出させず、カニとカワブシミソで過した。なお、力コメとして、出産後米三升を縁の実家からとどけられる習慣がある。

食い初め 一二〇日目にする。

誕生祝 お重に入れた餅を背負わせる。つぶれるまで背負わせる。

## ○下 溝名

妊娠中火事を見ると赤ん坊にアザがあるといわれる。  
安産神、呪法 子が欲しい時には呑電機、大国神社、鷺宮にお参りに行く。

産の時は大国神社の縁の下の砂を一握持つて産婦の枕の下におくと効き目がある。安産を願う場合は産泰神社のお札を受けてくる。

蛇の抜けがらを腹帯にまくと安産のききめがある。今は腹帯にサラシを使用するが、昔は男の襪を使つた。腹帯をするのは五月日の大の日を選んでする。大は安産だからそれにあやかるためである。

安産を願つて水天宮の護符を飲むこともある。

出産と夫 出産の時夫は別室にいるのが普通である。家中にいると妊婦の力が付くといわれている。夫が留守の場合は産氣付くと迎えに行く。

身分け お産は婚家の奥の暗い部屋である(ナンド)。昔は坐産でヤグラにつかまり布団に背をかけてお産をした。障子の棧が震ふ位苦しないと生まれないといわれた。産婆は近く所の経験豊かな女の人が取上げてくれた。

お産の後産婦は枕を高くして休んだ。血が上るのを防ぐためである。後産をイナと呼び、昔は穴に埋めたが現在は焼場でやっている。

ヘソの緒は竹のサヤで切つた。刃物は嫌う。ヘソの緒はトボロに埋め最初の糞をカナババという。これは東方の方に穴を掘つて産湯と一緒に捨て、お七夜まで荒されないようにフタをしておく。これを犬や猫がのぞくと赤ん坊はそれを恐がるという。生まれてから一昼夜はマクリを飲ませる。昔はホウズキをしゃぶらせた。その後乳を飲ませたが、その間泣くと砂糖水を飲ませた。

産まれると茶グルワにふれて、すぐ集つてもらってウブタキメシを食

べてもやう。この時大勢集まるはうが将来赤ん坊が富裕になるといわれるのである。

新生兒はボロにくるんでおいた。お七夜には嫁の実家から持参した着物を着せる。これは木綿のもので「ションベン着物」という。宮参りの時に嫁の実家で祝ってくれたウブギを着せる。これは羽二重の上等のものである。

初湯を使わせるのは老人である。

初生毛はお七夜に剃る。毛は穴に埋めるか人に踏まれないようだに大國神社に納める。男児はこの時大正頃まではヤツコを残した。これはチノ毛といい鼻血が出た時に抜くと止まる。また炉に落ちた時チノ毛を掴んでオプスナサマが引上げるためのものである。母乳は大國神社の御撰米（オサゴ）でカニを作つて食べると出る。

命名 子どもの名前は祖父がつけることが多いが、大國神社の宮司につけてもらうこともある。

女ばかり生まれて男が欲しい時には「アグリ」という名前をつける。子どもの名前はお七夜に付ける。多くは長命の老人の名前の一字をとる。三つくらい名前を書いた紙を神棚に上げ、無邪気な子どもが引いてきめる。

前の子が短命な場合は呑電様に名前をもらつてくる。

お七夜には名前を付け茶グルワに赤飯をくばる。これに対しお産見舞には着物用のキレを持って行く。

便所廻り

お七夜の日に近所の都合のよい老人が新生兒を抱いて、向いと両隣の便所の神様をまわる。宮参り 男児は十五日、女児は二十一日が宮参りの日である。この日は祖父がウブギで盛装した赤ん坊を抱いて大國神社にあるお稻荷さんに行つて、男児は額にスミを女児は額にベニを付けてもらつてく。この宮参りの日までは赤ん坊は橋を渡れない。村から出ることは許さ

れないということである。

食ぞめ 一一〇日目にやる。赤飯を茶グルワに配り、赤ん坊には石をしゃぶらせる。歯が丈夫に育つようにという意味である。

初誕生 誕生餅をつき、一升餅を赤ん坊に背負わせて、歩ければ転がす。

## ○中 島

妊娠中の俗信 腹帯は旦那様の襪がいいといったが、たいていは新しさらしを買って来た。それでも旦那様の襪をしめる真似ぐらいはした。五月日の成の日、薬でできるようにしっかりしめろと言われた。

妊娠中に火事をみると赤あさ、ジャンボン（葬式）をみると黒あさができる。鏡をふところに入れておけば、あざはできないともいう。話者本家の姉さんは、東京で火事をみて来たら、ほんとに赤あざの子ができる。そこでアカツコ（赤ん坊）のヘソノオをとつておいて、それであさの部分をなでおいたら癒つたという。

産泰様（勢多郡城南村）にお雷りに行って、柄杓をあげるオガシシヨウをする者もあった。

牛の荷ぐらの上に乗ると、一月よけいにお腹の中にいるという。またサンダラの上に腰かけるものではないといわれた。

出 産 お産はナンドです。ふとんなどによりかかつて生んだ。

最初の子供一人ぐらいは、本家とか、新宅とかのよく慣れた人をトリアゲバアサンに頼んで生んだ。しかし二人目からになると、たいてい一人で仕事をしてしまう。話者の一人もそうで、主人から「テメー、犬猫みてえだ。」とよく言われたそうである。

ノチザンはたくさん人にふまれるほどいと言つて、トボロの下に埋めた。ノチザンといつしよに、筆や墨もそえて入れた。

生れるとすぐに、ウブタテノマンマを炊く。近所のおかみさんがかけつけて、一生富貴に暮せるようについて、一升を山盛りにして煮釜の蓋の上にのつけて、お釜さまに供える。大勢でにぎやかに食べるのが

いいんだといって、近所の子供たちにも振舞う。

#### 出産俗信

○油気は百日間食っては悪い。ねぎも悪い。ヤキシオにカツブシミソでも食べていればいいとされた。

○母の厄年の子はつぶすまねをする。

○月夜の晩にできた子は家にはいないという。

○十月にできた子（歯のはえた子ではない）は、トッキトウバといって忌み、子供を三本辻に捨てるまねをして拾つてもらう。

○育ちの悪い子は、三十三軒ギモンといって、三十三軒から布を少しづつもい集めて、着物をつくる。

○産で死んだ者には、流れ瀧頭を今でもする。四本桟を支柱にして赤いキレを上にあり、小川のふちに立てる。側らに柄杓を添えておく。葬式のニワバの者がつくる。通行人に水をかけてもらつて、布が白くなると、死者も浮ばれるという。

孫だき 産見舞ともいう。生母の実家からウブギとして、女なら錦紗のガラモソンとか、男なら紋付を贈る。ほかにヒヤ着として麻の葉のついた生衣も贈る。「実家の米は力がつく。」といって、カツブシを一组そえて、米を必ず贈る。

近所、親戚の人も、それぞれ親疎によつて、着物とか、布とかを持つてゆく。これ等はオビヤまでに持つて行くのが普通である。

オビチヤ 湯をあびせてからベンジョマーリをする。近所のチヨウズをかりて、おさごを持つて、子供はだいてお詣りする。

名前をこの日につける。くじを三本つくつて、太神宮様に上げて、ひきあてた名前にする。命名の際、男がほしかつたがその子が女だった場合はアグリ、もう十分という時はトメ、子供の育ちのよくない家では、熊とか虎とかのついた名をつける。

オビヤ 男女とも二十一日目。鎮守様にお詣りに行く。産婦は実家に帰る。赤飯を飲いて孫ダキをもらった家におくばりをする。

○油気は百日間食っては悪い。ねぎも悪い。ヤキシオにカツブシミソでも食べていればいいとされた。

○母の厄年の子はつぶすまねをする。

○月夜の晩にできた子は家にはいないという。

○十月にできた子（歯のはえた子ではない）は、トッキトウバといって忌み、子供を三本辻に捨てるまねをして拾つてもらう。

○育ちの悪い子は、三十三軒ギモンといって、三十三軒から布を少しづつもい集めて、着物をつくる。

○産で死んだ者には、流れ瀧頭を今でもする。四本桟を支柱にして赤いキレを上にあり、小川のふちに立てる。側らに柄杓を添えておく。葬式のニワバの者がつくる。通行人に水をかけてもらつて、布が白くなると、死者も浮ばれるという。

孫だき 産見舞ともいう。生母の実家からウブギとして、女なら錦紗のガラモソンとか、男なら紋付を贈る。ほかにヒヤ着として麻の葉のついた生衣も贈る。「実家の米は力がつく。」といって、カツブシを一组そえて、米を必ず贈る。

近所、親戚の人も、それぞれ親疎によつて、着物とか、布とかを持つてゆく。これ等はオビヤまでに持つて行くのが普通である。

オビチヤ 湯をあびせてからベンジョマーリをする。近所のチヨウズをかりて、おさごを持つて、子供はだいてお詣りする。

名前をこの日につける。くじを三本つくつて、太神宮様に上げて、ひきあてた名前にする。命名の際、男がほしかつたがその子が女だった場合はアグリ、もう十分という時はトメ、子供の育ちのよくない家では、熊とか虎とかのついた名をつける。

オビヤ 男女とも二十一日目。鎮守様にお詣りに行く。産婦は実家に帰る。赤飯を飲いて孫ダキをもらった家におくばりをする。

タイゾメ 男女とも百日目。家だけの祝い。御飯に塩、石を添えて膳をつくり、子供にやる。石は歯が丈夫になるように。

お誕生 特にしないけれど、それでも歩けば餅はつく。餅は風呂敷などに包んで、子供に背負わせる。

初節供 母の生家よりシンノウサマ（内裏雑）、高砂など、仲人からは三月人形、親戚等から人形が届き、それ等に対して紅白の餅などの節供がえしをする。

#### 東新井

五月めの成の日に、さらしを買って来て、腹帯にした。

出産のためにふとんかわやさんぼろの使えねえようなものを用意した。出産前に昔は、おむつなど、いろいろ用意しておくと育たないといつた。実家からは、産婦に米三、四升にかつぶしを、早く力がつくようになると、おへやまいりお七夜の日に、三軒の便所を廻る。男の子の時は、大と墨でひたいに書く。女の子には紅をしるしにかける。うちの者がついで、石橋を渡ると、乳が出ないという。

荒磯の産泰様には、大概の者が一、二回行つた。そこぬけに軽く出来るようによると、そこぬけ柄杓をあげた。

なんどで産む。

馬のものをまたぐと、お産が重い。馬は十一月入つてから四つ足を食べるところはない。

火事を見ると赤あさが出来る。

仏様を見ると黒あさが出来る。何が何でもたちあう時は、ひところに鏡を入れれる。

おぶや 男は十五日、女は二十一日に赤飯をふかす。

くいそめ 百十日、子どもに石をなめさせる。

ちんげ 川に入つても、やしきがみ様が、ひっぱつて助けてくれ

る。

やつこもみあげのあたりを、そり残す。大正頃まであった。  
産まじないへびのぬけがらを体にまとと安産。

○伊与久

出産 昔のお産は、産婆が来ないでひとりで産んだという。産まれる日が近づくと寝ていられないで、起きてこたつのやぐらに寄りかかたり、ふとんを積み上げた所へ寄りかかって、腰を立てて自分でなでながら産んだりした。六日一日（ムイカインチ）といって、産んでから一週間は夜も昼も坐ってふとんに寄りかかって休んでいたもので、横に寝ることはできなかった。

里から米とカツブシを持って来て、おかゆとカツブシミそや焼き塩だけを食べていたので、産後の体力がなかなかつかなかつたが、二、三日休むだけで起き出した。産後起きて便所へ行く時には、天道様がもつたいないで笠をかぶつて外へ出た。イロリを燃したり井戸水を汲む時に塩こりをして身を清めてからしが、水波みの手おけを下げるのがやつとだつた。それでも病気になつたことはないといふ。（明治二十一年生のシナさんの話）

育児

子育の神

子供が丈夫に育つようにとおがむ神様は春電様と地蔵様。（木島）  
生れると、丈夫に育つように、得の字の多い名をつける。四つの一月  
四日には、新田郡の反町薬師にお詣りに行く。

春電様にお願いをかけ、またはお弟子にしてもらつて、七つ坊主にしました。女の子でも必ずぐりぐりの坊主にしといた。少しのびると、春電様のオハラダチといって、すつた。中には十坊主といって、十才まですつた子もあるし、三つ坊主といって三才でやめてしまつ場合もあつた。そ



中島の子育て地蔵（都丸）

れ等の場合、ケンケ（盆の毛）だけは残してお

窟の毛だけは残してお

く。ころがつた時、春電様

がひき起してくれる」とい

つて。このころはしない。

虫封じには、浅間様（同  
村内にあり）に願かけした。

言われた。以前は毎月二十

日、今は四月二十三日が

反町薬師、春電様は右同

様。村内に北向地蔵尊があ

り、それは子育て地蔵とも

ちそうになつた時などに神様がチン毛をつかんで止めてくれるとい

う。明治末期まではこの風俗が残つていて、追いかけっこなどで「チン毛が見えるもまで追っかける」などといったといふ。（伊与久）

これには、七つ坊主とか五つ坊主ということばがある。太田の春電様へおまいりしてからみをたてた。チンケだけ残しておいた。子供がころぶと、おかみがこの毛をひっぱって助けてくれるといった。家によつては、ヤツコも残しておくものあつた。

弱い子の場合は春電様に行つて名前をもらつてくる。そして七つ坊主といって七才位まで春電様の弟子にして頭を剃つておくと丈夫に育つた。（下瀬名）

弱い子の場合、父親が他人に氣付かぬようウブギを三本辻に持つてエリツボを切ってきて、近所の老人に縫つてもらつて着せると丈夫に育つ。(下潤名)

七月子は育つといわれる。予定日後に生れた子は馬のショウといわれる。(下潤名)

歯が生えて生まれた子は、鬼つ子といわれて三本辻に捨つて、あとでひろつてもらつた。(下潤名)

歯が一本だけ生えると三本辻にウツチヤル。捨つてくれた人とは若い親としてつきあう。(上武士)

捨子歯が一本しかねえいものはオニコトといつて三本辻へすてた。四十一のふたつ子(子が二つになつて親が四十二才のもの)もすて子をした。いずれもさんだわらの上にのせて三本辻へすて、近しい人をたのんでひろつた。

おびときは七つの祝いのときにする。

子供の厄年 四才のとき子供のやく年といい、反町の薬師様へ家のものがつれて行つた。弱い子は近所の人、その子の物をもつて行つてもらつて、おがんできつてもらつた。(木島)

頭の巻目が二つある子は強情という。曲っている子は根情曲りといわれる。(下潤名)

虫封 よく泣く児、ひきつける児、カソの強い見は茂呂のタイマン寺に虫封に連れて行く。和尚が左手のヒラに「鬼」と三度書いて唱え言をするところまる。(上武士)

ハシカ 明治の末頃 香具師が「ホウソウ、ハシカ、ナンザン除け」と熊を連れてきた。この熊に着物を着せ、それを子どもに着せるとハシカに軽く済むといわれた。代金は一錢か二錢。

馬見塚は関根さんというハシカをしないオジサンがいて、ハシカがはやるところのマタをくぐらせるといつて済んだ。(上武士)

ホウソウダナ 種痘が付いてからホウソウダナを作つた。青竹で一尺

四面のタナを作り(昔はウツギ)、赤い紙を四隅に立て、真中には幣束を立てた。外から見える座敷につるした。近所からはホウソウダナを見舞つてくれた人は赤飯をくばり、縁鏡守の拌殿に赤飯とホウソウダナを供える。これをホウソウオクリという。(上武士)

種痘をすると、ウツギの木十二本で一尺四方位のホウソウダナを作り。真中に一本の幣束を立て、四隅に赤い紙をさげるものである。これを神棚にさげておくと、茶グルワの人々がお見舞にきてお賽錢を上げてゆく。うえて十二日にお見舞に来た人々におかえしをする。そして大国神社の木にホウソウ棚をかけてくる。これを神送りという。大国神社にはホウソウ神を祀つてゐる。(下潤名)

子育の道具 子負い帶をユッケ帶という。サラシでクケてある。

守り子帯 白いさらしをくけて作るが、老人の帯を使う場合も多い。

昔は薬カゴのイズミを使ったが、今は使わない。(下潤名)

イジメ(墓) またはツツコ。 (上武士)

子墓 宮参り前に死んだ子供は埋めっぱなしで、墓参りをしない。

墓のすみにいけておく程度である。

かきあげた子供がなくなつたときは、お寺でおさづけをもらつていける。七日、二十一日目とか、一周忌ぐらいまでは供養してやる。かきあげない子供が死んだときには、みかんばかりにでもいれていくる程度である。(木島)

## 婚姻

今回の調査では婚姻習俗については、下潤名、中島、木島、伊与久で資料を得ることができた。しかし、婚姻習俗全般にわたる資料を得ることはできなかつた。今回の調査でとくに注意したいことは、かどいれと

か足入れとよばれる婚姻の一形式が、ここで最近のあたらしい傾向として行われてゐることである。この形がどの範囲において行われてゐるか、あるいはその理由については今回の調査の段階においてはとらえられなかつた。

#### ○下調査名

結婚は隣村が多いが、茂呂（伊勢崎）の嫁は機くらいしかできない

が、新田口（新田町）は働き者が多いといわれる。

見合結婚が一般的で恋愛結婚はナレアイトと呼ばれて嫌われる。また、血筋が悪いもの、親の素行に問題があるもの、方角が悪いものは忌まれる。

子どもの中からライナズケの間柄の者は昔は多かつたが、これはイントコ同志が多く、問題は少なかつた。しかし、イナズケの約束を破つて他の男女と仲良くなると不義密通として非難された。

結婚が整うと嫁は婿の家へ泊込みで手伝いに行くことが多い。この場合嫁さんは家族の一員として扱われるが、時に妊娠してから結婚式をする場合がある。これを足入れと呼ぶ、嫁を送り出す時に嫁の家族はホウキで掃出する真似をする。「二度と帰るな」という意味である。

嫁は嫁入道具と一緒に行列を組んで歩つて行く。道具は三つ重、衣類、夜具、鏡台で、婿の近所の若衆が運ぶ。この若衆はオチユウゲンと呼ぶ。行列の途中お葬式行列に出会うのは良いことであり、他の嫁入行列に会うことは悪いといわれる。また、途中雨に降られると「降り込められる」といつてよいこととされている。

嫁が娘家に入る時に門口では近所の若衆が豆ガラを焚いて棒で道をふさいでいる。それを先頭の仲人が踏付けて入つて行く。この後若衆にム

スピと振舞い酒を出す。嫁が門口に入る時には女仲人がスゲ笠を嫁にさしかけてやる。「上を見るな」という意味である。嫁は嫁側から娘家に上る。この時姑が嫁を抱上げてやるのがしきたりである。

式は一番上等の部屋で行われる。新夫婦が正面に並び、座配、若衆三人、オマチ女房（近所の女人）一人、給仕（両親の抱つている子ども）二人が並ぶ。新夫婦の前には膳の上に蓬莱山、鶴亀、松茸（男根を

型どったもので大根で作り、ネギで陰毛まであらわす、これを作るのは若衆の役目である）を飾る。式は座配の指揮のもとに行われ、最後のサカズキは婿に贈り一杯酒が拂がれる。婿がそれを飲もうとする瞬間座配がはじく。この時婿は酒を浴びる程よいとされ、その後、若衆が踊りをうたつて終る。その後別室で家族のみで嫁と親子のサカズキを交す。こうして夜がふけて新夫婦の同食を見きわめて仲人は引上げる。披露は翌日行われる。嫁入道具はクルワの人々に見やすい場所に飾られる。

三日目が早帰りである。この時は義父母が嫁の実家に一見かたがたつて行くが日帰りが普通である。

嫁は姑の代りが勤まるまで何時までも嫁である。

#### ○木 島

口がため、仲人は嫁の世話をする。口がためのときには酒を一升もつてきて、まず男の方へ行き、つぎに女の方へ行つてはなしをまとめてきた。

結婚式 第一日はむこの方からくれ方へイチゲンに行く。これは仲人が室内して行く、このとき、嫁の仕度とか結納をもつて行く。嫁の家で式をあげる。式後、嫁を先によこしておいてから、嫁方のイチゲンがくる。これをおくりイチゲンという。もらい方ではとりむすびの式をやつて、そのあと、おくりイチゲンの座敷になつた。この座敷には、仲人のほかにおしょばんもすわつた。

式のとき、むこのはじめはその席にはいないで、三々九度のさかづき

がはじまるまでてきた。三々九度のさかづきのとき、一番下のさかづきに一杯の酒をついで、それをむこがのもうとすると、おしようばんの人がかっぱいて、むこに酒をあびせた。むこは酒をあびた勢いでさつとげだした、それで式が終ることになる。保泉も同じ。

### 婚礼の座敷

式場では夫婦はわかれています。また男女客と女客とにわかれます。また男女客と女客とにわかれます。

うばん	○女蝶	○男蝶
むこ	○	○
うばん	○おしゃ	○

わかいしゆ	○○○○○	○むすめ
男客の座席	○○○○○	○
女仲人	○	○おしゃ

押入れ	床の間
-----	-----

現在では第一日目に近所まわりをしてしまう。

この日嫁の在所から新客が来るのが例であったが、現在では第一日目におくりイチゲンとして来てしまって今はいない。

最近では二日目に里帰りをする（赤飯をふかしてホカイにいれて里へもって行った）。

三日目、サンニチの祝いといって、この日里帰りをするのがむかしか

らのならわしだったが、今は一日目に里帰りをしている。

ヨメムカイ 第一日目に村境までヨメムカイに行く。部落内の結婚の場合には、嫁の家の近くまで行く。これは近所のわかいしゆをたのんだ。もとはこのとき提灯をつけて行った。場所によっては、提灯をぶつけっこして、こわれるおめでとうございますといった。

仲人が先方のわかいしゆから嫁と荷物をもらいうけるのだが、この辺では、ここで酒もりをしないで、簡単な挨拶でもらいうける程度である。かどいれ 口がためだけでつれこんで、まだ祝儀をしないもの。あまり例がないが、二、三男で遠くの方へ行ってしまうようなものがした。（長男などはきちんと祝儀をする）

かどいれは口がためをして家に一、三日つれてきておいてから一旦実家へかえし、むこも顔みせに行つたりしていく、この間に忙しいことでもあると、泊りこみで嫁が手伝いに来た。式はあとであげた。中には式をあげないものもあった。

かどいれというのには、むかしほきがなかつたことであつて、最近の新しい傾向である。

むかしは、くらしむぎがよくなければいい祝儀が出来なかつた。まずもつた。本式に祝儀をすれば、四日も五日もかかつた。

氏神まいり 緯に行く前に氏神様と村の鎮守様へおまいりに行った。嫁に来た場合には、まず氏神様におまいりし、それから村の鎮守様へおまいりした。そのあと、近所へ披露を行つたが、このときは、一番近い親戚の嫁が案内した。

通婚闇 むかしは乗物を使かわなかつたので、近場から嫁をもらつた方がいいといった。

方向でいいわるいをいいう場合もあった。  
結婚と年令 むかしは十五才とか、十六七才で嫁に行った人もあった。

三つちがいや四つちがいをわるいといつた。一つ上の女はいいといい、これは金のわらじでたずねるとまでいった。

嫁の条件 いい嫁としては体が丈夫で気質のいいものとされている。

むかしは器量のぞみで嫁に来た人もあった。

おかけよめご 結婚前に特別の関係があり、無理に嫁入りしたもの

があった。この場合には、おしこまれたといった。

仲人とのつきあい 仲人三年といい、仲人とつきあいはふつう三年でいいとした。

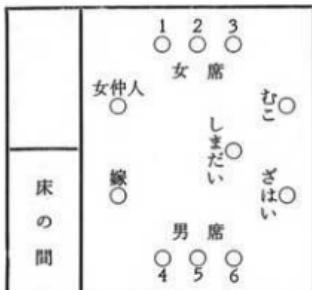
夜あそび わかいしゅはよく夜あそびをした。一年中どこへでもかまわず出かけて行つた。娘をもらうまでは夜あそびをした。夜あそびには

よく一人づれで出かけた。夜あそびに行つて先方のわかいしゅにみつかれば、利根川とか広瀬川になげこむぞなどといわれておどされた。むすめの場合には、村内ぐらは夜あそびに出かけた。

### ○伊与久

#### 結婚式の座席

一、とりむすびの席  
とりむすびの席



1・4 まち女房という。男

の場合にもこういう。これ

は若い衆の未婚者で、両親

のそろつているもの。仲間

うちか、よそからたのん

だ。

2・5 成年式を終えた二十

才代のもの。

3・6 未嫁の十代のもの。

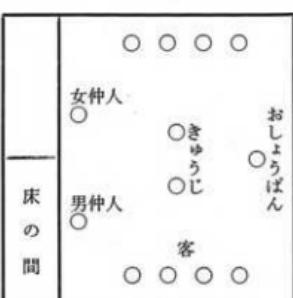
しまだいには、鶴、亀のか

ざりものをおいた。

ざはいの役は、とりむすび

の席の世話をすること。近所のものでも親類のものでもよかつた。近所の子供男女をたのんで、酒つきをさせた。ざはいの指揮で、三々九度のさかづきをかわした。  
嫁むかえ 今から四、五十年ほど前までは、嫁むかえは七分三分といい、もらいの方の方で余計にむかえに出た。村境より遠くまでむかえに行つた。むかえに行つたのは若い衆で、酒をもつて、提灯をつけて行つた。荷物もひきうけて来た。

### おしょうばん



かど火 嫁を家にむかえるときに、門先でかど火をたいとおぎこんだ。姑がだきかかえておく座敷のえんがわから、座敷にいれたりむすびが終ると、新客（いちげん）の座敷になる。

二、いちげんの座敷

いちげんの座敷には、おじょうばんが一人、おきゅうじが二人つくなつた。仲人が案内して嫁の家へ、むこと、むこの近親者をつれて行つた。いちげんの座敷で、親類を紹介してもらつた。

近所まわり、嫁、婿の近所まわりは、近親者が盛装してつれてくる。嫁のまわる範囲は、祝儀の際によんだ家と役員の家くらいである（村内の親戚、手伝いに来てくれた家、婿の同年の者の家）。むこの方が広範囲にまわつた。大体、区全体はまわつた。この際もつて行つたものは紙二、三枚（おもてに名前をかいておいた）。

○上矢島・東新井

足入れ 緋入りがむすばつて、いい日をみて足入れをしておいて、後で忙しい時に行つたりした。これはあとで結婚式をあげる。式は一年もたつてからあげる家もあり、一ヵ月後にする家もあつた。

式をあげる前に破壊になることもあり、仲人が苦労した、足入れの形をとつたのは、長男でも一、三男でもあった。また、金持もそうでないものも、遠くのものも、近場のものも足入れの形をとつた。（上矢島）あしいれ フロジキヨメゴとも、お仲人様が、嫁の荷物を持って来る。（東新井）

○中島

今でいう恋愛関係で結ばれたものをタツツキアイとか、ナレアイとかいって、人々から後指をさされた。家がら、財産、筋が主要な条件で、これらがうまくいかないと、恋愛関係があつても、親たちからはたいてい反対された。親子の縁を切る、とおどされてやめになつたり、あくまで通してしまつたり、ともかく一悶着起つた。

むかしは顔も見しないのが普通で、仲人が来ると、おじさんだの、おばさんだのが集まつて決めてしまつたのが普通。（話者は）見合がした

いと言つたら、そんなもんはいるもんかい、見たけりやあ、おばさんに行つてみてもらえ、と父に云われた。それでもというので、たつて一人で見に行くことになつたが、その家のそばまで行つてみただけで、ついに会うこともできず、顔も知らない人（現在の夫）のところに、嫁に来てしまつた。見合いすら普通ではなかつた。

仲人 ひまがあつて、世話をきの人がする。仲人のナナズンボ（七つのうそ）、仲人のゾウリックラシなどと言われる。特に正式に頼まれた仲人をタノマレ仲人という。

足入れ 話はきまつたけれど、一年、半年待つてくれと言つた場合、嫁を早晚かりていつて泊ませる。中にはアシイレつきりしない家さへある。

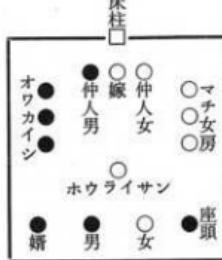
樽入れ（口固め） 仲人がくれ方に（こちらが先）一升、次にもらひ方一升の酒を持参して正式に約束する。その時は双方とも、叔父、叔母も集まつて、正式に挨拶し、日がら衣裳、結納等をきめる。

結婚式 式の前日を結納振舞と言い、当日を本祝儀と呼び、翌日里帰りを行なう。

イチゲン むこを先方へつれていくのを朝イチゲンといい、仲人が双方の親戚の住所、続柄を紹介する。これをチカヅキといふ。朝イチゲンが帰ると、嫁をつれて行く。これをオクリイチゲンといふ。

嫁が門に入る時は、豆がらを燃す。また竹竿を横において、それをまたがせて入る、近所の若い衆が、外から笑でおぐ。家に入れる時には、縁先で、嫁と姑のオヤコノサカヅキをして、姑が嫁を抱き上げる。

式をとり結びといふ。とり結びはトマノデーで行なわれる。団の



通り位置する。嫁は真綿でできている綿帽子を被ったが、のち角かくしに変った。待ち女房は娘一人と嫁一人だった。男嫁、女嫁は、それぞれ両親のそろつた少年少女。ホウライサンは、大根で、男根、女根をつくり、これを台の上に載せたもの。

とり結びは、座頭の指図によって三々九度の盃。始め一献で「高砂」次に一献で「四海波」、次に一献で「庭の真砂」の謡曲。この三献目の時、オカイシの人が、嫁の盃をかづいて、盃をとばす。この酒のよごれのために、嫁は正装をせず、ふだん着のまゝ出ることになつていたという。最後に「高砂」をやつて終る。

今はほとんど、このようなとり結びはしなくなつて、神前結婚などがやつしている。

とり結びのあとオカイシは、ワカイシザシキがあつて、十分御馳走になる。とにかく若い衆がいなければとり結びはできないことになつてゐる。ある時、若い衆の機嫌を損じたら、ワカイシガシラが遊びに行つてしまつて、式ができなくなつたので、迎えに行って、機嫌を直してもらつたことがある。

里帰りは、マゲに結つて実家に帰るが泊らなかつた。その翌日がサンニチノイワイ、またカネツケといい、赤飯をふかして嫁が嫁の家に届ける。

○小此木  
だいたい中島に同じ。若



嫁がかぶつた綿帽子—中島

い衆が嫁を迎えて来て、中宿に送りこむ。中宿から嫁家へ入るカイドウには、若い衆が待つていて、青竹をまたがせ、またぐと同時に竹を上に持ち上げる。その他大同小異。

若い衆は必ず四人ときまつていて、年令はいつさい構わらず、必ずしも青年でなくてよかつた。またこゝにも、その權威のほどを伝えているものがあった。この若い衆につむじをまげられるといへんで、式を落となく終すことができなかつた。一度この部落でも、仲人が横柄だというので、若い衆が怒り、二時間近くも式がおくれたことがあつた。

## 若 者 組

### ○下測名

十五才から三十才までの男子はワカイシの仲間に入る。ワカイシはチヨウ頭、チヨウ脇、使子からなつていて、チヨウ頭は指導者で、チヨウ脇が中堅、使子は新参者である。他部落からきた嫁は年をとつていても新参者である。

入会する時には一升立てる。また団体行動に加わらなかつたり、先輩の言うことをきかなかつたりすると時々ノマレた。ノマレルとは一種の罰金である。意地悪の先輩は何かと理屈をつけて飲んだものである。

ワカイシの仕事は大國神社の祭礼の時に獅子舞をし、棒を使うこと、ノボリを立てること、毎戸に燈籠を立てるこ、婚礼の謡いで、これは村の生活にとつて重要なことであった。

### ○中 島

むかしのワカイシは男女問題はとくにうるさかった。よそから来いいわい、またカネツケといい、赤飯をふかして嫁が嫁の家に届ける。

○長樂寺に通つてしまつたということである。

明治のいつごろか、有志によって燐風会ができた。これは義兄弟の関係を結び、試作地の共同作業もやった。義務労働であった。

必ずしもワカイシに限らないが、ワカイシが喜んでやつたのは、花火を上げることであった。最も盛大だったのは、日露戦争の終りには、二十間ぐらいの小屋をつくって、村中であげた。たいていの家で花火を上げる筒はもつていたし、花火でシンショウをすつちまつたという話もある。

夜遊び 若い者の組は特別にはなかつた。気のあつた者同志で、よく遊びに行つたもんだ。コワカイシは年輩者にひきいられて、八木沼、世良田、矢島など、三か村も四か村も向うまで行つたもんだ。とくに世良田の祇園のころは、盛んだった。

おやじはどこのおやじもみんな敵格であるさく、「夜遊びしてつとめができねえよなさまだら夜遊びなんかすんな。」と言われたので、朝起きるのも家人の人みなには起きたが、仕事はつかつたな。世良田の祇園のころ、昼間すつかり眠くなつて、チガヤの中で寝ていたら、アリンドウ(蟻)にさされ、ひでえ目にあつたこともある。またアワの草むしりにおやじと出ていて、居眠りながらやつていたので、アワまでぬいてしまう。その音で、隣にいたおやじが気がついて、「このやろう。」とおこられたこともある。

ヤドというほどのものになかつたが、村の駄菓子やなどがタマリ場になつていた。娘の方は、機仕事があつたから、気のあつた者が一緒に泊りこんでやつたこともある。そんな時に、若い衆がやつて来て、さんざオダを上げて行くことはもちろんさ。

女の場合でも、世良田祇園のころは、夜よく出かけた。(話者の)おばあさんは「女なんちゅうものは、いぐもんじやあねえ。」などいつていたが、行きたくて、行きたくて、そしたら母が、「そんなに行きだけりやあ、早く行つて、早く帰つてこいや。」といって、そうつと、裏の

二階の外からはしごをかけてくれたので、とんでいったもんだ。

## ○保 真

伊与久では満十五才から三十五才までの青年(男子)で構成され、おもに消防の仕事をしていた。十五才で新参になる時は酒一升買つた。若い衆頭(がしら)は満三十五才になり、世話人の役をする。

娘組はた織り連中で作る。十五、六才から嫁入りまでの娘がはいるが、別に宿はない。昔は祭文やチョボクレなどの余興を集まつたこともある。

## ○下 清名

ニユウトウ 八月の適当な日を遊び若衆が新築した家を宿に集まつて、ゲンノショウとドクダミを入れた薬湯をわかして入浴、骨休みをすることで、自炊で御馳走を食べたり、飲んだり、バクチをしたり、勢がつくと深谷あたりの遊廓まで行つた。

## 力 石

寺に埋めてしまつたが二十八貫あつた。  
かつげない人が多かつた。

三十貫かつけた人は

石屋の吉やん

水戸屋の光ちゃん  
杉山のじいさん

ぐらいであつた。

トヨバのセンさんは三十三、三十五貫のもの力石をかついたという。

厄年

四才の男女は反町薬師へお参りに行く。

十九才の女と二十五才の男は正月四日に反町薬師へお参りに行く。

またヤク落しとして部落の男が集つて八木節をやつた。(下瀬名)

男女四才になると一月四日に反町薬師へお参りに行く。

「七つの子があると屋根替えるな」といわれている。

男二五才、四二才、女一九才、三三才は厄年で西新井大師にお詣りに行く。

また女三三才の時は実家よりウロコの帯を贈られる。(上武士)

葬制

○南米岡

前知らせ 人が知らぬ直前に魂が抜け出て火の玉となるが、二十歳までに見ない人は一生見ないという。以前は見た人がいたが、今はそんな話を聞かなくなつた。

人が死ぬと寺では変った音がして前知らせがある。死者が男なら寺の文閑や仏壇で音がするし、女ならお勝手の方で音がするといふ。

忌中 人が亡くなつた家では、死者の着ていた着物を廊下に吊るしておく。また、さん腰にかまどの灰をのせて道ばたに出しておく家もある。魂呼ばいなどはしなかつた。

枕だんご、魔除け 死者は北枕に寝かせて、清めに線香をたいておく。そばに昔は刀を少し抜いて置いたが今は小刀やほうちょうなどの刀物を置いて魔除けにする。この部屋にはネコを入れないようにする。ネコが死人をまたぐと、死人が踊り出すといわれる。

死者の枕もとに、枕だんごまたは枕飯をクロ米(玄米)で作って供え

ておく。

告げ 親戚の者が二人ずつ組んで、寺や役場・医者、遠い親戚などへ不幸の知らせていく。これをフグといい、知らせを受けた家では「清め」といって、必ずお膳を出しきたりだった。今では一人で行ったり、電話で連絡したりする。

耳ふさぎということはしなかつた。

不幸見まい 人が亡くなると、区長からフレが回る。すると村中の人が行つてお見舞を申してくる風習になつてゐるので、ふだん呼び合ひしない人まで行く。ふつう南米岡の半数ぐらいの家からは不幸見まいです。不幸の家に上がつて、「お亡くなりになつたそうで、お悔み申し上げます」などとお悔みを述べ、別に香奠は包まない。喪家からはお茶だけ出す。

日取り 葬式の日取りは友引きの日をさける。どうしても友引きの日にはやらねばならない時には提燈をつけてする。提燈をつけなければヨウマ(夜間)の分だから、夜は次ぐ日の分と見なされるので、やつてもいいとされる。

生まれ替り 死んだ人の足の裏などに字を書いてやると、その人が他の家の赤ん坊に生まれ替つてくる。赤ん坊に現われた字はその人の墓場の土でこすつて洗え落ちるといわれる。話者の新井きくさんの姉が二十才の若さで亡くなつた時、まだ二歳の子が残されてあまりせつない(かわいそう)なので、且那が姉の手に筆で字を書いたり手紙を書いて棺に入れてやつたりして埋葬した。どこかに生まれ替つていると思われるが、そこまではわからなかつたといふ。

ニワバ 葬儀の日の朝、南米岡の村から一戸一人ずつ出て喪家へ寄り、庭にむしろ敷いて葬儀用のハナ・ろうそく立て・辻ろう立て・高張りなどを作る。これをニワバといい、寄る人は香奠を包まないし、喪家からお茶を一ぱい出すだけである。

湯漬・入棺 ふつうは葬儀の前の晩、または親戚の寄るのを待つて湯

灌をする。近親者がじゅばん一枚になり繩を帶にしてたて結びにして身じたくをする。昔は死者をはだかにして、湯をかけてふいたが、今は略して紙でふくだけにする。そのあと棺を入れる。

昔はかめ棺が多かつたが、木の寝棺と半々らいである。かめ棺には顔を北に向けて入れるし、寝棺なら北枕にする。(だからふだん着物やショウギなど北向きに置くのを忌む)。入棺する際、すだ袋に入文銭を入れたが、今では六文銭を紙に印刷したものを使金として入れてやる。三途の川の渡し貨だといわれる。

入棺が終ると、使用した物をまとめてすぐ川へ流しに行く。この時に家の裏口から出て行って、帰つて来た時には、たらいや臼を置いてはいるまねをして、塩をまいてから家にはいる。

墓地 個人持の墓地が多く、個人墓地は屋敷の隅にあるものが多い。埋めた所へあとで石塔を建てる。以前は個人墓地にもアミダ堂や薬師堂があつたが、大がい朽ちて今はなくなつた。

長光寺・總持寺・蓮葉院などの寺に墓地がある時は、いく人かずつ交替で墓地管理者になつてゐる。死者の戒名や生年月日などを管理者の所へ届けておく。

穴番 南米岡では村全体が六人組に分かれで順番で穴番に当り、墓穴を掘つてやる。トコ番ともいう。「墓地を買う」といって、墓地を教える人が、墓穴に當る所に百円置いていくか、または穴の四隅に當る所にお金を十円ずつも置く。そのお金を穴番の六人が施主の所へ持って行く。穴番が墓穴を掘り、棺をかついだり、土をかけて埋めたりする。穴番には昼食が出るし、引き物も出される。

野辺送り 座敷で僧侶に拝んでもらつたあと、死者の棺を送り出す。行列に参加する人は喪服か、喪章をつけ、近親者はさらし木桶の三角の布を頭につける。

跡目相続人の男子が位はいを持ち、えりに印しをかける。相続人の嫁が髪を持つ。その外の役割りが発表されて行列が組まれる。行列は辻ろ

う・四方旗(竜頭)・燈籠・送り花・膳・位はい・棺・僧侶・親戚一般の順に並ぶ。式によつてはまき錢をすることがある。

辻ろうの燈明は、竹の先を割つて三本のろうそくを付けたもので、ころうそくは初産が軽くすむ呪い(まじない)になるので取つておく。初産の者が産氣づいたらこの燈明に火をつけると、燃えきるまでに生まれるといわれる。

位はいには長い網の布を掛けるが、長生きした人の布を下げるもらうと縁起がいいといつて、分け合つてもらう。

行列の人にはわらぞうりと半紙一枚が配られる。半紙は頭にかかるまねをして、耳もとに挟んでおく。わらぞうりははかないで持つて行き途中で棄てるが、これを持ってきて養蚕の時にはくと蚕が当たるといふ。

墓地につくと、棺を穴の中に降ろし、近親者が思い思いに土こごなりを三辺投げ入れる。その後、穴番が土をかけて埋める。

墓直し 葬式がすんだあとで親戚などが帰つてから、家の人が都合をみて墓直しをする。棺を埋めた上の土を長四角の台状に盛り上げて、竹を横に並べて階段を作つたり、四隅も竹できちんとおさえたり、花輪の花を抜いてその上にきれいに立てたりして飾りつける。塔婆を上に立てその後に野位はいを置き、膳を供えつける。別に魔除けの仕かけはしない。

当日から一七日まで七日間は毎日墓参りをして、膳の水を替え、線香を立て、生き花を供える。

七本ソトバというハギッカワで作った物が立ててあり、一日墓参りするごとに一枚ずつ裏返しにして来る。

一日のうち死後七日めに寄つて供養をする。この時に丸いだんご三個、つぶしたんご三個、かくしだんご一個、計七個のだんごを作つて墓上げる。かくしだんごは位はいの後にかくしておく。一七日から四十九日まで墓参りに行く。

流れ灌頂 お産で死んだ人の場合、用水桶の端に四本の杖を立て、さ

らし布を掛け置き。通る人にひしゃくで水をかけてもらうと、後生が良くなるという。昨年やつたのを見たという話では、別に名も書いてないし、供え物もしなかったという。

棚上がり（四十九日）死後四十九日めをお棚上がりといつて、部屋に飾ってあつた位はいを仏壇に上げ、先祖の位はいと合同にする。だんごを作つて仏様に供えたり、餅をつく家もある。親戚や隣組が寄つて供養し、まんじゅうを配る。

四十九日のだんごをうでた時のカマドの灰や、かまの中をかき回したしゃもじを、俵っぽしに乗せて三本辻へ出して置く。

死後四十九日間は死者の魂がその家の屋根の棟に残つていて、その後家の都合で三十五日で仏を上げる場合もある。

西方百万億士へ旅立つと考えられている。



イモビツ（前方の二つの土盛りがまだ石塔の墓で、外形からこの名がある一小此木）

四十九日の餅 農家では四十九日の餅を、十日夜について寺へ持つて来たから、寺ではたくさん集まつた餅を近所の子供にくれたりした。あんを入れない丸め餅を四十九個と一個余分に持つて來た。寺でその一個を返してやると、家の人が墓地へ持つて行つて埋める。この餅は死者は仏の仲間入りができるといわれる所以、四十九日の餅は必ずついた。



墓（埋葬後墓直しをして、花輪の花を飾り立てる一小此木）

三年忌をする家もある。  
イモビツ 墓葬後、まだ石塔を建てない墓は高さ三十cmぐらいに土盛りして、その上に石を目印しにして置く。この形が里イモを冬越しさせる時に穴を掘つて埋めておくのに形がよく似ているので「イモビツ」といい、「うちにはまだエモビツがあるから」などという。

三十三年忌 死後三十三年忌には、葉つきの塔婆をたてる。杉の二まになつた木に葉がついたまま皮をけずつて、逆さにして塔婆として墓の上に立てる。三十三年忌から仏が神にかかるといわれる。どこへ行くかは不明。

また、十三仏様が四十九日まで守つてくれると、いうので、十三仏様の餅は別にあ

ておく。今まで仏だったものが神に変わるとわれる。その神はウジ神ではない。

○小此木

死の前兆 烏なきが悪いと人が死ぬ。

人だまが飛ぶと人が死ぬ。

人が死ぬ時は、寺の本堂の戸をたたいたり、鐘をならしたりするので、お寺ではわかるという。また女は寺のお勝手の方に来るということである。

雲呼び おしな婆さんが死んだ時、身寄りの者が井戸に向かって、オバサン オバサンと呼んでいた。

葬式送 死人は早速枕にして刃物（刀、ほうちょう）を死体に載せておく。魔除けのために。

ツゲ 必ず二人でゆく。シノギ（食物）を必ず出すものである。

葬式組 道北が二組、南が二組あって、北に葬式があつた場合は、南

は会葬するだけで一切を北がやり、南に葬式がある場合はその反対。

ニワバ だんご、花かざり、ツエその他の道具をつくる。

トキ 野辺送りが終つてから出す事。

オタナアガリ 四十九日。時には三十日目にする場合もある。餅をつく。そのうち四十九この塙あんの餅（四十九の餅といふ）をつくつて寺に持つて行く。親戚、近所の者がお包みを持って行く。酒も出て、御馳走する。茶器、お盆、火鉢などをお返しにする。

年忌 一・三・七・一三・二三・三三年目などにし、そのうち二三十年をウチアゲという。

○木 島

葬式のことをトムライといふ。

死の予兆 からすのなき方によつて知る。からすは、死ぬ人の近くでなくといふ。からすのしつぽの方が死ぬといふ。

ひとだまがとぶと人が死ぬといわれた。

二十才前にひとだまをみると、その人は何度もみるといふ。二十才後にはみなければその人は一生ひとだまをみないといわれた。たとえ、二人でいて片方の人にひとだまがみてもその人にはみえないといふ。また、ひとだまは、身内の人よりも、よそのものがみる場合が多いといふ。

お百度ふみ

身内に病人がいるとき、丈夫にしたいとき、神社で百度ふみをした。日華事変中には、村中の人が神社へ出て、出征軍人の無事祈願をお百度をふんだ。

死後の魂 死人の魂は、四十九日の間、その家の棟についているといわれている。

枕団子 身内でない近所の女のとしょりが、べつかまとでつくった。

このときは、なべにふたをしなかった。

死者のねかせ方 北むきにねかせた。近所の女衆がつくったキヨウカタビラを死人にさせた。

ツゲ 死亡通知役をツゲといい、一人で行つた。親せきへ行つた

が、何ももたずに行つた。身支度はふだん着程度のものであまりかまわなかつた。

喪の期間 一週間程度、人が死んだとき、のら坊主でもくれば、にぎりめしきらいは出した。

耳ふさぎ 「同年が死んだつうで」といつて耳をふさいだ。  
清め、葬式につかたものと、灰とかしゃくとかをかどさきにして、

まくらだんご まくらだんごは六つ、粉は大抵四合とか、一升四合といふ具合に、四のつく分量をひいた。

穴掘り 穴掘りは順番があつた。これは葬式の出た家とは別の組のものが出了。穴掘りのことはパンタテといふ。

葬具 木島中のものがあつてそれをつかった。

湯かん 湯かんは親類のものがした。

野辺おり 穴を掘った人が車をひいた。

見送りは近所の人とか知人。

墓では見送りにきた近しい人たちが、穴に土をなげこんでかえつてきだ。

葬列に参加した人は三角の紙を耳にはさんだ。ぞうりは家を出るとすぐにしてた。

野帰り 墓からかえつてきだら清めをすこしだした。かえつてきた人は、塩で体をきよめてから、とぶ口のところにだしてあるたらいで足をあらうまねをした。

親せき 近いところに葬式があつた場合に、四十九日以内であれば、正月のおかざりはやらない。

盆の場合は、死んでから三十五日（あるいは四十九日）たつていれば、新盆をするが、それ以内的場合には、ふるい盆だけをする。死後四十九日たてば、古い仏様の仲間入りができるという。あらほんには、正式には二つの棚をつくるわけだが、今ではなわで棚を二つに仕切る程度である。

とむらいあげ 三十三年忌がすむと行がおわって、お神になるといふ。もとは杉の生木をけずって或名を書いて、墓にたてたが、今はとうべをたてて、その先に杉の葉をしばりつける程度。

まくらだんご 米の粉をひいてつくる。近所の女衆（子供を生まなくなつたもの）がつくった。

粉をひくときは、四人で石臼をまわした。だんごは百二つくり、それを三組にわけて、その中から一つずつとつて葬式のはなどをつくる。ワバの人たちとだんごをつくった人たちがわけてたべる。のこりを七つずつ、くじにさしてわらでつくったまくらにさした。

○下渕名 死の子光 人ダメが飛ぶ。鳥が泣く。

死亡通知役 死人が出るとすぐフレが出る。これをフグに行くといふ。行くのは茶グルワ一人前の男子で二人一組で一場所へ行く。行き方は死人の親族、親しい人のところで、三、四里先まで行くことは珍らしくないことではない。ツゲに米られるとウドソと酒を振舞うことになつてゐる。

お寺には死ぬとすぐ両隣から知らせに行くこれを足ドメといふ。

湯灌は親族がするが、男は上を、女は下を洗うことになつてゐる。

湯灌をする人は繩の帯をする。従つて普段「繩の帯をするな」といわれる。

使用した湯は樽と共に川に流す。

棺は昔はカメ棺でカメがない時は堅棺を使用した。堅棺の高さは一尺二寸と決っていた。従つて「一尺一寸の着物を着てはならない」といわれる。

ひがり 死人が出ると家の入口に「忌中」と書いた紙をスダレに貼つてさげる。

神棚は葬式まで簾の葉でかくす。これを筆ビキといふ。

埋葬後の死人の上をマモノが通ると死人がおどり出すので刃物と一緒に埋葬する。

また埋葬の時施主が棺の繩を切る。これは「縁を切る」という意味である。

枕飯、枕ダンゴを作る時に使用するカマド、ナベ、サントクは別のものである。他の道具は一週間放置しておいて洗う。灰はウチカイト（家から大通りに出る角）におき、葬式の時のオハライに使う。

葬式終了後、近親者は最後のキヨメとして酒を飲む。これをドウジョウバライといふ。これと同時に明りを消し、神棚の簾をとる。

初七日を七日ビといつて茶グルワの人々をお茶呼びする。茶グルワの人々は墓参りの後に集まる。

三十日たつた日をハツビという。この日はアン餅をつき墓参りに来た

人々に出す。

四十九日 この日棚上りといつて仏壇に入る。餅をつき、アンの入らぬまる餅四十九を寺に持つて行き、おがんでもらった後に墓に供えるが、中一つは墓にいける。この日は親族、茶グルワの人々に接待する。

死人の魂は四十九日の間家様をはなれないといわれている。

子ども葬式には親は参列しない。

### ○上 武士

葬式の呼び方 ジャンボン。

死の子兆 島が泣く。

人 魂 人が死ぬと人魂が飛ぶ。昔は兵隊検査前に人魂を見ないと一生見ないといわれた。

ツゲ 近所の人が一人で三里くらいのところまで死人の親しい人に伝へること。

枕ダンゴ 玄米の飯でツブシダンゴを六、丸ダンゴを二個つくる。二個は地蔵サマのためのものである。いずれも死者に供える。別にダンゴを一つカクシダンゴとして初七日まで位牌の裏におく。

葬式の飲食に使つた道具は四十九日まで使えない。灰やシャモジはサンダララに乗せて三本辻に捨てる。

喪家の標識 「忌中」と書いて家の入口に貼り出す。葬式の日のみ。

神 棚 神棚に筆をヒク、この間神さまは南天の藍にかくれている。

四十九日たつて忌明けをドウジョウバライといつて筆をとり三本辻に捨てる。

ハツビ 死後三十日をハツビという。この日に餅をつき新仏に供え

る。この餅を力餅といい、仏に力がつくようなどいふことである。

忌明け 四十九日が忌明けでドウジョウバライとも棚上りともいふ。

湯 灌 横に湯を入れ、女はタスキ、男はナワオビ（これをタツコオビという。）で洗つてやる。洗う男女は近親である。

使つたオケは川に捨てる。

棺 戰前はカメ棺であったが、今は木の寝棺である。

チカラメシ 葬式の説教中ケツミヤクといつて肉親は飯を食べる。これをチカラメシという。

キヨメ 葬式の後埋葬から帰るとその日の中に道具を酒と塩でキヨメ、よござれたカマなどはノキ下でよござれを落す。また葬式の参加者も酒と塩できよめる。

オイダシ念佛 葬式後、近所の老人が集つて念佛を初七日まで毎晩やる。これを後念佛ともオイダシ念佛ともいう。

## 族制

### はじめに

族制関係の資料としては、本県の平坦地方の一般的な傾向を示しているようである。したがって、とくに目立った資料は見当らない。同族の結合もそれほど強固でないようである。イッケの氏神はないし、いわゆる冠婚葬祭の際にも、地縁的な隣組との混合がみられる。

家族の私財については、ホマチとヘソクリとヨロクの三語を見ることができた。

本県のこの種の用語についてはすでに「片品の民俗」、「上野村の民俗」、「板倉町の民俗」、「六合村の民俗」等の報告書の中で報告しておいたが、境町での用例は、一応注意して見る必要があるようにおもう。このうちヨロクが男衆に関係した用語であるという資料を伊与久でえたが、これは今まで気付かなかった新しい点である。

本県のホマチとヘソクリとの関連をこく簡単にみると、東毛地方においては、ヘソクリ公認、ホマチ非公認の傾向がみられ、中毛から西毛地方にかけては、ヘソクリ非公認、ホマチ公認の傾向がはつきりしている。ところが、境町においては、中島と上武士の報告によれば、ヘソクリ公認、ホマチ非公認で、他地区の場合には、この反対となっている。例がすくないので、これだけで判断することもむずかしいが、境町の位置からみて、この語の用例にかぎってみた場合に、東毛と中・西毛の境界、あるいはそれに近い位置にあるのではないかとおもわれる。この

問題については、他の民俗資料とあわせて、今後の調査研究にまちたい。

### 族制一斑

#### イッケ・ナカマ

同姓のものをイッケ・イッケウチ・一族・ナカマなどと苗字につけて使われる。「吉沢ナカマは大きい」といえば、一族の者の家が多いことを意味している。(伊与久)

伊与久の須田イッケでは二十人前の隣腕がそろっていて、本家で管理している。もとは村に一、二軒は何でも間に合うように道具をそろえた家があった。

また、養蚕時などに小さい家では本家の倉にたんすなどまで保管してもらっている例もある。

仲間は先祖が同じであるが、つながりに遠いのと、近いのがあった。これは血のつながりがこいのとうすいのどちらがいいである。仲間といふのは本分家の関係が中心だが、奉公人を分家した場合にも、苗字をやって仲間としてのつきあいをしている。(伊与久)

#### フデー(譜代)

奉公人などで宅地や姓をくれて家をたてさせてやる場合これをフデーと呼ぶ。特に本分家関係がいつまでも続くことはないようである。(中島)

### 先祖祭り

伊与久の細谷イッケでは、年一回春の彼岸ごろに先祖祭りをする。

円勝寺の大門にある先祖の墓に一族が集まってお参りする行事で、集会の宿は回り番でしている。大正時代に始まつた行事らしいという。

館野の宮崎イッケも先祖祭りをしている。彼岸の中日に一族が寺へ行き、塔婆を作つて立て縁香を上げる。

吉沢ナカ（でも本家（もといえ）に先祖様といわれる石碑がある。先祖祭りを始めたといふ）。

### 禁忌作物

以前はイッケによつて作れない作物があつた。何のために作れないのか、理由はつきりしない。

終戦後は何でも作るようになった。伊与久では、須田イッケや小林イッケはキニウリが作れない。小林イッケでは、ある年に天王様にお初を上ればキニウリを作つてもいいといつて、キニウリを作つて世良田の天王様にお参りに行つたところが、こう

もりがさを担いでいる人が前にいて、そのかさの先で目を突いて片目をつぶつてしまつたので、やはりキニウリは作らない方がいいといつて、今でも作れないでいる。

松村イッケではヤツガシラとゴンボウ（牛蒡）が作れない。一回作つてみたらその年に病人が出るし、親類で作った家でも熱病人が出たたの

で今でも作らない。

深町一族ではトウモロコシが作れない。トウモロコシは火に焼いて食べる所以、作つてもし火事になると困るから今でも作らない。

田島イッケでもトウモロコシは作れない。

芝崎では赤飯をふかして火事になつたために、赤飯をふかさない家がある。

平田イッケではヘチマとヒヨウタンが作れない。近所にはサツマイモやショウガを作れない家もある。作れないといわれれる作物を無理に作つてみると、おおくマツバにいくので（偶然にビタリと何かが当るの

で）どうしても作れないと老人たちはいい、老人たちのいるうちには、今でもなかなか作らないようと思われる。そのほか、一般にアワ・ソバ・キビなどはあまり作らない。今では作つてもかまわないといつて、それほど、作りたがらない。

南米岡の金井イッケではセチ餅（正月の餅）がつけない。十二月一日に川ビタリ餅をついてから以後、正月うちは餅がつけないので親類からもらつたりする。三月三日のひな様まで白が出せないが、その後の餅をついてお返しをする。昔、戦争をしてから餅をよしたといいつたえられ

ている。

（正月の餅については年中行事の項参照）

木島の高木家では、どうもろこしと、とうなすがつくれなかつたが、第二次世界大戦後に神道さん（神主）におがんでもらつてつくるようになつた。

伊与久の真下家では、へちまをつくつてはならないとしている。

伊与久の新井一家では、きぬうりをつくつてはならない家と、さつまいもをつくつてはならない家とがある。

### 屋敷神（ウジガミ）

屋敷神は各家にあり、稻荷様である。まつりりは各戸で、寒に入らないう冬以前にしている（上矢島）。

屋敷神は石宮のものもあるが、ここではわらのお宮のものが多い。毎年お宮をあたらしくくりかえした方がいいといった。これは寒に入る前にしろといわれている。家によつてはオクンチなどのおまつりの日にお宮をつくりかえしている。

稻荷まつりには赤飯・魚・御神酒などをあげた。

火事があつた場合に、稻荷様に水をかければ風の方向がかわつて火難にあわないといった。

子供が稻荷様のお宮をこわしてあそんでいても、それは、稻荷様がい

さんでいるのだといって、子供にこごとをいわなかつた。

たとえその家がつぶれても屋敷神（稻荷様）はそのままにしておき、その屋敷をうけついだ家でひきついでおまつりするならわしである。

（上矢島・伊与久）

屋敷神のことはウジガミさまといい、大抵の家は屋敷の乾の方角におまつりしている。（木島・伊与久）

この辺では先祖まつりはあまりやっていない。また、イッケごとでおまつりしている神様はない。家ごとに稻荷様（ウジガミさま）といつている）がまつてある。稻荷様のおまつりは、大麻をうけてきてから、正月前にいい日をみつけた。大概冬至前になる。稻荷まつりには赤飯をした。また、かしらつきやとうふをあげた。稻荷さまにおまいりするのは、遠くに旅行に出かけるとき、嫁に行くとき、嫁をもらったとき、子供に名前をつけるときなどである。

新宅に出た場合の氏神は、地まつりのときにつかた竹を屋敷の乾の方にもつて行つて、稻荷まつりの日にあたらしくつくつた。（伊与久）

#### 身上わたし

あとつぎのこと。明治大正の頃までは、長く身上まわしをしていて、なかなかわきなかつた。最近は早く身上わたしをするようになつた。

むかしは、たとえ片親でも財布じりは親にまかせていた。そのため親が死ぬと同時に身上をまかされるようなこともあった。主婦の場合も同じように、むかしほど長く身上まわしをしていた。姑が米びつに手番をしていて、娘に手を出させなかつた。むかしは、姑が財布をにぎつていて、今日は米をいくら煮る今まで差違したという。姑は、自分の体が動かせるうちは身上まわしをしていた。

最近では娘をもらえば、若いものにまかせるようになつた。まかせ方は、仕事によつて順にまかせるという形で、たとえば、春蚕から娘におまえ、今度からやつてくれ、というようにまかせていくやりかたである。（木島）

#### 身上まわし

家計上の大きな収支は且那が関係していく、これを身上まわしといつた。小さな収支はさいふじりをにぎつたといつて、かみさんとか、嫁があつかった。さいふじりをにぎつたものがあつかったのは、電気代、新聞代、ちょっとした買い物などである。

身上わたしはとしをとるとする。大体六十才くらいになると、そろそろ身上わたしをしたようである。（男女とも）。（伊与久）

#### オチッコボレ

オチッコボレがあるから百姓は食えると、むかしからいわれてきた。オチッコボレというのは、小さい収入、臨時の、計算に出ない収入のことである。

計算上からいえば、小作人などは食つていけないわけだが、オチッコボレがあるので食つていけるといわれた。

女衆の収入もオチッコボレであった。はたのおりちんの一部、野菜、くずまゆ、たまご、米などを売つてすこしばかりの収入をえた。（伊与久）

#### 隠居

時としてはある。むかしは隠居免というのが三五反あつた。そのあがりをとしよりは生活費にあてていた。

#### 隠居するの家人との不仲の場合が多い。

隠居するの家人との不仲の場合が多い。隠居免をもつて隠居屋をつくつて出る人もあり、こい（主屋からはなれた別棟）に出る人もあつた。隠居が死んだ場合には本家でひきとつた。

隠居は村役からはずされていた。

隠居は本家でつくりどりする場合もある。隠居免をもつて出たといいのは名前だけ、収入もなく本家からもらつて暮していたのがあつ

た。したがってこの場合は、隠居といつても別居しているだけというこ

となる。(木島)

#### 新宅(分家)

新宅には嫁をもつてから二、三年して出る。分家するときの財産の分け方は、大体新宅の方が四分ぐらいもつ。家は本家につくつてもらう。新宅は本家より前に出るものではないといわれている。親がすでになくなっている場合には位はいをもつて出るのがふつうだが、そうでない場合は、仏壇はもつて出ない。したがって、新宅にははじめのうちに仏さまがないという。新年、盆、彼岸などには、本分家の間では、行ったり来たりする。

新宅が新宅を出すと、今までの本分家関係はうすくなるという。これは特殊な場合だが、女の子ばかり生まれて、最後に男が生まれた場合には、娘にむこをもつて身上まわしをしていてもらい、弟が成人してから、娘を分家に出す。この場合には、ふつうの新宅の場合よりも財産をわける量が多くなる。また、ちがった形として、おもてむきは新宅になつてはいるが、実際は、姉夫婦が本家の家に住んでいるという例もある。

エエ仕事は二、三軒であるのがふつうだが、これを本分家でやつているものもある、また、嫁の里が近い場合には、嫁の実家とくんでエエ仕事をする場合もある。

隠居新宅というのがある。これは、親が後妻をもつて子供がいる場合に、親が後妻と子供をつれて出る形である。これを隠居新宅といつて、一戸をかまえたもので、村からも一戸前のあつかいをうける。

(伊勢久)

#### 1、上矢島

似ているような気がする。主婦に關係あることば。

公に知らせない金をもつている人のことをヘソクリをもつてているといふ。ヘソクリというのは公にできない金のことである。

米を売ったとか、粉を売ったとかしてためた金をホマチという。これはもののかつぱじいてためた金のことである。

誰かにもらつたものをすこしづつもつている金がヘソクリ。ヘソクリというのはこのように濫費しないでもつていてるもののことである。ヘソクリの方がホマチより価値がある。ヘソクリといえば金のことである。ところがホマチした金じやヘソクリにはできないといふことがわざといる。ホマチの方は、金がり用だからつくるもの。物を処分して金を調達してえるものがホマチである。

ヘソクリにくらべてホマチの方がわるい意味をもつていて。

かなりのうちでは嫁にやると、金をもたせてやる。とつき先でも嫁にはこづかいをやる。里へかえれば親をせびる。母親は父親に内緒で娘にこづかいをやる。ということは、嫁はヘソクリをもつてている。むすめはヘソクリをしない。

#### 2、東新井

ヘソクリは、大体自分が年をとるでしょう。年をとると、まあ仕事の方はしなくなる。小遣も貰えなくなる。くんろつていれば、子だかられるけれど、仕事もしねえで、なんば親でも年中小遣をくんろ小遣をくろいうのはいやだから、ヘソクリでもこそせて、ちょいとなんだか来た時に、みんなが裏へ行つて留守にパンの一つも買って食うかなつていうふうな考えを起す年よりも多いんじゃねえでしょうか。

ホマチ わかい奴は、おつかさんなど、おとつつかんだに小遣も貰うでしょ、小遣も貰うけども、今はこういうふうに派手になつていてから、貰つただけじや、なにそれか、買うことが出来ねえ。まあホマチでもやつて、そうしたら錢が出来るから、そうしたら買うかな。そういう

### 家族の私財

ホマチとヘソクリ

うふうな意見ですると考へるんだげんども。（ホマチには、何をかっぱぐんです）米だね。ほかのものは、米が九割、うちの者は知つていても、多くえらいことでなければ我慢をするというのが親の意見でね。それをさせねえで、えれえことにでもなつちや大へんだから、親が我慢する。

### 3、伊与久

米とかくすまゆを売った場合には、内緒にやつた場合にはヘソクリになり、公然とそれをした場合（おもてむきにみとめられている場合）にはホマチになる。たとえば、よめがはたをおつて、五百円のおりんをもらつたが、四百五十円だといって五十円を内緒で自分のものにした場合にはヘソクリである。この場合、五十円をテンギリしたという。それを家人の承認の上で自分の小づかい錢にした場合にはホマチである。

### ヘソクリ

### 1、上武士

内緒の錢のことで一人前の者が家人に知られぬようにため、死ぬ時に持つていて葬式費用に役立てる死金になるもの。

### 2、中島

ある家で障子の張りかえの時、婆さんが二〇〇円のヘソクリを出したのでびっくりした。その前に、その家のおやじは、烟買うのに金がなくて、三〇〇円も借りて来たのに。烟一反五百円ぐらいの時の話だ。自分で自由に使える金。正しい小遣いなどにも入れておく。私有財産。

### 3、小此木

母ちやんがする。買物に行って、十円のもを十五円だよといつて、父ちゃんには内緒で五円をへそくるようなこと。そのような、水まししてごまかすことをまたボウサキともいう。

### 4、保泉

青物を売る時、五円を六円五十銭だといって、一円五十銭へそくるようになしょでつかまえとく。若い者がやる。

### 5、東新井

年よりが若いものにないしょでしまつておくもの。

### 6、下淵名

かくし銭のことと、あまり悪くない。

### 7、木島

これはよくないことばである。ごまかしてためたもののことである。ヘソクリには、テンギリをしたという意味がふくまれている。ことばがあらいい。（ヘソクリは、人に知れないようにしてためたもの。たとえば、米をかくれて一升か二升売つて自分のこづかいにしたときに、ヘソクリをしたという。これは家計をまかせられていないもの（身上まわしをしていなもの））がする。

### 1、木馬子

### 2、中島

家の物をひそかに特出して売つたりしてためる金で悪質である。益んだりしてためた私金または物である。だから「ヘソクリを出せ」とは言つて、出してはあるが、「ホマチを出せ」と言われて出す奴はない。

### 3、小此木

蚕などちやある（捨てる）べえと思つたのを、もらつて育てて、でさきの糞を売る場合とか、ナスやキヌウリの食い余りをもらってホマチに売ることはよくあつた。ホマチはオンカ（公然）で、ヘソクリは非公認である。

どつちかというあからさま。これはおれがほまちにしてるんさとい

う。まわにかける時、しんしょのたししないで、ホマチにする。女しがする。

### 5、東新井

ヘソクリに同じ。たとえ一升でも二升でも、昔は困つたらホマチに

### 6、下淵名

ホマチはかくしもののことわるい。

### 7、木島

おもわぬ収穫物があると、これはおれのホマチだという。余分にそれ

たものを自分のもうけにもらうことである。するかいこを自分で創つて、まゆを売つてその金を自分のホマチにした。このように、するはずのものをよなげて収入としたものがホマチ。また、残業のように余計にかせいでためた場合にもいう、いわば一つの生活のたしなみである。

ホマチは公認に近い。

### ヨロク

これは、小金を貸してそこしばかりの利息を手に入れたとか、農家でしなくともよい仕事をして（たとえば人の世話をした場合など）礼金をもらつたとか、株の配当などがあつた場合に、ヨロクという。これは、ヘソクリなどとは意味がちがつており、男衆に主として関係しているもので、いわば、労力に知識を加えてえた利益のことである。（伊与久）

ホマチ田 おもてに出ていない（非公認）田のことをいう。たとえば、川原を掘つて田にした場合には、何年かは、年貢を出さずにつくれた。これをホマチ田といつた。（伊与久）

オツボキル

別に棒サキといふ、物を買う時、値切つて買い、その利ザヤをかせぐこと。（上武士）

カリッコ 懇親のことで、親が老後の面倒をみてもらうもののこと。フカリゴともい、親が死水をとつてもらうもののこと。

セナゴ 兄のこと。

ヨメ 身上まわしのまだできないうちはこうよんでる。

タテドオシ なかなか嫁に行かない女の人のことをいう。たらない人間のことは、八厘、あまい、一服すつて、天保錢などといった。

カカア天下 かみさんにおさえつけられて、いるもの、おつかあにあまいとか、あたまがあがらない場合にいう。

ホマチ子 めかけの子かててなしごのこと。かくしごのことだが、あまり例がない。

オシカケヨメゴ むかしのことで、恋愛関係にあっても、もらつてもられない場合に、男の家へおしかけてきた。ほとんど何ももたずについた

が、あとでだんだんともつてきた。仲人をたのんでおしかけてきたり、仲人をあとでたのんだりした。

フルシキヨメゴ びんぼうな家の娘が、たんすもたずに嫁にきた場合にいう。明治の頃は、たんすとながもちをもつてきただのが中以上のもの、たんすとつづらをもつてきただのがふつうとされたが、フルシキヨメゴはこの下にある。

セイフロムコ これは婿入りしてもその家にいる気でないもののことで、計画的に出たりはいつたりするのでいう。

フクロッバタキ、ネコノシップ 末子のことをいう。

ナカツツエー 兄弟の眞中のもののこと。

ヨシコ 養子のこと。養子縁組は、近親の人が間に入つてきめる。

## 族制関係語彙

義子ふるまいをして、近親者や近所の人たちをよんでも披露した。

屋敷類 屋敷だけもらって分家した例がむかしはあつた。明治のはじめころに、惣領は兵役のがれが出来たので、つぶれやしきをもつて出て、その家を再興した。この場合には、つぶれた家の苗字をなのるが、これも新宅のあつかいをしている。こういう例が、伊与久にも一、三軒はある。（伊与久）

# 村組織

## はじめに

境町には米岡遺跡（雑文）、武士古墳群、大国神社（式内社）等があり、歴史的にはかなり古くより開発されたことは明らかであるが、開村伝承は淵名の淵名三郎をはじめとして、中世をさかのぼるものは検出できなかつた。例えば小此木の開村伝承は次の如くである。

小此木氏の先祖左衛門源長光は、新田義貞に従つて戦さに出たが、負けてこの地に逃げこんだ。アサヒッピラの荒野を拓いて小屋を建て、そこで農業を営んだ。そこで小此木には下ゴヤ、中ゴヤ、上ゴヤという地名がある。小此木氏は、村の草分けの家だといふ。

因みに小此木登氏方の先祖といわれる位牌には次のとくある。

天正九辛巳十月十五日

性院殿信州住左衛門尉長光華盛大居士

桓武天皇五十一代後胤佐原左衛門長光片号シ境之城主治世三十五年  
也行年五十九卒ス

父者能登國住ス 長榮ト号

長光公姓名者安任ト号

江戸時代以後、この地には新田開発が進められ、小此木の新田組、下淵名の西窪（新田）等これに関する地名が残つていて、村の行政組織についても、下淵名の如くたとえ隣家でも同じ組に属さないような事例が

見られる。

しかし、境町はかつて日光例幣使街道が町を縦貫し明治以後県内屈指の養蚕地になり、町の中央を東武鉄道が縦貫して駅が二ヵ所もあり、平地農村でありながら水田地帯と異り、作物は換金性が強く、当然村人の意識は近代的合理性が強く支配し、民俗としての特異性は薄い。村落構成の問題を見るに当つて、共有地等は採集し得なかつた。また年令階梯の問題は「人の一生」の項に、村祭りは「信仰」の項に含めたので、この項は不完全なものとなつてゐる。

## 村組織

小此木は次の六組に分れてゐる。組はまたタルワともいふから六タルワあるといつてもよい。

1 上古屋組 四〇戸 小組数四組

2 中古屋組 四二 戸

3 下古屋組 三七 戸

4 原組 一二 戸

5 北下組 一二 戸

6 新田組 一二 戸

六つの大組を世話する六人の大組長のもとに、それぞれ一～四の組長上武士では稻荷組、西組、中組、新田組、前組の五つのタルワに分れる。

ていて、昔は各クルワごとに伍長がいたが現在は、組長と呼ばれ、その下に隣組がある。

下瀬名では三五〇戸程度で二区に分かれ、更に上組、下組、西座（新田）、中宿（裏町）の四組に分かれている。もと上組と下組のみであった。組の構成は入り組んでいて隣りが別の組に属し、その隣りが同じ組である場合もある。

以上は行政組織であるが、これとは関係なく下瀬名には茶グリワと呼ばれる集団がある。これは隣組のような近隣の相互扶助組織で、昔から近所付合いをしてきた家が十戸程度からなる自然発生的な集団で、お互に「お茶呼び」をする仲間である。冠婚葬祭等一切助合ついて、隣組とは異なる。

また、下瀬名には井戸替組も存在する。これも昔から組の仲間は今まで十戸程度からなっている。村や組に共同の井戸がある訳ではなく井戸は各戸にあるのが原則であるが、井戸替えの道具をヤドで保管し、年一回毎戸一人集って井戸替えをした。この経費は持寄りである。このように人為的な行政組織と自然発生的な相互扶助組織が別個に存在する。

#### 村の役人

各部落は現在は区長（正式には連絡員）が統轄しているが、昔は頭が統轄者で、その下に伍長または十長（ともにタルワの統轄者）があつた。（木島）また、タルワの代表をもと戸長と呼んだところもある（下瀬名）。現在では、区長—評議員—隣保班長（木島）、とか区長—伍長—隣保班長（下瀬名）、区長—大組長—組長（小此木）となつている。

これ等村の役員は、むかしは、地主様とか、資産家などどこに出しても恥ずかしくない人などといったが、現在はあまりそういうことを言わぬ、選挙委員を出して投票をきめている（小此木）。また、村役は各クルワで一人ずつ出て一年交替で長になる（東新井）。さらに区長は選舉

でえらび、班長は廻り番でえらんでいる。（木島、下瀬名）

この他に氏子縁代と寺世話人がある。

氏子縁代は三年交代で立候補制をとっているが、下工作があつてなるべく長年者を出すようにしている。氏子縁代は、中屋敷、本郷、上新田、下新田から各二名、十八名から一名出し、この中から神社縁代を一名えらぶことになつていている。（木島）

寺世話人は、木島では三つの寺に関係している。寺世話人は寺の方から頼まれるような形をとつていて、同じ家の者がなるのが通例であり、これをエータイといっている。代々（永代）世話人ということである。

#### 村 寄 合

村全体の寄合いは正月二日のウタイゾメの時であつて、区長の家ので新年会をやる。集るのは昔の徵兵検査終了後の男子一人前の者である。普段、村民が集まる必要がある時は「寄せ太鼓」を打つて集めたが、用事を伝える時には順送りに伝える「言い継ぎ」が普通であつた。（下瀬名）

正月元旦か年次末に村の総会を開き、役員を選ぶ。参加するのは一戸一人の一人前の男子である。

村全体が寄り合うことはない。あるのは、大組の寄合いだけで、そこでの座席も決つてはいない。とくに東向き（正座）になりてがないので、遅く来た人が押し上げられるくらいである。（小此木）

#### 村 仕 事

年二回の道普請ぐらいのものである。春は四月四日と決つていて、今は道路愛護デーに行う。区長がフレを出して、大組ごとぐらに計画をたてて実行する。（中島）無賃の村仕事をツブシ人足という。道普請、お祭り準備、春秋の田圃

の掘払いが主なもので、毎戸一人、一人前の者が出るのが原則で、出ないと出不足をとられる。出不足は一日一〇〇円位である。（下潤名）

また、中島では、村仕事は、男女や年令を問題にしないはずだが、家に立派な男がいるのに女など出すと、「女を出すちゅうてはあんぬえ、男がねえーんじやあるめーし。」ぐらいの批判はある。また、近頃は、貸銀関係で出なかつたりするので、出不足一日一五〇円ぐらゐとするが、それでも損だとか得だとかいろいろ文句が出るという。

## 伊与久

伊与久は現在約五百戸、この中がつぎのよう三区にわかっている。

各区とも大体五十戸から百六十戸位。

一区：芝崎 この中が東組と西組にわかれていて。

二区：馬場 この中が東馬場と西馬場にわかれていて。

三区：館野・中居

各区にはそれぞれつぎの役員がいる。

区長、区長代理、隣保班長

宮總代、理事、宮世話人

壇徒總代

農事組合長

区長は任期一年、選舉による。選舉は二月か三月頃、公会堂に毎戸一

人ずつあつまつて行なう。交代は四月一日。

区長代理は会計も兼ねている。任期等区長と同じ。

隣保班は一班十軒から十五軒ほど、多いところで二十軒ぐらいである。班の組み方はええなみ（家並）である。班長の数は各区十二人ずつ。任期は二年で、はなしいでえらんでいる。

宮總代は各区二人ずついるが、これはむかしの字（東組、西組、東馬

場、西馬場、館野、中居）から一人ずつえらんでいる。宮總代の下に理

事がいる。これも名字に一人ずつで計六人である。その下に宮世話人がいる。これは各区が十二班にわかれていて、各班から一人ずつでいる。計三十六人。以上いずれも任期は二年。選び方は選舉か推せんによる。このほかに神社関係の役員としては、区長とか区内選出の町会議員が名譽役員になっている。神官は、現在は芝崎の笛木彌吉さんで御嶽の行者である。

農事組合は区単位に組織されることが理想だが、現社では一区一組員とはかぎらない。区で三つにも分れているところもある。養蚕組合は農事組合と一緒になつていて。

消防組は、もとは区単位になつていて、現在では伊与久全体で一つの消防団をつくっている。

伊与久の鎮守様は雷電神社である。この神社は旧社格は郷社で、神社の収入もかなりあって、伊与久全体が神社を中心にしてまとまっているといふ感じを世間に与えてきた。

雷電神社の行事としてはつぎのようなものがある。

一月元旦、この日は毎戸、初穂料と若干の金をもって神社へおまいりに行つた。寺へも行つた。

まつりは年に四回ある。つぎの通りである。

一月二十五日、年始日。

この日は総代以下世話人まで出て神社につめていた。おまつりにきた人の世話などをした。この日はだるま屋も出てにぎやかである。

伊与久の年始日はこの近在では一番おそかつた。明治時代には年始まわりによくしおがまをもらっていた。これを各家でもまわりにしたので、伊与久までくるとしおがまがくずれてしまつたというはなしが残っている。

三月二十五日 春まつり

この日も参拝者が多いので、世話人まで出て、参詣者の世話をした。この日には苗木屋や養蚕道具を売る店も出た。太々講の講社がたつてい

て、太め神楽をした。神楽は芝か川井の方からたのんできた。

三月と一月のまつりのときは、講の代参人（五人一講）がおまいりにきた。講の範囲は、北は沼田、東は太田、南は埼玉、西は高崎辺までであった。

七月二十五日 夏まつり

この日はかんたんなまつりで、総代、理事、区長などが出ぱつて式を行つた。

十月二十五日 秋まつり

この日は余興もあり、露店も出るほどである。村の人は大体おまいりに行く。

八丁じめは六月一日にたてる。この日、各区の宮代が雷電神社へ行つてお札をもらつてきて、伊与久の村境にたてた。たてる場所はつぎの通りである。

西では伊与久橋のたもと、遠越と下諏訪の境にたてる。

南では、保泉と雨志へ行く采女大橋のたもとへたてる。

東では、中居の新地と木島の境あたりにたてる。

北では、伊勢崎の神谷町と伊与久のまきぞめのあたりにたてる。たてる場所はいずれも、伊与久から他村（区）へ出る道路（村道程度の道）である。

つぎに、各字の堂宇の縁日や小社のまつりをみることにする。

細谷戸の若宮稻荷のまつりは四月十五日である。これは細谷戸と西馬場の本郷が参加している。この夜は灯籠をたて、余興をしたこともあ

る。館野の阿弥陀堂では、七月十七日から七日間、七晩灯籠というのをしている。灯籠は十コほどあり、この間まわり番で灯籠をつけている。おまつりにくる人は線香をあげたり、おさんせねをあがたりしている。厄病神がたからないようにといふのでしているのだといふ。

二区のお寺に觀音様があり、八月九日が縁日で、この晩には余興があ

る。これは二区全体でまつっている。このまつりは青年会が主体となつてしている。

砂山というところに薬師様があった。ここでは水難者のための水難越鬼をしていた。この薬師様が今から數十年前に觀音様に合併した。合併後は施餓鬼を中止していたが、再び水難者がでてきたので、これを復活した。日は七月二十八日。觀音様に合併後は、薬師觀音と称してまつっている。

つぎに、各字で古い家といわれるものと家数の多いものをあげてみる。芝崎では、田島、須田、五十嵐。

東馬場では、塙谷、松村。この小林と芝崎の小林は系統が同じといわれ、合せて十軒ほどある。

西馬場では吉沢が多く、ほかに新井、細谷、真下などがある。

飯野では宮崎が多く、ほかに大谷、星野、山田などがある。

中居では、高井、桜井などがある。

同じ苗字の家の仲間とかいづけとよび、日常生活の中でも、あるいはいわゆる冠婚葬祭の際などに中心となつた。仲間のすくないところでは、その手伝いを隣保班でした（仲間にては族制を参照のこと）。

区の仕事としては道ぶしんがある。これは三月と十月に一回ずつする。一戸から一人ずつ、男衆が出るのがたてまえで、村道を中心につしんをしている。

班の仕事としては、祝儀不祝儀のときの手伝いがあった。これは、仲間（一家）だけですませられるところでは仲間うちだけでしたが、ならない場合には延の人たちが手伝いに出た。

葬式の場合には、祝儀の場合よりも手伝いの範囲が広くなり、仲間と隣保班が出た。この場合、区の役員は見送りに出る程度である。葬式の主任には隣保班長がなつた。また穴掘り組合といふのは帳面が出来てきまつっていた。これは葬式の出ない班から、四人ずつ、はなし高い

で出た。二三区の場合を例にとると、二班を一組として計六班の穴掘り組をつくつていて、適宜はなしあいで出た。ただ、順番にあたつていても、家に妊娠がいる場合には穴掘りに出ないのがたてまえであった。葬式のときの役割をみると、葬式の際には仲間、隣組などが中心となつて働いている。庭番というのがあるが、この人数は不定で、遠い仲間か、近所の人となる。たゞがしらとか、はなご、つくりばなどを使意する。戸主が出るのがたてまえになっている。

つぎに寺番というのが一人いる。これは、寺とかけあう人で、古参の人がよく、仲間でも、親類でもよかつた。

ツゲは、近所の人が、一方面について一人ずつ、何とももたずに行つた。

近縁の仲間は差圖の方へまわつて仕事をした。（伊与久）

# 年 中 行 事

## はじめに

境町の年中行事といつても、ここでは主として同地方の農村部に伝承するしきたりについての調査資料であることを、最初にお断りしておきたい。

ここの中行事については、境町地方史研究会発行「境町歴史資料、58号」に紹介され、本報告書にも転載されている古文書（天保十一年中沢茂七手記）に、江戸時代末ごろの家例が記録されているし、現代の風習については、前記「境町歴史資料、51—57号」に境町伊与久在住の真下孝三郎氏による「境町の行事」が連載されていて、いずれも貴重な記録資料になっている。

今回の調査は、短時日のうちになされたため、皮相の見聞も多いと思われるので、今後さらに地元研究家の手によって補充していただきたいことをお願いする。

次にこの年中行事の特色と思われるものをいくつか挙げてみよう。まず、正月行事だが、「餅なし正月」の伝承が意外に多いことに気がつく。東毛の開けた水田地帯で正月の餅がつけないとは、奇異の感を抱かせるが、現在のように水田が開けたのは最近になってのことと、特に町の北部や西部は水が不便で、以前は畑作中心だったとのことである。農民は意外に古くから一族の伝承を守ろうとしていたものである。

小正月に伊与久ではオタキアゲをして、小なべで飯を煮てウツギをする。六本立てて供える家があり、女壇ではオシラビマチといって、飯を十四個まるめて、豆がらを一本ずつさして年神様に供える風習があるのは、前記の天保十一年中沢伴蔵手記に記録されていることがそのまま伝わっていることを示している。利根郡のオミタマ様や、板倉町のオニタマと同じ種類の古風な年神祭りの様式を残すものであろう。

なお正月飾りのオンベロを取って、糸で小正月に成り木に吊るしておくまじないは、町の西部一帯に広く行なわれ、果樹販賣の伝承とともにほほえましい風習である。

正月十六日にカテノ飯（五目飯）を作るが、「ジオウ飯、エンマの顔なで」と呼ばれているのは、利根郡の方で千四がゆというのと同じ日だが、こちらには仏教の影響が強く表われ、ジオウとはどうやら地獄の王者エンマ十王をさすものかと思われる。

五月の節供については、有名な三輪伝説の崩れた形の昔話の破片が残っている。水神と考えられる蛇と女性との因縁を暗示した話で、断片ばかりだが、五月節供が男子の節供となる前は、本来女の節供ともいうべきものであったことを物語っている。すなわち、四日の晩は女衆はシヨウブ湯で身を清め、シヨウブ酒を飲み、男衆に飯を盛らせて食べ、威張つてもいい晩だと伝承されている。田植えという一大行事を前にして、田植えの中心となる女衆が、まず水神を迎えて主祭者となつた古風な信仰が、伝承して崩れてきたものと考えられる。

盆については、地区によって七月十三日から九月四日まで、四回にわ

たって行なわれているが、大事な先祖祭りだけに地域の農家の仕事の都合をみて、最も条件のいい時期が選ばれた結果であろう。盆棚の敷物にカツモやウツギ・チガヤなどを編んで敷いているのにも土地がらが表われ、町の東部ではカツモ、西部ではウツギなどを使用している。

盆送りのとき、花香塚の辺で線香に火をつけて田んぼを見回り、先祖に今年の田のできばえを見せてから送り出すという風習が残っているのは、前記天保十一年の手記に「同十五日、此朝先祖代々を田畠見分に連行こと先例なり、手作田畠残らず廻るべし……」とある風習を今に伝えるものであろう。

秋祭りをオクンチといい、以前南米岡や伊与久では祭りの前夜に子供が神社の境内に集まって「木一くんな、木一くんな」といつたき木をもらい集めて、火をたきながら一晩じゅう起きていたというのは、ヨイマチに神社におこもりして神を迎えた古風の祭礼の様式を伝えているものであろう。

旧十月にオカマ様のルスンギョウといつて、カマ神を祭る風習がよく残っているのも東毛地方の特色の一つといえそうである。同じ十月の十日夜には、カエルが餅をせおつて出雲へ行くというので、カエル餅をついて供える風習が行われていることは、今まで県下に知れなかつたことで、十日夜が田の神送りの行事であることをはつきり表現している珍しい伝承である。十日夜に、丹精こめて作った米で真っ白い餅をついて大きく丸め、新わらにのせて大根とともに供える風習は、農民にとって一年一度の秋の豊かな収穫を終えた喜びと感謝を、心から神に捧げる手厚い信仰の発露したものであろう。この真心こもった餅を受けて送り出されて行く神のお供をしてカエルが餅をせおつて行くというわけである。カエルをお供に従えた十日夜の神の正体こそ、田の神であろうと推定される。

そのうえ、ここでは十日夜が神無月の信仰と合体して、十日夜に神の行く先是出雲大社ということと、十日夜の餅はまた縁結び餅になつてお

り、十日夜の神に若い者の良縁を祈っているものも極めて興味深い。農業の実質的な担い手である若い者の良縁を得ることが、農家を維持し繁栄させる基本となつてゐることは、昔も今も変わりのないことである。東毛地区というと、平担部の開けた農村地帯を想像しがちであるが、調査してみると意外なほど古い慣習の保存されていることもわかり、この特色にも触れることができて、大変興味深かつた。（なお、同一地区の資料について採集者の方ちがいで重複している場合もある）。

## 一月

### 元日（一・一）

**年神棚** 昔は全戸で作つたが、今は作る家が少ない。アキの方へ向けて作り、七草までいろいろの物を供えた（上武士）。戦前は毎戸に、明の方へ向けて棚を表座敷を作り、餅米・コンブ・魚・ミカンを供えた。

朝夕新しい食べ物を供えた（伊与久）。年神棚を作る家もあり、コザ（客間）に東向きに作る。ふつうは大神宮様の神棚の横に、オカオガクシを飾りシメをつけて、ミカン・ゴマメなどを下げる。部屋の四隅にもシメを下げ、床の間にシメを下げる。カド松はこの頃しなくなる（南米岡）。大正末期に松山八十町歩を開墾したので、以後カド松はほとんど立てなくなつた（伊与久）。七五三のシメ繩を年神様を迎える座敷内に張り回す家もある（小此木）。神棚にヨタレベエを飾る。正月棚は表座敷の真中につる。この時太神宮暦により明き方を知つてその方向にむける（下潤名）。正月棚は明きの方に向けて吊るした。その棚には、ミカン、スルメ、コンブ、コマメ、ハガタメ（干柿）を吊るした（上武士）。

**年男** その家の長男、または家長となる（小此木）。もとは若い者が年男になり、カド松・ウジ神・墓場などの松廻りの所に、朝晩供え物をしていた。今でもやる家がある（伊与久）。年男が餅を小さく切つ

ザフキ(器)に入れてお神に上げる(南米岡)。できた食物をカド松のしんに一箸献じ、それから外の神々の松に建物・井戸・便所の順に献じ、その後家の中の年神・皇太神宮・恵比寿・先祖・カマ神などに献じる(小此木)。長男が年男をつとめる。年男は除夜の鐘が終ると、風呂に入り身を湯め若水を汲む。三が日の料理は年男が作る(下瀬名)。羽鳥一家の場合はめんえんぎである。

おかげは暮の三十日までにする。大晦日には今までなすがらをもやしてその年の借金をかえてしまうといふえんぎがある。三が日の行事としては、家のあるじが一番早くおきて食事の用意をする。この間は女衆の手は一切わざわせない。元旦の朝、水汲みをするときの作法として、「朝日長者と汲みわける」と一唱えては一べん水をくみ、これを三べんくりかえす。最初に汲みあげた水をその年の恵方の方にまく。あと二回は反対側にます一ぱいまき、あとは適当なところへまく。四回目の水を手おけに汲んできて、自分でカマドに火をつけて、前の晩に女衆がうちだしておいたうどんをゆでてあげてたべられるようになる。これが家長の役目であった(今はしていない)。

三が日は朝めん(うどん)、昼もち(やいてたべる)、夜はめし。

(上矢島)

若水 元旦に年男が若水を汲んで、お供え餅をツツコに包んだ物をその水につけてから供えおく。この水で茶をわかしたり、元旦の煮物をしたりする(伊与久)。若水を三ビシャク、茶がまを入れてかし、おチャコにお茶を入れて神棚に供える。下げてからお酒を上げる(南米岡)。若水を汲むきまりはないが、若水で飯をたくか、オメンをゆでる(東新井)。若水は神棚に上げ、四日におろす(下瀬名)。

朝湯 もとは大晦日の夜中から初湯をたてて、一族を呼び合つた。元旦は本家、一日は新宅に呼んだりした(伊与久)。元旦だけわかし、且那様が先にはいる。その後の順序はない(東新井)。朝湯は各戸にたてる。本家にたてて集まつて、御年始の挨拶をする家もある(伊与久)。

初参り もとは大晦日に早く寝ると、年が寄るといって、遅くまで起きいて、元旦の朝暗いうちにぞろぞろと恵方参りに出かけた。また元旦には、イッケが自家に集まり、トソを汲んで挨拶し、それから神社に初参りしたところもある。現在でも、伊与久では村全体が雷電神社や寺に初参りをする。お金五十円か百円ぐらいい包んでお参りに行くと、神社や寺には神官・僧侶および縁代・世話人、特に神社には各戸長が出張

つていて、年始を受けつける。そのあと近所の年始回りをする(伊与久)。アキの方の神社から産土様へとかけて順々にお参りする(小此木)。且那だけは、朝六時頃、村の鎮守へ大ていお参りに出かける(東新井)。元旦の朝湯にはいって、鎮守様へ新年互礼会を行つた。これは任意(上矢島)。

年始 元旦に一族や近所を回礼する。年始回りも一族と隣ぐらいで相互にしたが、今では兄弟が回り番で、今年は誰と決めて一回集まつてやるだけになった(伊与久)。三日までに、年始はなるべくすませる。

縁起 元旦には早起きをする。掃除の時に家のごみを外へ掃き出さないようになる。お年玉を家中に配る。家中で行いをつしみ言葉に気をつけ、こことを言わないようになる。元旦そろそろお金を出さないよ

うに、暮のうちにすべてを整えておく。家中が新しい衣服を着る(上武士)。元旦から朝寝をするなどといい、元旦に議論をすると、一年中けんかが断えないと戒める(東新井)。縁起物として、手ぬぐい・コンブ・干し柿などを神棚の前に吊るす家もある。シメ縄も各姓ごとに流儀があり、ヨツラジメといってわらの元からしない始めて三つめの所に他のわらを入れてなつていき、左右のないよう結ぶ家もある(小此木)。シメは、田植の時の苗バを取つておいて作る家もある(伊与久)。一日から七日までを、初正月という(上武士)。

食習 三ガ日の食物は決まっている家があり、うどん縁起の家が多い。御飯をたかず、うどんばかり食べて過ごす。南米岡の金井家はイ

モ縁起で、セチ餅（正月の餅）がつけないから、お神にはヤツガシラを

四個供える（南米岡）。伊与久の須田イッケもイモ縁起で、サトイモを

煮て神様に進せる。朝食にはイモと餅を入れたぞう煮を作つて食べる。

イモ縁起の家は、ぞう煮縁起もある。サトイモはかなり作る。小林イ

ッケでは、三ガ日は餅が食べられない。うどん縁起の家では、三ガ日に

餅を食べるとできものができるといわれる。村岡イッケでもセチ餅がつ

けない。昔、セチ餅をつく時に火事があったからという。そこでよその

家に頼んで餅をついてもらう。（同家は五月節供の赤飯も作れない）。

また、ナベカリの日がうどん始めて、それまでメン板が出せない家もある。

また、神様に上げる餅は灰の中で焼き、松葉で灰をはたいてぞう煮

餅にして進せる家もある（伊与久）。正月の餅をつけない家には近所で

餅をくれる。餅を食べるのはまわらない。餅をもらったお返しに、元は

赤飯をふかして配つた（東新井）。小此木の関口家はカビタリ（十一月

一日）の餅をつけば翌年の三月節供まで餅がつけない。中組の天田家は

元旦にセチ餅をつく習慣がある。内田家では、朝はぞう煮、星は自分の

食べたい物、夜は白米飯に塩ジャケを食べる例になつて（小此木）

村岡イッケでは餅がつけないので、よその家からもらうが、二日にうど

んをうつてお返しにする（伊与久）。

真下家の食習（伊与久）

日	1、2、3
朝	うどん
夜	うどん
	飯
	かゆ

正月三カ日の間、家によつては朝食に定まつた食べるしきたりがある。これを家庭エンギといふ。

宮内白コワメシ、毎日作る。四日の日にはウドンを食べる。宮につながるので白コワメシを食べるという理由である。

石井＝冷やウドン暮三十日を作つたもの。

新井＝ウドン。

三品ヨイモ（食べものに煮しめの芋を入れる）。

なお、家庭エンギは別に食べ物にエンギと付して、例えはイモエンギ

といふように呼ぶ（下淵名）。

正月の三カ日、部落の各イッケごとに食べ物に禁忌がある。これを家庭エンギといふ。

イモエンギ＝毎日必ず里芋の煮ころがしを食べる。

ウドンエンギ＝毎朝ウドンを食べる。

ゾウニエンギ＝毎朝ゾウニを食べる。

お湯エンギ＝お茶が飲めない（上武士）。

元日から三日間、各家とも縁起による食事をする。上矢島ではもちえ

んぎ、めんえんぎ、いもえんぎなどがある。

田代一家の例をあげてみよう。

旧十二月一日に正月の前祝いとして、朝しることをする。大晦日の朝も

しることをする。十二月二十八日からセチがくるまでうどんはしない。田

代一家ではいもえんぎといって、必ずいもを食べる。大晦日にみそをこ

しておしたじをつくつてにする。おしたじは、かつぶし、大根、ごぼうなどをしていれてつくつた。元旦からは、このおしたじに火をいれてたべる。

餅はやいて食べるか、そのおかげにいもをたべるわけである。二十日ま

での間、いもを毎朝たべた。なお、昼食にもち、夜はめしとなつてい

る（上矢島）。

### 正月の門付け

三河万才＝米一升位もらって行く。

ノラボ＝乞食のようなもの。自分で描いた宝船を持つてくる。タフラッココロガシ＝男、小さい猿に赤紙でカンザシを作つたものを持って、小さい猿には紐が付いていて、それを座敷で転がしながら

「一ツコロガシ千俵、二ツコロガシ二千俵、三ツコロガシ万々俵」

ラ」と唱える。

ハツコメンショニ男、扇子を持っている。

「ハツコメンショ、ハツコメンショ、小判と小粒でハツコメンショ」

豆ゾウニ男、セソスか竹のカツタカタを持って鳴らしながら、

「アーラきたきた豆ゾが来た。この豆ゾは餅が好き、あわの餅より米

の餅、なんば米でもつかいのがいい」

何処から来るのか不明、もらつて行くものは餅か米である（下潤名）

と呪える。

二 日

仕事始め 一年の仕事を始めるが、大がい午前中だけ（小此木）。家業

や家事の一部をまねだけする（上武士）。男は男の仕事、女は女の仕事を少しの時間したが、今はしない。仕事始めには、井戸籠をなつた（伊与久）。

村の初寄り合いで、最近まで、「謹初め」で、御祝儀の時うたう「高砂」のけいこをしていた。今はしない（東新井）。仕事始めは二日、針仕事をする（上武士）。二日はウタイ初め、仕事始め。この日に女は針仕事をすると、その後は何時針を持つてもよいとされる（下潤名）。謹初めで「高砂や」をやつた（上潤名）。

四 日

お擺探し お供え物を下げる、焼いて皆で食べる（伊与久）。お供え

を下げる、ぞう煮か、する粉を作る（上武士）。三ガ日に供えたものを下げる時、お金をかくしておいて、子供に探して取らせたりした。朝の

ぞう煮は、今は新しい物で作る（南米岡）。元日に包んでおいた錢を子供にくれる（東新井）。神棚の鏡餅を下げる、焼いて年神・大神宮・恵比寿・先祖代々の靈・カ・神の願に供える（小此木）。正月棚から適当なものをおろす。これは七草のオシャに入れる（上武士）。四日はお

餅さしとしつて、お供えなどを下げた。ただ、お棚のお供え物は、そのままにしておき、十五日までは下げずにおいた。お供えを下げるの

は、お寺さまが年始に来ないうちにしろといった。これは、神と仏とを

合わせるのをきらつたためらしい（上矢島）。

寺の年始 寺の年始日で、坊さんが各戸を回る。ここ四、五年は回らない。元旦に寺へ年始に行つた時にお札をよこすので回らない（伊与久）。寺から年始に回つてくる（南米岡、上武士）。寺へ年始に行く（上武士）。

ナベカリ 初嫁の夫婦が大判という四角餅を三枚持つて、実家へお客様に行く。米・アワ・粉の餅などを大きく切ったもので、実家でなべを借りて煮て自分たちで食べてくる。泊まるとなべが割れるというので、日帰りをする。別にお返しはしない（伊与久・南米岡）。

五 日

年始に行き来する（伊与久）。親しい人たちが会合して飲食する（上武士）。ゴカンニチというが、別に何もしない（伊与久）。

境町の大売り出し。

六 日

山入り 山の神の日。山開きで、山の神のはこらに切り餅を供えて

拝む。山林がなくなつたので竹やぶにお松を立てて植んだこともある（伊与久）。クズ木・薪伐り等をやる。幣束を切るか、紙を三つぐら

に長く切つて、松の木等へ付けてくる。ゴマメやおサゴを上げる人もいる。

今は山林がないので行われない（東新井）。山の神祭りで、半紙を横二つに折つて、二つに引きさいて右の一方を四重ねにして山神に供える。

供物は白米・餅など（小此木）。伊与久の須田イッケでは、島の八幡様へお参りにいく。六日年とはいわない（伊与久）。六日ヅメも知らない（南米岡）。

この日は山で木を切つてきて、神棚にお神酒を上げる。山とは雜木の生えている古墳である（上武士）。六日は山始め。烟

の下草を取る（下潤名）。この辺では山がないので、松を屋敷山に立てて、かつぶしとゴマメとおサゴと餅（さいの目に切つたもの）をお松に

供えた。十四日にこのお松を取つた。年男がした（上矢島）。十一日に

は、山林を持っているものも持つていないものも、山の神として庭のすみ

にお松を立てた（木島）。

### 七 日

七草がゆ 元旦から七日までに神棚へ供えた物を下げるおじやを作り、ナズナやあり合わせの葉類を入れる。ナズナを七草と呼んで、あと草は知らない人が多い。昔はナズナをたたいて「七草ナズナ、唐土の島の渡らぬうちに」と歌つたが今はしない（伊与久）。ナズナ類を前日の六日に恵方より取り入れておじやを作る。七草は、ナズナ・葉・大根・蓮根・コンブ・ニンジン・ヨモギ等の七種。たきながら、「七草ナズナ」とうどの鳥が、日本の橋を渡らぬうちに「トントコトン」と唱える（小此木）。ナズナ・大根・ニンジン・茶・あぶらげ・イモ・餅等の七草を入れて、おじやを作る。前日の夕方取つておく。「七草ナズナ、唐土の鳥が渡らぬうちに、ストントン」と歌う（上武士）。大根・ニンジン・ゴボウ・菜・ヨメナ・ナズナ・餅など七色の物をまぜて、だしや塩気を入れておじやを作る。六日の晩か、七日の朝、まな板の上にナズナをのせて、ほう丁のみねでトントンとたたいて唱え言をいった。「七草ナズナ、唐土の鳥と日本の鳥が渡らぬうちに、トントンカラカ」おじには、四日お棚探しに下げた餅の一切れずつも隅に入れて煮る（南米岡）。

上武士では、七日に年始受けをする。もとは、茶飲み茶わんに七草を入れておき、それに手足のつめをしめしてはぎった（伊与久）。

七草粥を作る。七草は、ベンベン草のことで、煙からとつてカエリに入れる。カエリを入れる前に、マナイタの上にスリコギ、ヒバシ、米のシャクシ、吹竹、ウドン用のマナバシを七草と共におき、七草を包丁で次の七草の日の朝は「オジャヤ」を作る。オジャヤの中には、ネギ、人參、大（下瀬名）

根、七草（ナズナのこと）と、お棚さがしに下げる物を入れる。この日は年始日で、遠い親戚の年始がある（上武士）。

七草は六日の夕方にでもとつておく。とるのはだれでもよい。この辺ではなすことと七草といった。

元旦から七日までの間に神様におそなえしたものをとつておいて、七草とまぜて七日の朝におじやにした。これを神様にそなえたり、家族でたべたりした（家によつては、四日にそなえたものをさげてしまうので、四日以後にそなえたものを七草のおじやにいれる場合もある）。これは女衆が料理した。

なななをきるとき、「七草なすな、日本のとりと、唐土のとりが、日本の土地を、渡らぬうちに、七草たたいて、すとんのとん」といつた。今のはいわなくなつた。

七草を洗つた水を、爪をきるときにつけると、つめわざらいしないとい（上矢島）。

### 十一 日

倉開き 倉のある家では倉を開いてお供え物をする。三ガ日と同じものをおべる（伊与久）。倉を開いて米を出すとか、米をつきに行くとかする（東新井）。朝一番初めに便所の戸を開ける（小此木）。二日が蔵開きで、神棚に供えた鏡餅を下げて、お汁粉にする家もある（上武士）。十一日には、倉の中にお灯明をともす（上武士）。土蔵を開いて、へいそくを俵に立てて祝つた（上矢島）。

くわだて 煙に出て、中央に六尺ぐらいたずつ三さくのさくを立てて、その中央に半紙を横に二つ折りにしてさいて、右手の一片の紙を四垂れ幣としてお松につけて立て、他片の幣に白米・餅を供えて、朝できたらうどんを進せる。これは十四日の朝かたづける（小此木）。半紙の上にコンブ・ゴマメ・餅を乗せて、煙に松（竹でもよい）の枝を立てた所へ供え、お神酒をかけて拌む（南米岡）。松の枝に白い紙片をゆわえて煙に立て、サクを形的に三サクぐらいい切る。豊作祈願の行事である（下

潤名）。サク立ては十

一日の行事である。オ  
ザをもってカド松の回  
りを切る（上武士）。

十二日は、くわいれ、  
くわだて。烟へ出て一  
間ぐらいの長さに、三  
さく手ぐわでさくをき  
る。そこへお松を立て  
て、手を合わせて拝ん  
で来た。おさ」とか、か  
つぶし、ゴマを持っ  
て行って、烟の神様に  
上げて来た（上矢島）。

くわだて（松のかわりにささ竹一南米岡）



道祖神 ドンドン燒

キは昔からやらなかつた。お松はめいの家で焼く（南米岡・小此木  
・東新井・上潤名）。潤名では一月九日に道祖神の前にシメを張つてお  
祭りをする。演芸などもしたが、ほかでは道祖神は全然祭らない（伊与  
久）。

正月のシメ繩は取つておいて、養蚕のタワしづりの時のタワ繩にする

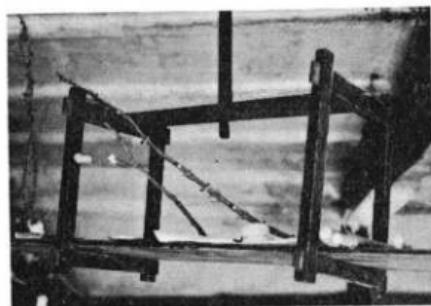
（南米岡）。

十五日の朝、まだ寝ている間に、子どもたちがおシメをもつて歩い  
て、八幡様の空地に集めて火をつけてもやした。これをドンドンヤキと  
いった。この辺では山がなかつたので、小屋を作らなかつた。おシメを  
集める時に、お金をもらつて歩いた。これは小さい子どもがもつて歩  
たものだが、それを上のものが集めて、菓子などを買って分けてやつた  
(上矢島)。

小 正 月

もの作り ニワトコの茎の皮を取り去つてハナを作り、神棚とお松を  
取つたあとへ供える（小此木）。花かきは神棚・便所・勝手・床の間・  
門・墓地に供える（上武士）。井戸神・うじ神等にもハナを供える。今  
はかかないで、ニワトコの木を二本ずつかわりに置く。ラミバシも元  
は作つた。アワボ・ヒエボは聞いたことがない（伊与久）。ニワト  
コの木を四つ割りにして、マユ玉をほさんでおき、あとで苗マの水口に  
さす（南米岡）。ハナ木を一本作り、十五日のカユをかき回して水引き  
をかけ、神棚に上げておき、あとで苗マの水口に立てる。苗がよく立つ  
ようになる（東新井）。ハサミバシはヤナギの枝で作り、一年中の神ば  
しにする（上武士）。ラミバシはほとんど作らない。用い方も不明  
(伊与久)。ニワトコ、またはヤナギを伐つて、カド松の数だけハナ木  
を作る（上武士）。ニ

ワトコの木を一本に割  
つて神棚に上げて、翌  
十五日にマユダマを挿  
み、小豆粥の中に入れ  
てかき廻しながら「ワ  
セモンカ、オクモソ  
カ、ナカデカ」と唱  
え、マユダマに付いた  
飯つぶによつて糰の  
品種の豊凶を占う。な  
お、これは田圃の水口  
に立てる（上武士）。



年神棚（天井から吊り、明の方へ回せる。小正月の  
マユ玉、十六、ハナ、供え餅等供えてある一小此木）

横につける（上潤名）

まゆ玉 十四日に米の粉をまるめて作り、ざるか盆に盛つて供え。クワの枝に飾る家もある。十六マユ玉はまゆ形に大きな物を作る。十七日にマイカキといつて、下げる食べる。現在は少なくなつたが、一升ぐらゐ作る。クワの枝にまるい十六個のマイ玉をさして、床の間に供える家もある(伊与久)。もとは八疊の間にいっぱいになるくらい大きな木の枝にマイ玉を飾つた。今では小枝にさすくらいであまりしない。



小正月のマユ玉飾り（左上が年神棚、右上が小此木）

カイコのよく取れる家のクワ畑に行ってクワ

を三株伐ってきて、そ

れにマイ玉や餅をさし

て飾り、部屋に吊るし

た。また小判飾りを貰

つて部屋の回りに吊る

したり、棚にはケヤキ

の小枝にマイ玉や餅を

さして飾つたりした(

南米岡)。十三日の晩か

南朝、クワやナナ

ギの木を伐つておき、

まゆの形をして、マイ

玉をさして、正月棚と

神棚に飾る。昔は方々

へさした。マイ玉は人にくれるものではないといい、自分の家でみ

んな食べた(東新井)。前日、クワ・イゴ・ナラの木を伐つておき、マ

ユ玉・アラレ・まるい餅・小判などをさて、神棚や床の間に飾り、若

餅のお供えを上げる。十七日の朝、取つて食べる(上武士)。恵方のク

ワの木を伐つてきて、十六といつてあんを入れない餅を十六個、それに

マユ玉の大きい物を十六個作り、その他は小粒の物を作り、枝に吊る

す。それに小判という米の粉で作った薄い葉子を吊るす。マユ玉は十六日の朝食べる(小此木)。以前はマユ玉をさかんに作つたが、今はほとんど作らなくなつた。マユ玉をゆでた湯を家の回りにまいて歩くと、長虫がいるといわれる(伊与久)。

十四日には餅をつき、これをマユ玉にしたり、小判形を作つたり、ノシ餅をサイの目に切つたりしたもの各十六個を、イゴの根っこに付けて飾る(上武士)。十四・六日にマユ玉をする。のし餅をアラレに切つて本につけて飾る(上潤名)。

朝早く蚕の当る家の桑を切つてきて(盃む場合がある)、桑の枝にウルチ米の粉でマユダマを作つたものを十六つけて花傘形にたらす。また餅をついて小判形や蛇の形を作つてつけ、正月棚のわきにさげる。

ついた餅は別に十二の丸餅にして正月棚のわきにさげる。

こうして飾つたものは十八日にとる。

この日は松をとり新竹をさす。

この日はニワトコの木(花木)を切つて、十一と十六の割り掛けを作つて神棚の太神宮に供える。また花木を一本に割つて箸一組を作り、紙にくるんで水ヒキをかけ、神棚にかぎり、十五日の小豆粥をかき廻し、その後苗代の水口に立てる。これをカエカキ棒という。

この日の晩は子ども達は戸毎に「木くんな、木くんな、くんなきやぬすむゾ」といしながら松をもらつて歩く。松をもらった松は大国神社の前に集めて焚く。これをドンドンヤキともドロクジンヤキともいう(下諏名)。

十四日は餅をつき、お飾りかえをした。むかしはハナ飾りをしたが、今はしない。クワの根ツコカ、枝にマユ玉をさした。クワの根は、蚕のあたる家の根をぬすんで来た。取られた家では、蚕があたるといつて、とがめはしなかつた。この日についた餅は若餅といった。マユ玉は、白米をひいた粉で作つた。これを小米の餅という意味で、こもちともいう(上矢島)。

オタキアゲ 正月十四日に、女塚ではオシラ日マチといって、オシラ

様を祭る。御飯を煮て、十四个まるめて、それに一本つ豆がらをさして年神様に供える。福俵は作らない（女塚）。十四日にオタキ上げといつて、小なべで御飯を煮て、それにウツギを十六本立てて年神様に上げる。小鉢に御飯を盛って、ウツギを十六本立ててある。それを翌朝

下げて家中で食べる（伊与久）。ニワトコで一本の棒を作り、十四日にオヒラキに御飯を盛って、その上へ一本とも立てて供える（上武士）。

飾りかえ 年神様のオンペロは下げたあとで、東方の烟などに立てておく（南米岡）。年神様のシメをはずした物は、クワの木がよくほざるように、クワの枝につけておく。また、おシメはほぐして、養糞のクワを伐る時のクワ繩にならう。カド松を取り去ったあとには松のしんを少し取って、穴にさしておく。トブサ松というのか、不明（小此木）。十四日にカド松を取る。カド松のシメ繩は苗バ（苗をゆわえる）にする（上武士）。十四日の飾り付けと、正月棚の飾り付けを直すことを、飾りかえという（下瀬名）。十四日にお飾りかえをする。ハナ飾りといつて、ハナを作った。これを十五日と十六日に飾り、十七日にはハ

ナを取る（上矢島）。

成り木の呪い 大正月のシメ飾りをはずしたものは、梅の木などの成り物の木にしばりつけておくと、よく実がなるようになるといつて、十

四日

オンペ

ロを糸

で枝に

吊るし

ておく

（南米

岡）カ

キの木

にオン

ペロを

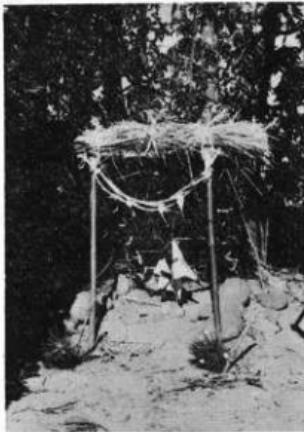
吊るし

ておく

（小此木）



成り木の呪い。カキの枝に年神様  
(小此木)



うじ神の飾りかえ（松飾りを取つてしん松を残し、小正月のまゆ玉・ハナを供える一小此木）

十五日がゆ 朝、アズキがゆを煮る時、カイカキ棒でかき回して、棒を進せておき、あとで苗代に立てる、苗立ちがいいといい、今でもする家がある。かゆ占いはしない。かゆを吹いて食べると、田植えに風が吹くという。かゆを食べたあと、茶わんを洗った水を家の回りにまく（伊与久）。十五日のおかゆを、オシラキに盛って年神様に供える。このオシラキを洗った水を家の回りにまくと、サービ（ヘビ）がはいつてこないという（女塚）。十五日のカユをたいたカマを洗った水を、家の

回りにまくとモグラが掘らないという（小此木）。十五日は朝アズキがゆ、夜はよい飯にする。三ガ日、七草十一日、十四日、十五日にはウジ神に食物を供える（小此木）。朝アズキがゆを作る。中に餅を入れカユカキ棒でかき回す。熱いうちに食べるが、作法として「吹かず」に食べろ、吹けば田植えに風が吹くといわれる（下潤名・上矢島）。十五日はアズキがゆを食べる。これを吹いて食べると、田植えに風が吹くといふ。昔は、十五日に神棚に上げたアズキガユを、朝のうちに土びんに入れて、ヘビやムカデがはいらぬよう、家のまわりにまつた。これは子供の役割りで「ヘビ、ムカデがへんねえよう」と言いながらまいた（上武士）。十五日にアズキがゆをして、ニワトコのハナ木でかゆをかき回す。これをカイカキ棒という。カイカキ棒は、もとを四つに割つて、マユ玉をはさんでおかゆをかき回した。これを苗の水口にさしこんでおいた。これは苗に虫がつかないようになつたまじないである（上矢島）。

十五日には、嫁に来て初めて正月を迎えたものは、大手をふって里へお客に行つた。嫁は祝儀のときの仕度をして行つた（上矢島）。

#### 果樹實め

カキの木に、なたを持つて少し傷をつけて「なるか、ならぬか。ならなきや、ぶつた切るぞ」といじめてから、おかゆをつけて回る（伊与久）。十五日のかゆを、カキの木になたで傷をつけた所になすると、カキの実がよくなるようになるという（南米岡）。正月のお飾りをはずして紙を実のなる木に巻いて、樹皮をむくと実がよくなつるという（上武士）。しめ縄を十五日にはすが、幣束のついた縄を、モモ・カキなどくだ物の木にしばりつけ、「ならないと、なたでたたいて傷をつけるぞ」といって、成らせる呪いをする（伊与久）。

大般若 十五日は大般若の日と呼ばれ、午後から夕方まで寺の年始に行く。寺では般若湯（酒）が出る（下潤名）。

十六日 十王飯（ジオウメシ）といつて、あぶらげ・カンビョウをまとめて五目飯を作る（上武士）。カテノ飯（五目飯）を作り、仏壇のジオ

ウ様に供える（南米岡・東新井）。「エンマの顔よごし・エンマの顔なで」といって、五目飯をたく。これを十五飯という所もある。（エンマのことが）（女塚）。

十六日はジョーさまの日といって、五目飯を食べた。ジョーさまは寺にあり、そこへ五目飯を上げに行った。この日は仕事を休んだ。この日は、カギ竹も休むといわれた（上矢島）。

「やぶ入り」

で、「鬼の首も許される日」という。戦前はからなず馬や牛の小屋を掃除した（伊与久）。「盆の十六日と正月十六日は、ウマヤゴエを取り」といって、十六日は畜舍小屋を清掃して、正月をしてやる（上武士）。十六日はヤブ入り。嫁の里帰りの日で、十五日から一泊で里帰りする（下潤名）。

十八日 十八がゆといって、十五日がゆを残したものを、朝暖めて食べる（女嫁）。以前は、親音様に馬を引いて行つたが、今はしない。三月十八日にもしていた。親音様の縁日は八月九日で、演芸などする（伊与久）。十八がゆといって、十五日のかゆを煮たままを洗つた水を取つておいて、十八日の夕方家の回りにまいて、「ヘビもムカデもどうけ、どうけ、おれさまだ、どうけ」という（小此木）。

十八日はマユカキで、小正月の飾り付けを取る。また、正月棚も下げる。この日の朝、十八がゆといって、下げた物をかゆにたきこんで食べる（下潤名）。十八日には十五日に残つたアズキがゆを食べる（上武士）。この日には十五日に残つたアズキがゆを食べる（上矢島）。

二十一日正月

正月のしまいで、「しまい正月」という（伊与久）。棚

おろし。正月様の棚をおろして片づける（南米岡）。二十一日正月が終るとき、遊はずに働く（東新井）。正月棚を下げ、新品は屋根の上に上げる（上武士）。二十一日正月でお棚をおろして、これで正月は終つたことになる（上矢島）。

この日は、お棚を下げる日。この日に、お棚を下げないうちにおきゅうをすると、肩のはつたのがおなるといった。また、頭痛もちなどに

もいよいよ。おきゅうをするときは、すりばちをかぶつてした（上矢島）。昔は、子供にすりばちをかぶせて、おきゅうをえた。きゅうはモグサ三つである（下潤名）。一月一日に、子供にすりばちをかぶせて、その上からおきゅうをえた（上武士）。エビス講 エビス様を祭り、お金がたんとはいるよう祈る。家にある小さい宮にはいったエビス・大黒様をおろして、白い御飯にてんぶら・おしるこなど作って供える。エビス・大黒は夫婦神だと思っている人が多い（伊与久）。座敷の机の上にエビス・大黒様を出して、お金を残そうというわけで、財産をかきこむようにタマ手を供える物もある。夕食の時、サンマやてんぶらをたくさんあけて供えるが、財産をたくさんあげ出すようとの意味だといふ。また、古銭を一升ますに入れて供えたが、ますます繁昌するといふ意味だといふ。今では貯金通帳なども出して遊せたりする（南米岡）。初エビスで、エビス・大黒を飾り、朝はうどん、夜はてんぶらを作り、サンマ・フナなども供える（小此木）。「二十日エビス」といって、神棚からお宮」とエビス様をおろして表座敷に移し、作道具（タマ手、カマ、ホ



エビス講（竹ぼうきは宝をはきこむ縁起物一小此木）

これから一年中働いてお金を残そうというわけで、財産をかきこむようにタマ手を供える物もある。夕食の時、サンマやてんぶらをたくさんあけて供えるが、財産をたくさんあげ出すようとの意味だといふ。また、古銭を一升ますに入れて供えたが、ますます繁昌するといふ意味だといふ。今では貯金通帳なども出して遊せたりする（南米岡）。初エビスで、エビス・大黒を飾り、朝はうどん、夜はてんぶらを作り、サンマ・フナなども供える（小此木）。「二十日エビス」といって、神棚からお宮」とエビス様をおろして表座敷に移し、作道具（タマ手、カマ、ホ

ウチョウ、クワ）を飾り、縁起物にテンブラと頭付きを供える（上武士）。二十日エビスとも、二十日正月ともい、エビス様を飾る。朝ソバを食べ、晩にはスシを作る（下潤名）。この日はエビス講で、朝はめんをする。夜は白飯でテンブラを作り、さかなを付けて、おかずをおひらにつけた。春のエビス様は御飯をいっぱい盛るんじゃないといった。御飯をいっぱいもららずにおいて、これにいっぱいになるように働いてもらうといって祝った。（上矢島）。

## 二十四日

赤味講。若衆組で米を出し合って、すしを作つて食べる（東新井）。

## 二十五日

雷電社新年祭 伊与久の年始日で、親戚の人たちがお客様に来て、参拝する者が多くにぎわう。店がたくさん出て、だるまなど売る（伊与久）

## 二月

### 次郎の一日

（二・一）

「次郎のついたち」といって、大体元日と同じように祝う（小此木）。人を使う人は、この日にひまを出して遊ばせた（伊与久）。今はしていないが、この日は赤飯か、ぼたもちなどのかわり物をした。仕事は休まずした（上矢島）。

### 出かわり

（二・二）

以前は、やとい人は一年ぎめだったので、やとい人の切れめの日になつていた。ここで一旦ひまを出して、新たに頼み直した。「決めだから、きょうはひまをくれる」といって必ずひまを出して遊ばせた（伊与久）。「出かわりなり」といって、もとは年番頭が一年つとめて切り替える日だった（伊与久）。この日に、仲にはいって世話をした人を呼んで請状を渡した。給金を決めた。今までいた奉公人はお客様にやつたりした（上矢島）。

ヤカガシ 豆がらの二またに二つのイワシの頭をさしてへつついで焼き、つばを三回イワシの頭にかける。豆がらをもやしながら、上ではほろくで豆をいる。イワンの頭を焼いたものをヤカガシといい、年男が焼ながら「四十八色の虫を焼く」「作物の虫の口を焼く」などと、何の虫でもその口を焼きするように唱える。(伊与久)。年取りイワシを買って、その頭を枝にさして、年男がつばきをビューフィックとかけて焼きながら「何の虫を焼き申す?」「ナス・ユウガオの虫の口を焼き申す」「四十八色の虫の口を焼き申す」などと唱え言をいつて呪う。それをかど口の上にさしておく(南米岡)。ヤカガシを焼くとき、「米の虫を焼き申す」「豆の虫を焼き申す」「五穀の虫を焼き申す」とか、ホウジャタ(豆の虫)の口を焼くなどと唱える。ヤカガシは屋根下にさして置いたり、お勝手の上のま神様に上げておいたりする(伊与久)。四十二色の虫の口を焼くといって、イワシの頭を豆がらの二またにさして、黒焼きする。それを出入口にさしておく(小此木)。豆をいる時、イワシの頭を棒にさして、つばをかけながらいる。ナス・スイカ・キニウリに油虫がたからいようなく唱え言をいう(東新井)。ヤカガシを作るとき「油虫の口を焼き申す、ネズミの口を焼き申す。十一色の虫の口を焼き申す」などと唱える(伊与久)。豆をいりながらカマドで豆がらをたく。豆がらにイワシの頭を二つきし、ツバを付けて焼きながら「豆の虫の口を焼き申す」と三回唱える。これは焼き終ると神棚に上げておく。これでトゲがささった時なぜると取れる(下潤名)。

ヤカガシは取つておいて、あとで油虫がひどく発生したときに、にえ湯をさしてその水をかけてやると、油虫が絶えるという(伊与久)。ヤカガシは、イワシの頭をマメ木の下ンマタにさして、カリカリに焼いたもので、しまっておいて、お産して後腹が病めるときになればよくなるといわれた(南米岡)。

節分の朝は、特別のごちそうではない。夜、米の御飯をした。夜、豆がらをもやして、ほうろく豆をいた。これはだれがしてもよかつた。イワシの頭を一つ、豆の木の三またにさして、これをほうろくの下で焼きながら、「作物の四十一色の虫の口を焼く」といつて、つばをかけ。これを三度くり返した。唱え言はこれだけではなく、知っているだけの虫の名をあげて焼く家もある。たとえば、油虫、青虫、コメの虫、タフの虫(シャタトリ)、スキ虫、ズイ虫、ヨトウ虫などとあげて、これらを焼き申す、という。イワシを焼いてから、それを軒下(トプロ)にさしておく。これをヤカガシという(上矢島)。

豆まき 男の年長者が夕方「福は内、鬼は外」といながら、大神宮様やえびす様に一番さきに豆をまく。統いて、お福荷様・牛小屋などにまく。それから、一区の大神や觀音様へ豆まきに行く(伊与久)。主人が豆をまく。「福は内(二回)、鬼は外(三回)」と唱える。家の中の神棚、お棚、各室がすんだら、豆をまにする人で神社へ豆まきに行く(上武士)。豆まきを年取りといい、まず第一に恵方から取りはじめ、外より内へとしてくる。年男には大がい家長となり「鬼は外、福は内」と大声に呼び上げて外にまいてから家中へはいる。この時は家の戸しようじをあけ放ち、第一に恵方、つぎに皇太神宮・先祖代々・かま神・えびす様という順に豆をまき、終ると大急ぎで戸をしめる(小此木)。豆まきをするとき、子供が拾つて自分の年の数だけ豆を食べる。豆まきをしたあとで、豆を入れて福茶を飲む。夕食は米の御飯(南米岡)。豆まきのあとで、豆を年の数だけ食べたり、福茶を飲む。ユズのみそづけを食べる。厄年的人は、厄落としに一夜旅行をする人もいる(上武士)。豆はなまいりのないよう注意している。「なまいりがあると、鬼に世を取られる」といわれる(小此木)。豆は少し取つておいて、初雷がした時に食べる、こわくないといわれ、神棚にあげておく。また年の数だけ供えれば目を病まないなどといい(伊与久)。豆は神棚に取つておいて、初雷が鳴ったときにまくと、無難におわるという(南米岡)。

節分を年取りという。家で豆をまいて、武士神社にお参りに行く。豆は「マメで暮らすように」、ナスは豆がらとナスがらをたいている。豆は「マメで暮らすように」、ナスは「借金をナス」という意味である。豆をいりながら、二またの木にイワシの頭を二つさして焼く。これは虫の口を焼くことでヤカガシという（上武士）。節分は年取りで、厄年の者は節分になつてから年を取るといわれる（下潤名）。

豆まきは次の順にする。まず、豆がり終ると、一升ますに入れて大神宮様や稻荷様に供える。稻荷には油ゲーしの頭を二つさして焼く。これは虫の口を焼くことでヤカガシという（上武士）。節分は年取りで、厄年の者は節分になつてから年を取るといわれる（下潤名）。

#### 初 午

カイコ神 二月にはいつ初の午の日が初午で、カイコの神様のお祭りだと思っている。マユ玉を作つて蚕神に供える。稻荷様とは別で、祭らない。また、ヒノエウマの日にはお祭りをしない（伊与久）。

稻荷祭 旧正月元旦より初めての午の日に稻荷様のお祭りをする。餅をついて神様に上げる（上武士）。二月の初の午の日に餅をついて祝う（東新井）。屋敷稻荷は別に祭らない。家によつては、屋敷稻荷へマユ玉を作つて上げる。マユがたくさん取れるように、マユを百貫取りたいときはマユ玉を百個ぐらい作つて、重箱に山をかけて入れ、その上に豆がらをかけて進せたが、今ではマユ玉を作る家はほとんどなくなった（南米岡）。女塚でも屋敷稻荷にマユ玉を供える。マユ玉はますの底に豆がらを敷いて、その上に山かけに盛つて供える。初午にはアズキの物を食べることになっている（女塚）。小此木では四月十一日に、「マユ」玉を作つて稻荷様に供える。下組ではホウレンソウの出荷が終つたあとで適当な日を定めて、宿に集まり稻荷様の旗を作つてお祝いする。稻荷

様は戦後わざわざ下組で作ったもので、宿でお供え餅をついて各戸に配つている（小此木）。

マユ玉を一升ますに入れて大神宮や稻荷様に供えた。稻荷には油ゲー丸干しを供えた。ヒノエウマが初午だと「火が立つ」として、初午の行事はやらない（上武士）。初午に稻荷様のお祭りをする。この日に仕事をすると蚕にアリがはいるという。また「ヒノエウマに仕事をすると火が立つ」といつて、仕事をしないで慎む（下潤名）。ウジ神様にかわり物をして上げた。餅をついて、仕事を半日ほど休んで、よそへ遊びに行つた。この日に風呂をたてる時、火にたつといつて、たてなかつた（上矢島）。各戸で餅をつく（上潤名）。

#### 八 日

ダイマン節供 二月八日と師走八日にはミケーをさおのうらに付け、中にヒイラギを入れて庭に立てたり、ヒイラギを家の出入り口にさして「早くダイマンの上げろ」といつて、子供に立てさせ、その子供にオヒネリをくれた。ヒイラギはカイド（屋敷の出入り口）によく植えておく木で、魔除けになる。ダイマンは明治までは家なみにみんな立てたが、今はしなくなつた（伊与久）。ヒイラギをメカイ（かご）に入れてさおの先につけて庭に立てたり、トボロにはヒイラギの枝をさした（南米岡）。ダイマン節供といつて、ミカイにヒイラギとかまを入れて高い所へ下げ、魔除けにした（上武士）。東新井でもミカイにヒイラギとかまを入れて立たたが、鬼が来るといつて魔除けにした（東新井）。（しわす八日の項目を参照）

二月八日をダイマンゼックといつて、この日は小豆飯を炊く。そしてミカゴに格を入れ、竹の先に鍵をさしてこれを門に立てた。これは魔物除けである。

ダイマンといつて、この日にヒイラギの枝を魔除けのため、入り口にさす

(下瀬名)。二月八日をダイモンといつて、ヒイラギをさす(東新井)

一月八日はダイモン・ダイマン。出口出口にヒイラギをさし、メカイをたか竿につけて、家の庭に立てる。翌朝になると、そのメカイにかねがたまっているといった。サンショとヒイラギはどこにもあった。おもて植えるものじゃねえ、裏へ植えるもんだ(保泉)。今はしないが、ヒイラギの枝と付け木一枚、メカイに入れてさおの先きつけて軒の先きに立てた。これをことおさめといった。立てた物をダイマンといった。この日、天から金が降ってくるといった。この日は、おとなのが信心家が太田の春竜様へおこもりに行つた。今は行かない(上矢島)。

こと二月八日を、こと八日、こと初めといい、赤飯をたいて祝う家もある(東新井)。

針供養 お針の師匠さんの家では赤飯をたき、たち板に針道具を並べ、トウフに針をさしておあかしをあげ、そのトウフを川へ流す。流すときケガをしないように針はぬく(伊与久)。下瀬名では小正月十四日も針供養の日である。針をいじらない(下瀬名)

### 櫛 若

(一・一五)

この日の雨は梅若の涙の雨という(下瀬名)。

### 大師参り、春祭り

男女問わずに、年を取った人が寺参りをした。時によると、寺の大門に人がつながったといふ。

また、この日は矢島の春祭りであった。矢島の鎮守様はかつて大明神(葦影様)である。曲輪(タルワ)ごとに鎮守様ののぼり(辻のぼり)を立てた(上矢島)。

### ひな市

二十七日を中心に、境町にひな市が立ち、買い物に行つた。

## 三 月

### 三月節供

(二・三)

ひな飾り 内裏様・五人ばやし、ふつうひな等を飾り、ひし餅・すし・その他色々の供え物をする(伊与久)。大がいひな段を作つて、最高段に父母の内裏、次に若い者の内裏を飾り、次に官女・隨臣を左右に飾り、五人ばやしなどを飾る(小此木)。ひな様は一日頃飾つて「七日帰り」は忌むのでさけて、八・九日にしまる。仏が七日に帰るので、七日帰りは忌まれる。また、一夜飾りも忌まれる。古いひな様は、しまる時に川へ流したり、お堂の傍へ出したりする(雨米岡)。ひな様は二月十八日に出した(上矢島)。もとは、旧三月節供にハナ祭りをした。節供が終つてから、一番古いおひな様は、近くの川へ行つて流してきた(上矢島)。古くなったおひな様は、「二日の日に流す(下瀬名)。

### 贈 答

初節供には嫁の実家からひな人形を贈り、お返しにはサクラ餅などを返す。伊与久の辺では、嫁にくれた初節供には一万円ぐらゐの内裏びな(親王びな)を親元から嫁入り先へ贈り、初孫が生まれると

その子のために別にガラス箱入りの舞踊人形(五千円)ぐらいを贈る習慣になっている。親の負担はかなり大きく「今年は嫁にくれたので、ひなを取られる」などと言う話しぶりになる。お返しに配るサク餅は十

一・十五個など奇数にする(伊与久)。嫁に行った時の初節供には実家から内裏びなを贈る。長女の初節供にはふつうひなを贈る。節供返しには、サクラ餅やかし折などを返す(雨米岡)。新しい嫁とモコ(むこ)は仲人の家へお礼に行く(東新井)。嫁に行った娘たち夫婦が、ひし餅その他の使い物を持って客に来る(小此木)。三月一日の日までに、初節供の場合は嫁の実家から内裏様が贈られてくる。お返しは、サンマのひらきか、イワシのひらきである(下瀬名)。初節供の場合には、嫁の里から内裏様が来た。この辺では、初節供にはお返しをしないことになつてある。嫁さんは三日に里帰りをする(上矢島)。

餅 習 前日に餅をつき、三日にはしをを作る(伊与久・東新井)。餅は赤・青(ヨモギ)・白という風に作り、ひし形に切つて供える(小

此木）。三日はすしと餅を作った（上矢島）。

いわれ 以前は男の子も、女の子も祭ったが、今では「子にひなを見せて行儀をなおせ」といわれるよう、女の子供がひな人形のようにおとなしく行儀くなるように、ひなを飾る日となってきた（伊与久）。女子の子供のお祭りで、幼女たちの天下といふ風になる（小此木）。この辺で、節供というのは三月・五月・ハツサクの節供の三日だけをさすのがふつうである。四日は節供がら、セチマともいう（伊与久）。

### 彼 岸

二十一日が中日。先祖の祭りをする（上武士）。先祖祭りで、ぼた餅を作つて仏様に供える（伊与久）。春の彼岸の中日に、子供にカンの灸（きゅう）をするとよく効くというので、もとは子供の脳天や手首によく灸をされた（南米岡）。

社日には小泉の社日様にお参りする人もいる（伊与久）。

最初の日を入り口、中日、最後の走り口といつて、三回ボタ餅を作れる。墓参りは走り口にする（下潤名）。彼岸にはぼたもちをする。むかしは彼岸のときに、念佛講の人が念佛をしたことがあった。初めて彼岸を迎える仏様がある場合には、よそへ出た子供をお客にきた（上矢島）。

地神講 三月の社日に男の若衆が食糧持寄りで午後から集まり、自炊し、餅をつき、御馳走を食べて飲む。この晩はバクチをしてもよいとされた（下潤名）。

春祭り 三月二十五日が雷電神社の春祭りで、この頃はモギが出来るので、ちぐさ餅をよくついて、親せきに贈る。うどんを作る（伊与久）。四月三日、鎮守皆原神社の祭りで、赤飯に種々の煮物を作る（小此木）。四月三日は宇のお祭りで、赤飯や煮物を作る（上武士）。四月十七日が春祭りで、餅をつく（東新井）。

三月二十五日は雷電神社の祭日、荒れ日で大風が吹くことが多い。大風が吹くと今年の田に水が充分あつて田植えが楽だといわれる（伊与久）。

天神講 三月末に学校の卒業式が終ったところで、小・中学校に出ている子供たちが、それぞれの地域ごとに組を作つて宿に集まる。宿は中学三年の子供の家がたいてい昔から決められる。宿では風呂にはいり夕飯を会食した後、菓子など食べながらプログラムに従つておどりや歌やゲームをする。と紙に代表が「天地天満宮」と大きく書いて、その下に各人が自分の名前を書いたものを天神様に上げてくる。雷電神社の境内にある菅原道真公の社にお参りする組もある。また、吉沢熊氏の屋敷内に天神様の石宮があり、先祖が名主で寺子屋師匠だったので、台石に弟子たちの名が刻んである。そこへ近所の子供が天神講をして供え物をする（伊与久）。卒業式に免状もらったあと村中全部でやるわけだが、高学年（中学生と六年生）が倉庫へふとんを持ちこみ、五目飯か赤飯かすしを作つて食べ、泊つて朝帰る（東新井）。

### 四 月

#### おしゃか様

（四・八）

家では餅や赤飯を作つて仏様に供える。年寄りや子供は寺へ甘茶をもらいに行く。藤の花やウツギは別に飾らない（伊与久）。旧四月八日、昔は一銭もって寺へ甘茶を飲みに行つたが、今はしない（南米岡）。新四月八日は花祭りで、おしゃか様を祭る。寺で甘茶をいただく（上武士）。藤の若葉を門戸へさす（小此木）。この日、藤の枝を取つて来て、これにもち草をつけて軒下にさした。お寺では、藤で飾つた家を作つた。甘茶をわかして子供にふるまい、おしゃか様の像に甘茶をかけた。もとは、この日に太田の香竈様にお参りに行った（上矢島）。

### 五 月

八十八夜

（五・二）

シモップタ シモップタといって、必ず餅をついて霜(しも)が降らぬよう折る。雷除けの代参はしない(伊与久)。シモップサゲ、霜除けのお札を神主に作ってもらつて、道の辻などに立てる。ふつう餅をつく(伊与久)。

伊勢崎市名物の稻舍(いなふくみ)神社の祭りでお参りに行く。蚕神としてこの頃お参りに行き人が多くなってきた。

蚕道具の市がたつ(伊与久)。

五月節供(五・五)

フキゴモリ(ヨモギ・ショウブ)

四日の夕方  
モチ草とショウブを家の軒下か屋根に三とこさす。また、ショウブ湯を

シモップタ (88夜の霜除け札一花香塚)



たててはいるが、この時ショウブの葉で鉢巻をすると、頭を病まないとか、あつけにあたらないとかいう。夜食には御飯を煮るが、「四日の晩は男衆に盛り出してもらつて、女衆は食べろ」と昔からいわれる。これは、昔神功皇后が戦争に勝つてきましたので、女を大事にするのだろうという。「ショウブ酒は女衆も飲め、蛇にのまれない呪いだ」といわれる(伊与久)。四日の夕方、ショウブとモチ草(ヨモギ)を軒にさして飾る。これは長虫(ヘビ)が家中にいるらしいように、ショウブで屋根をふくわせたという。また、「ショウブ酒は女衆でも一チコは飲み、悪虫を下すから」といわれる。また、五日の節供は、

神功皇后が三韓征伐で勝った祝いだから、「女がりきんでもいい(いはつてもいい)」といわれる(伊与久)。屋根下へヨモギとショウブをさし、ショウブ酒を飲むのは、昔、女人人がヘビにねらわれるのをさけるためだといわれる(上武士)。五日節供の前の日に軒下にショウブとモチ草をさしておくと、長虫にさされないという。(ヘビはショウブがきらいただ。また、ショウブとモチ草はサンオノミコトのオチ退治の魔除けだともいう。少しショウブ酒を作つて、となりの口をショウブでしづつついで飲む。ショウブ湯の昔話。昔、長虫が来て女の腹にはいった。そして、「腹に子があるがショウブ湯にはいるとおりてしまうので、蛇のお産ができる」と言つたという。だから長虫が女の腹にはいつても、ショウブ湯にはいればどの子が生まれないで人間の子が生まれるという。また、腹の中の子が長虫の子か人間の子かわからぬとき、ショウブ湯にはいれば、人間の子なら満足の子が生まれる。また、ショウブ湯にはいると病気にならないという(南米國)。五日のイエバン(前の晩)にショウブ湯をたて、かどロ・大神宮様えびす様・小屋にショウブとモチ草を進ぜる。ショウブ酒を飲むと、ムカデやシーピ(ヘビ)にかかりれない。だからどんな家でも、昔から嫁にでも何でもショウブ酒を飲ませた(女塚)。ヨモギとショウブをあわせて軒に供えたり、神棚・小家の軒・氏神・井戸・便所などいろいろに供える。ヨモギはよい香りで昔からの薬草の一類、ショウブも根が漢法薬の一類で、その香りはすごい高い。そのためもろもろの不淨をはらい疾病を除くというふうになっている(小此木)。ショウブの節供とともに、男の節供ともいう。四日の晩、家の全部の入り口の屋根をショウブとヨモギ各三本でふく。また、別に三本を夜露をくれて、五日に神棚に供たる。ショウブは蛇が嫌い。女はこの頃から外の労働が多く、蛇にいたずらされるので、これを除けるためのマジナイトという。ショウブ湯にはいると女は蛇の子をオロスといわれる(下瀬名)。

四日の夕方に、ショウブとヨモギを、屋根(屋根のあるところ全部)

と、神棚、仏様、稻荷様にさした。これにはつぎのような話がある。ある時、大蛇が娘と恋をして、子供ができた。五月五日のショウブ湯にはいれば子が流れるとか、ショウブ酒を飲めば子が流れるといわれた。そこで、とくにこの日は、女の子にはショウブ酒を飲ませた。ショウブは劍の形をしてるので、悪魔がはいって来ないという。そのショウブで頭をしばれば、頭の痛いのがなるという。腹をしばれば、腹がなるをいふ。また、湯の中にショウブをいれて、ショウブ湯をたてる（上矢島）。



こいのぼり（小此木）

多くなった昔は、神功皇后が朝鮮征伐をした時のことを見るものだから、神功皇后をえがいたのぼり旗をたてた。以前はよほどの大尽でないと布きれの吹き流しは無かった。それが戦後一般化して、吹き流しが流行し、一本三・四千円もするさおが七・八本もある家さえもあるほどである。座敷のぼりは大正末から昭和初めごろから流行した。のぼりをもらうと、さおにつけるためにへりに白もんでチエという輪を二十個ぬい付ける。一日のうちにつけるように、近所から手伝いが来て作業した。チエは必ず二十個とまつていたもので、二十才の

ことをハタチというのも、ハタのチエが二十個つくからだという（伊与久）。家の外には家紋入りの吹き流し、五色の吹き流し、ヒゴイ・マゴイのこいのぼりを飾り、家中には武者人形・武具・よろいかぶなども飾る（小此木）。二十八日ごろから立てた（上矢島）。

答 男の子の初節供には近縁のものから、吹き流しやざしきりばかり贈られる。多い家では十五本も二十本ももう。以前は近縁からはのぼり、遠縁からは紙のこいのぼりをもつた。もとは、節供返しをしなかつたが、今はカシワ餅などを返す（伊与久）。

嫁モコ（むこ）は実家および仲人の家のタラの干物（五日ダラ）・さとう・お金などを持つて行く。「片祝いは困る」といつて、必ずお返しをする。節供返しには餅もいっしょに持つていく（伊与久）。新しく嫁に来た人は、三年間は里と仲人に、タラの開きと金一封を包んで行く（上武士）。嫁は赤飯を持って実家へお客様に行く（東新井）。嫁の里から人形やこいのぼりが来るが、お返しはタラの干物である（下諏訪名）。こいのぼりについている紙に包んで、干したタラを親もとへ持つて行く。ゴンチダラという（東新井）。初節供の場合には親もとから二本、のぼりが来た（上矢島）。

食 習 節供の食物は、草餅・赤飯・押し・うどんなどで、うどんは長くつながるように作る。また、里イモを食べると、ヘビやムカデにさされないという（南米岡）。赤飯・カシワ餅・フキを食べる（上武士）。赤飯をする（上矢島）。

セチマ 六日はセチマといい、節供がらである（南米岡）。

八日節供 八日は八日節供、からざお節供といい、こいのぼりをしまう（伊与久）。しめえ節供（上矢島）。

## 六月

八丁じめ

(六・一)

悪病除けのため、シメ籠をササ竹に飾り付けた八丁ジメを村の境の道端に立てる（南米岡）。宮話人が字の出入口に青竹を立てシメを吊るす。色々の悪いことがはいらないように（伊与久）。フェセギ神祭で、悪病除けまたは色々の不淨を村に入れない行事で、大辻にシメと札を立てる一部落で八つとか四つとか、数が定まっている（小此木）。一日に八丁じめをする（下瀬名）。村の入口にわりい病がはいらないように、病除けまたは色々の不淨を村に入れない行事で、大辻にシメと札を立てる一部落で八つとか四つとか、数が定まっている（小此木）。一日に八丁じめをする（下瀬名）。

#### 八丁じめをはる（保泉）。

一丈ぐらいの高さのところに竹のしんを伐って、上から一ふしぐらいのところにヨタレベエ（へいそく）をつけて、区長か村世話人が、村のはずれのところに立てた。矢島では七本立てた。北は花香塚、東は西今井、南は境西は木島、西南は百々、北西は瀬名、東南は三つ木・女塚との境界に立てた（上矢島）。境祭り、神官が八丁じめを立てる（上瀬名）。



八丁じめをする一下瀬名

に供えておく。田植えに使った道具を洗って縁がわに上げて酒を供え、田植えに立ち合った人たちで飲食する。オカマ様に供える苗は、最後に水口に植えておいた苗を抜いて（かわりにほかの苗を植えついでおく）、よく洗って供えておく。この苗で、魚の骨がのどにささった時に下がるという（伊与久）。田植えが終ると、植えつきをして残った苗を三株取つて来て、この上にマンガを洗つてのせた所へ供える。あかりをつけ、酒を進せる（南米岡）。田植えの初日は苗ビラキとしてお祝いする。また、サンブリの日に、オカマ様の前に水口の苗三本とマンダワとおみきを供えて農作を祈る。この苗は神棚に供えておいて、魚の骨がのどにささつたとき、のどをなざると取れるといわれる（下瀬名）。

田植えが終ると、マンガ洗イをする。日はきまつていない。一番最初に植えた田の水口の苗を三株抜いて来て、根を洗つて、表座敷にマンガを置き、その上に苗を上げた。御酒をみつたれ、お祭りした。また、田の神様へといって、ぼたもち（ひまな時は餅をついて）、そのほかにうどん、煮さかななどを盆の上にのせて、神棚へ上げた。以前は、苗を翌朝オカマ様へ上げた。今は、苗は取つて来た日にオカマ様に上げる（上矢島）。水口祭り、正月十五日のカユカキ棒を、苗代のあった田の水口にさした（木島）。

半夏むかし、ハンゲという人がいた。あんまり忙がしいので、田へ片足、畑へ片足つこんで死んだという。そこでこの日は田植えをしないことになっている（木島）。

カイコ祝い 春ゴだけは、カイコ祝いか、休み祝いをする。春ゴが終えた時に餅をついて、それをみやげ物にして嫁が実家へお客に行く。また、手伝いの人を呼んでふるまう（伊与久）。

#### 田植え

マンガ祝い・サンブリ オサンブリともい、田植えが終った時に少しお祝いをする。一番あとに残った苗を三本洗つて持ってきて、オカマ様

## 七月

### カマノロアキ

（七・一）

地獄のカマのふたがあいて、仏様が一日中歩いて一三〇里で、盆に出

てくるという。七月になつてから死んだ人がいると、埋める時に「来年来る来年来る」といって、シラヂ（すり鉢）を頭にかぶせてやる。そのわけは、あの世に行く途中で盆に出て来る仏様に行き会つたとき、「オレが行くのに、ウヌはなぜ寺へ行く」といつて、頭をぶたれながらだという。以前はカマノロアキには焼き餅を作つたが、今は全然作らない（伊与久）。カマのフタアケ。地ごくのカマのふたが開き、お盆が旅立つ日である（下源名）。

七月ははとけ月（東新井）。先祖様は七月一日に地獄を出発して、七夕のときに天の川で足を洗つて来るという（木島）。旧七月一日は「地獄ノカマノフタラヤキヘガス」といつて、焼き餅を作つた。米粉の焼き餅を作り仏様に上げて家内で食べた（上矢島）。

#### 七 晚 ゲ

（七・一七）

一日から七日まで一週間、夕方カイドの先で麦わらをして、「七晩ゲ（ナナバンゲ）八晩ゲ（ヤバンゲ）ケツニネブツガデキンナ」ができる。頭にカサーでできんな、針とげふむな」と唱えながら、灰をつか散らかして歩いた（伊与久）。夕方、カドで麦わらをもやし、灰をたいてひろげその上を唱え言をいながら歩いた。「七晩ゲ、八晩ゲ、ヘビもムカデモはいるな。おしりにネブツができるな」。年寄りがついて、子供にさせた。また、火がもえる時、唱えながらおしりをたたいた。悪い病気にならないようにしたことで、ずっと前に止めた（南米岡）。一日の夕方から七日の夕方まで、カドに新麦わらでカド火をたく。その火がもえきれぬうちにカド一面にならして、「針とげさす穴ヘネツツでん」といつてふみ消したり灰の上をまたいたりする。古老はこれを害虫駆除だといふが、実際には疫病除けらしい。二、三年前まではよくしていた。今でもしている家がある（小此木）。一日から七日まで麦わらを、三本辻やカイドウで「ヘビもガイロもはいるな」と唱えながらもす（保風）。

七月一日から七日まで一週間。子供たちがカド口に麦わら束を立て

て、それに火をつけて「ナナバンゲ、ナナバンゲ、ハリ、トゲ、フムナ」とはやしたてていたが、今はしない。また、この期間は、セキトンサン（石尊様）で神社の当番行事が、七晩燈籠をあげた。セキトンサンは大山神社を祭る（中島）。旧七月一日から七日まで、夜もした。小麦わらをまるめて、カド口でもやした。小麦をもやすのは子供で、この時「ナナバンゲ、ヤバンゲ、ケツニネブツガデキンナ」といしながら、しりをまくつてあぶつた。これをする時、はれ物ができる、という（上矢島）。一日から七日までの夕方でした。「ナナバンゲヤバンゲ、頭ニカサガデキンナ、ケツニネブツガデキンナ」といつて、小麦わらを束にして、子供がもやした。もやしたあと灰は、「ヤツラフムナ、ヤラフムナ」といつて消した。また、この日、カイドにアワとソバをまいた。これは、厄病神が家のソバまで来ても、アワづに帰るという意味である（木島）。

#### 辻 念 仏

（七・一七）

以前は、子供が一日から七日まで七晩の間、寺から村の端の家までの道を、ちょうどちんづけで鐘を鳴らして回り歩いた。一日交代に上つて行つたり、下つて來たりして（東新井）。一日から七日まで、てんとう念仏の時のじゆすに、引く繩はあら繩で作る。天王様でなつて回り始め、村を一回りし、県道のへりの馬棚（馬さんの家）のヒビの木に引つかけて終る（東新井）。つじねんぶつは七月の一日から、カンカンカンカン、カンカンカンたいて辻を回つて歩く。それが一週間たつと、七日の七夕になる。そのところを昔は、辻念仏の調だなんて引いた。それが今は無くなつたわけですね。網をナシマイダンブ、ナシマイダンブつて引つぱる。毎戸出て、出ないと網引きに出ない者は若い者に懲まれると田んぼだつて引つくり返されたことがある（東新井）。東新井では、七夕に荒縄を太くよつたものを輪にしてジユズのかわりにし、子供がはだかになつて寺から村の中を「ナンマイダンボ」と唱えながら引き回した。十字路まで行くと川の中へはいって水をあびたりして、県道まで行

つて終りにした。これは天王様のみこしのかわりにやったことであるといふ（東新井）。

### 七夕

#### （七・七）

たなばた飾り 以前は旧暦、今は新暦です。新しい青竹に五色の紙に字を書いて吊るし、軒場に立てる。野菜など取れた物を七夕飾りのそばの机にのせて供える。七夕様には新しい物を上げるといって、新しい小麦粉をひいて「まんじゅう」を作り、キニウリ・ナス・スイカなどのセンゼイ物を机にのせて進ぜる。着物も新しい物は七夕様に進せてから着せらうといふので、衣類やたなびなども新しい物は供える（伊与久）。

六日の晩、七夕飾りを作り、おみあしなつけ、野菜・果物などを供える。七日の夕方、川へ七夕飾りを流す（南米岡）。飾り付けは六日の夜する。七日にはふかしまんじゅうを作り供える。飾り付けは夜早川に流す（下瀬名）。

墓そそうじ 七夕の朝は、盆の墓そそうじをするものと決まっている（伊与久・南米岡）。

いわれ、その他 昔から、七夕にはウリ煙やメズラ煙へはいってはいけない、けん牛・しょく女の二人が逢引きしているからとか、七夕様がメズラ煙で夫婦のちぎりをするので、七夕には烟にはいれないといふので、五日にナスやメズラを取つておく。また四つ前（午前十時の前）にメズラ烟にはいる病気になる、七夕様が烟で行きあつているからといふ。そこで雨がたとえ三粒でも降れば、天の川が増えて七夕様が来ないから行きあえないといふ。天の川から悪い病気を持つてくるから、雨が降つて七夕様が来られない方がいいと昔の人はいった。また「雨が三粒降れば馬のシリゲー（尻がし）を火棚に上げてしまえ」という。作物がはずれるからだといふ（伊与久）。一方、南米岡では、七夕に雨が降ると作物が当るといい、メズラ煙にはいるのはもちろん、メズラを食べてもいけないといふ（南米岡）。

以前は、七日の四つ前に柏川へかみの毛を洗いに行くときれいになる

といわれ、女衆がよく川へ洗いに行つた（伊与久）。七夕の四つ前にかみの毛を洗うと、せっけんをつけなくも、よこれがよくおかるといわれた（南米岡）。女は朝八時前に川で髪を洗う（下瀬名）。たなばたは織女姫とけん牛の二人が天の川のはたで一年に一度あう日にされている（小此木）。新竹に短ざくを下げたが、短ざくに字を書くと、字が上手になるといわれた。いものつゆですみをすつて、七夕様の字を書けといつた。また、七夕様の日には、四つ前にはメズラ煙にはいるなどといった。

それは、メズラ煙へ天からお姫様がおりて来て、七夕様とあうことになつていて、それを飛揚するといけないからだといふ。また、四つ前に雨が降ると天の川が水出して、七夕様とお姫様が会えなくなるといふ。また、四つ前にそらめんをゆでて家中で食べれば、はやり病いをわざらわないともいつた（上矢島）。

食 習 ふかしまんじゅうを作る。これがふかしまんじゅうの始まりになる。以後、農休み・十五夜・十三夜などに作る（伊与久）。朝ふかしまんじゅう、ばた餅。夕食はおめん（うどん）（南米岡、他）。

「たなばたや 子供の喜ぶ うでまんじゅう」という（伊与久）。

#### （七・二三一・六）

### 盆

日 取り 盆の日取りは、境町だけでも旧町村などがまちまちで、四回に分れて行つている。七月十三・十六（旧村部、西部）七月二十三・二十六日（十日遅れ、上矢島）八月十三・十六日（一月遅れ、旧町内）九月一・四日（八月半遅れ、三ツ木）

盆迎え 墓そそうじは十二日までに一族が集まつてする。墓地はふつう一族が一場所にまとまつている例が多いが、共同墓地ではない（伊与久）。十三日の夕方、寺へ盆迎えに行く。供養としてお金を三十・五十円ぐらいと米を重箱に入れて、弓張りぢょうちゃんがないので、「今晩は」のちようちんを持って行く。寺でちようちんに火をもつてきて、家の盆燈の明灯に火をつける。盆花もこの時に取つてくる。迎え火はたかない。以前は墓地へ盆迎えに行って、おとなが「迎えに来たよ、おぶ

「ちやれ」といって、おぶうまねをして盆様を連れて来た（伊与久）。

盆迎えにはふつう主人、よんどなければ若い人が寺へ行くが、米と金百円ぐらい持つて行き、寺からお茶か線香などをもらら。ちょうどおんを持つて行き、寺の壇から火をもらつて家の盆棚にあかしをつけると、それがしるして仏様がお客に来るという。家に迎えてはいるときは玄関からはいらないで、外から座敷へじかに上がる（嫁入りの時、嫁が家に上がるのと同じである）。迎え火や送り火は、昔はいたが今はたかない（南米岡）。東新井では、盆の十三日に餅をつくと、その音で仏様が来るといつて、ふつうの盆でも餅をつく（よそ村では新盆の時だけに餅をつくが）。盆迎に寺へ行く時に盆のみやげにおサゴと金二十円持つて行き、寺世話人に渡して寺のあかりをちゅうちんに移して盆様を迎えてくるが、家へ迎えてくる時に後をふり返つてはいけないので、夢中でまつすぐに帰つて来て、家の盆棚にあかりを移す。これで盆様を迎えたことになる（東新井）。十三日の夕方、カイドで豆がらをいた。これを迎え火という。火のそばに空きタライを置く。ここからお盆様を迎え、縁側からいる（下瀬名）。盆迎えの準備として、墓場の掃除をしたり、クネ（垣根）をゆつたり、道を掃除したりする。盆ブチには寺へ行つた。だれが行つてもよかつた。その時、米を一重箱と金を少し持つて行つた。お寺で火をつけて来て、カド火をたかず縁側から上がつて、盆棚のみあかしにろうそくから火を移した（上矢島）。

盆 棚 表座敷の隅に給桑台をすえて戸板などの板をのせて棚にする。前日取つたチガヤを干して繩にない、新竹の枝を少し残して柱にし、カヤ・ハギなどを飾りつける。棚の上には盆ござを敷いて位はいを置き、盆花・造花を飾りスイカ・トマト・トウナスなどの野菜や果物、水、ナスの馬などを供える。おせんを作つて、朝ぼた餅、豆うどん、夕御飯などを供える。生のナス・インゲンを細かく切つて供えたりする（伊与久）。盆棚にはチガヤの繩をなつて、回りに張りめぐらせ色紙をオンベロに切つて吊るす（東新井）。盆棚は、花、ハギ、カヤ、竹等



盆棚（棚下に無縫仏のソウリョウ花を飾る一小此木）

盆棚に飾つて、留守になつた仏だんにもぼた餅を供える（伊与久）。

無縫仏 家によつては、盆棚の下へナスの馬を置きソウリョウ花を飾つて、カワラケに御飯などを盛つて盆にのせて簡単な供え物をする。ソウリョウ花は、盆花（造花）を買つた時に、特別に小さく、花一つ、葉一枚のものを付けてよこすので、それを使う。送り盆の時、墓に持つて行きて置いてくる（伊与久）。無縫仏はいはいのない仏で、盆棚の下に祭る。盆棚の下にキユウリまたはジャガイモを台にして、去年買つた造花（一本花）をさして立てておく。送り盆に線香をつけて墓地に送り出す（小此木）。ソウリョウ花は無縫仏のことと、仏になれない人、よその人ではつきり身元の知れない人の魂などを祭るものである。子供の仏は

で作り、表座敷に飾る新

盆の棚は別にわきに小さ

いものを作つた（下瀬

名）。盆花は買った。この

辺ではハギのことを盆は

なといい、これではしを

作つた。棚は座敷のすみに作つた。大神宮様の真

下にならぬよう棚を

作つた。新盆の棚は別に

作つたが、これは、同じ

棚にカツモを取つて来

て、小さなござを作つて、その上に位はいをの

せた。新盆の提灯は別の

ものを買つて来た（上矢

小さいはいか、紙のいはいがあり、無縁仏にはならない。ソウリヨウ様のござはカツモを編んで作り、盆棚の下に敷いて祭る。カツモのござを盆棚の上に敷く家もある（東新井）。盆棚の下にソウリヨウ様が祭つてあるが、ここへはナスの馬を作つて置いて、送り盆のときそれを持つて行く。ナスの馬にはソウリヨウ花をさす（これは売っている）。仏様に上げた水は外に投げろという。これを無縁仏がなめるといふ。無縁仏はツボ山あたりにいるといふ。ソウリヨウ様に上げる茶わんは、二つ一组のかわらけで、境町で売つている。ソウリヨウ様は盆棚に上がれないという（上矢島）。

**新 盆** あら盆の棚は別に作るか、仕切りをして飾る。以前は盆棚としてウツギを編んで敷いたり、ツクモ（マコモ）の葉を編んで敷いた



新盆棚 左側の写真の主が新盆様。  
盆ちようさんは縁側にも吊る（此木）

りした。向かって左側を新盆の棚にする。軒に盆ぢょうちんを一夜だけ吊るしておく。東馬場では、新盆の家は十三日に餅をついて仏様に供える。餅をつく音を聞いて、仏様がお客様に来るという。十三日の晩、新盆見まいの客が来るので、餅を二つずつはさんでやる（伊与久）。ふつうの盆棚の北へ並べて新盆の棚を作るが、一つの棚を二つにしきる。その上

にカツモ（マコモ）やチガヤを一尺五寸の長さに切りそろえて編んで敷物とする。（だから、カツモはほかの敷物には使わない）。さん俵の上に、シャモジに灰をいっぱいのせて上げたり、灰の山をのせたり、ナスの馬を作つて上げたりする。ナスの馬には枝で足を四本つけるが、しつばはない（南米岡）。新盆棚の上にはカヤで編んだ敷物をしく。新盆見ましいには必ず親戚や近隣が寄る。わざと包んでくるのに対し、お返しもする。十四日に来る（小此木）。カツモのござは新盆だけに使う（女塚）。十三日の夕方から近所の人が新盆見まいに来る。三十円か、五十円包んで来るので、お茶がしと何か品物をお返してやる。親戚の人は十四、五日に新盆見まいに来る（伊与久）。

**生き 盆** 嫁をもらった家では、嫁に麻のかすりのかたびらを着せて、若夫婦を嫁の実家へお客にやる。実家に両親がそろつてゐる者は旧六月中にお客に行つて、生きている親の盆をしてくる。今は別に何もしないで休んでくるだけ。親のない人は七月の盆にお客に行く。以前は、嫁のもう一方から米やうどん粉をやって、嫁の実家の方で親戚を呼んでふるまいをした。嫁むこは行つた先で新しい着物を作つてもらつ（伊与久）。生き盆や生きみたまなど聞いたことがない。親ぶるまいもしない（南米岡）。

**盆 礼** 本家と新宅のお盆様に線香を立てて一度は行く。また、嫁の実家のお盆様へ嫁むこで線香立てで立てる（下淵名）。

十五日はセガキで、寺でお経を上げてもらう（下淵名）。  
盆のときのあいさつとしては、近しい親類の棚まいりをする。近所の場合には、お茶を出す程度であるが、遠くから来た人には、ごちそうを出した。あいさつは次のようなもの。

「結構なお盆様でござります」

「新盆でおいしがしゅうございます」

「○○さんの新盆で、おさみしゅうございます」  
新盆の場合には、あら仏にお包みを持って線香あげに行つた（上矢

島）。盆のときの挨拶、ふつうの場合には「けつこうなほんです、おし  
ずかなほんです」という。

あらほんのときは、「はつのお盆でおさみしゅうじます」という  
程度。はつきりいわぬようである（木鳥）。

**盆送り** 十六日の午前中に墓地へ送り出す。だんごと線香を持って

行き、地蔵様にだんごを上げてから墓にお参りして線香を上げる。親戚の  
墓にも線香を上げる。寺へ寄つてくる人もいる。送り火はたかない。盆

桶に使つた物は川などにする（伊与久）。盆桶に使つた、竹、籠、野  
菜などとだんごを持って寺へ盆送りに行き、寺の隅の方へ置いてくる。

あとで近所の人が集めて片づける（小此木）。盆桶の竹や、飾りつけたス  
ギの葉などと麦わらを持って辻に行き火をつけてもやす。この煙に乗つ  
て仏様が帰るという。送り火をたく所は少なく女塚だけらしい。花香塚

では、盆様を送り出す時、線香一本に火をつけた物を持って田んぼを回  
つて、先祖様に今年の田のできを見せてから盆送りする家もある（女  
塚）。お屋に昇ぼてといってうどんを作つて供えてから送り出す（小此  
木）。引きづなといって生うどんや、ナス・インゲン等をさいの目に切  
つた物をおみやげとして、だんごといっしょに持つて行き墓地に供えて

くる。無縫仏に飾つた去年買った造り花を墓地に立て、線香を供える  
(上新井)。

十六日の晩、カテの御飯（五目飯）を作る。油あげ、ニンジンなど入  
れる。大きいザツキに盛つてジオウ様（十王様？）に供える（南米岡）。  
十六日の午前中、おもに女人人が墓参り行く（伊与久）。十六日には、ナ  
スとインゲンを細くぎこち、だんごと共に重箱に入れて墓へ持つて行つ  
て供えた。これをミヤゲモソンという。盆桶は、送つたあとで三本辻に捨  
てる（下潤名）。現在は、七月二十三日が迎え盆、二十六日が送り盆。  
送り盆にはだんごと、ナスをさいの目に切つて、うどんをゆでないで  
(これをしょいづなという) 重箱に入れて持つて行く。これは仏様のお  
みやげという。なお、盆桶に使つたカヤは、盆送りをしながらカайдの

辻に立てる（上矢島）。

食 習 三朝続けてほの餅を作る。朝ほの餅、昼うどん、夜御飯にト

ウナスのおつけ（南米岡）。十三日に餅をつく（この音で仏様が来ると  
いう）。ナマリなど買つが、特別に盆魚として供えることはしない（東  
新井）。盆の餅はつかない（女塚）。盆のごちそうは、「盆はほたも  
ち、星まはうどん、夜は米の飯、トウナス汁よ」という、盆踊りの歌の  
通りである。

**盆おどり** 以前は神社や寺の境内などで盛んに盆おどりをした。やぐ  
らを組んで音頭をとる人が上がり、長たものじゅばんを着て歌つたり  
踊つたりした（伊与久）。

### 七晩どうろう

(七・一七一—三)

館野では七月十七日から一週間、アミダ堂のお祭りをするが、厄病除  
けの効験があるので、せきりの年などは特に盛大に祭る。館野  
が六組に編成されてアミダ番にあたり、交代で毎晩三人ぐらいずつ登場  
になり、夜十時ごろまでです。「七晩どうろう」といつて、とうろうが  
いくつも並んでいるのが見ていて、それにおあかりを上げる。お参り  
する人は線香を買って立てる（伊与久）。

### 地蔵のあれ

(旧七・二四)

旧七月二十四日を「地蔵のあれ」といつた。この日は地蔵様の御縁日  
といって、おだんごを作つて、お寺の地蔵様へ上げる（上矢島）。

**夏祭り** 雷電神社の夏祭りは七月二十五日、神社で祭典をするが、  
ツケ祭りは別にしない。家では赤飯をふかす。ダシやミコシも出ない。  
ミコシは大正十三年に雨乞いした時、一度川へかつぎ出してしまんだこと  
がある（伊与久）。

南米岡の天王様は以前七月七日、今は七月六・七日に境町の夏祭りの日  
といつしょにする。今の老人たち（金井善太郎氏）らが子供のころ、今  
から六十年ほど前に浅大工に頼んで天王様のミコシを作り、子供同志で  
お祭りをすることにしたものである。うちつくりで（うちうちで）子供

がミコシをかついで各戸を回ると、人々が水をかけておさい錢を上げてくれた。ミコシは広瀬川へかつぎ出して川流する。川の瀬を百まあまり流して、子供がいしょに泳いで下り、ミコシを洗って幣束を新しく作って飾る。ミコシは神明宮との御荷蘭に置いてあり、今でも祝儀のあとで嫁はそこにお参りする（南米岡）。

祇園（ギオン）を世良田といしょにしていたときには、旧六月十五日にした。つぎは世良田の方で六月二十五日に変更したので、こちらもその日に変更した。昭和三十七年からは境町に合併したので、境町と合同するようになり、六月二十七日に変更した。当日は赤飯をするのがふつうだが、家のすきずきの物をする。祇園の日には仕事を休んだ。また旧七月二十七日は、お諏訪様のお祭り（上矢島）。もとは、夏の觀音様の祭りに競馬をやった。のつきり競馬といって、一本道まっすぐにかけられた（上淵名）。

### 農休み

区長が相談して日取りを決めて、フレを出していたが、今年から境町として日を決める。二十五日ごろ、二・三日の休み日を取る。ふつう、ゆでまんじゅうを作る（伊与久）。

二十五日は天王様、ギオン（下淵名）

## 八月

### ハサク節供

（八・一）

赤飯をたいて嫁・むこは実家へお客に行き、仲人の所へも寄つてく。その時ショウガやゴボウを持つて行き、お返しにミをもらつてくる。ミは身持ちになるようとの意味だという（伊与久）。

ハサクは荒れ日と考えられ、無事に切り扱けるように、赤飯を神仏に進せる（伊与久）。

以前は若い者の遊ぶ日で、嫁に来て三年ぐらいは実家へお客に行つ

た。日帰りで、みやげにショウガを持つて行ったが、今はまだショウガができない。節供返しには、ミ・ザル・ショウギ・一升マスなどをよこした。ミでくくいむよう、「一生よいよう」という意味だという。今までの節供には節供返しをしないで、ハサクだけ節供返しをすることになっていた。「田の実の節供・嫁むの泣き上げ」などとはいわない（伊与久）。嫁はみやげ物としてお金やショウガを持って実家へお客に行き、実家ではタナモングーシ（たなもの返し、お返し）にミザルを返す（南米岡）。嫁は里方へ節供に行き、里方ではたなもの返しにミ、またはショウガなどを返す（小此木）。嫁が実家や仲人の家へお金を包んで行く。初めての時はミヤスを返してやる（東新井）。嫁が嫁入り先からショウガをお土産として持つて行く。「ショウガない嫁ゴだ」という意味。くれ方からミを返すのは「ぜひミカエシテくれ」という意味からだという（上武士）。

ハサクを九月にのばす家もある（東新井）。ハサクに長いさおに提灯をつけて庭先に上げると、越後の八海山に煙が流れで行くといわれる（中島）。

八月一日、嫁はショウガを持って里帰りする。これは「ショウガねえ嫁だ」ということである。これに対し里では嫁にミを持たせて帰る。これは「なかミを見てくれ」とも「しんじょうが広がるよう」ともいう（下淵名）。はっさくには、包み錢と葉ショウガを持って行く。「ショウガない嫁ゴだ」「ぜひともミなおしてくれ」というわけだ（東新井）。

## 九月

二百十日、二百二十日 餅をつく（下淵名）。

彼岸

（中日九・二十四）

中日にぼた餅を作る。以前は春の彼岸から秋の彼岸まで、夜ナベ・朝ナベをして、繩などを手でなつた。今は機械で繩をなうようになり夜ナ

べなどしなくなつた。それでいて繩は足りない（伊与久）。去年まで天道念仏をしていたが、今年から中止した（東新井）。

社 日 農家の休日。彼岸中、または彼岸に近い日のえの日。秋の社日には何もないが、春の社日には小泉の社日様にお参りする人もいる。農産物がたくさん取れるように。地神様のお祭りは、社日の日か、雨の降った日、農家の都合のよい日などに、五、六軒から十二、三軒位の組で回り番の宿に寄って行なう（伊与久）。小泉の社日様にお参りする。土の神様（東新井）。社日は農家の休業日、社日様は地神様のことをいう。地神講を組織して、宿に思いの物を持ち寄って、農業に関する種々の懇談をする（小此木）。社日が彼岸の中日よりも早く来れば、寒さが早く来るという。社日様は百姓の神様で、農産物がよく実のようにお参りする（上武士）。

#### 天道念仏

東新井で去年までしていたが、今年（昭和37年）から中止。春秋の彼岸の中日に実相院に集まり、太鼓や鐘を打ち鳴らし線香やろうそくを上げてお念仏を唱えるもので、三組に分かれ世話人が三三人で一組ずつ交替にする。ろうそく一本が燃えきるまで一組ずつが、大きな桐の玉のひいたジユズを回しながら「ナーニマーダーニンブツ」とくり返す。朝日の出る時から日没まで続けて、お念仏が終る時にはしまい仕事として大ジュズをまわりじゅうから引つ張りっこする。あとでお米を分け、御符として生米のまま食べだが、丈夫になるといわれる（東新井）。

てんとうねんぶつは、彼岸の中日に、てんとうさまがあがるんと一緒になに、かんかんつててんとさまが沈むまで、なんまはい、だんぼ、かんかんで叩く。てんとうさまがあがつて沈むまでやつてるので、てんとうねんぶつという（東新井）。

てんとうねんぶつの世話を一年交代で、初寄合の時にえらぶ。その朝、おさこを一合ずつ集め、井のよなものにひやかし、生のままわけ食べる。かね・太鼓を叩き、なんまいだぶと申し、桐のじゅずの中に

坐る。じゅずは八疊一杯になるくらいの大きなもので、座敷の中で、ひつぱり、外へ出てもひつぱる（東新井）。

まんどうかつぎ 戦争中、物資が少ないので、まんどうもやらなくなつた。新井の村に入ると、新しい婚だけではなく、古い婚もかつぐ。新しい婚が用があつて出られない、おらがかつがなくちやならないかなと、婿同志で応援する。西風の時は、綱なんかつけて、四方でひつぱるようとした。神社をめぐり歩く。まんどうが先に立ち、笛吹きのあとがお囃子さま、その後が全部揃つて毎戸出る。前はにぎやかだった（東新井）。

#### 十五夜

（旧八・一五）

ふかしまんじゅうを作り、ススキ・イモ・果物などを供えてお月様を祭る。昔は子供が棒にくぎを打つた物を持って供え物を下げる回つた。十五夜は彼岸前にするものではないから、もし曆の上で彼岸前になると、彼岸後にのばす（伊与久）。ススキや果物やあかりを机の上のせで縁側に出し、月に供える（南米岡）。だんごやふかしまんじゅうと、秋の七草を供える。昔はだんごを取りに行つたが、今はしない（東新井）。ススキ五本、うでまんじゅう十五、くだ物五個を供える。十年前ぐらいまでは、供えた物を下げて回つたが、今はしない。供えた物を取られると蚕が当るといった（伊与久）。ススキ・お手丸・まんじゅう・果物・野菜・シオンの花などを供える。昔は供え物を子供が竹で釣つたが、取られた家は縁起がよいといった（上武士）。この夜の月は今日の月といって、望月である（小此木）。

餅をまるめてだんごを作る。夜子どもが遊びに来て盗む。これは戯戯である（下潤名）。お月見だんごを作つてお月様に十五箇上げた。これを子供がぬすみに来た。この晩、ふかしまんじゅうを作る家も多い。力ヤは十五本か、五本上げる。そのほかにイモ、サツマイモ、果物なども上げた（上矢島）。

十  
月

(一〇・一)

津浦浦の神様が出雲大社へ集まって、来年の相談をする日（上武士）。伊与久では新暦十一月が神無し月になつて（伊与久）。旧十月一日をお神のおたちといふ（南米岡）。今は何もない（上矢島）。

オクンチ 秋祭りの日をオクンチという。旧九月九日、十九日、二十九日をそれぞれ初グンチ、中グンチ、しまいグンチという。今では新十月三日に秋祭りで、オクマン様を初め、各神様をいっしょにお祭りする（南米岡、上武士）。秋祭りで、新嘗祭にかわるものとされている（小此木）。秋祭りで、十月十七日にシシ舞を出す（東新井）。十月二十五日、秋祭りで、赤飯を作り、近い親戚に配る（伊与久）。秋祭り、昔は神明様の庭に集まつてタワデ（タワの枝）をとつと燃して遊びながら夜ふかしをした。遅くまで余興も何かあつたりして、かなりの若い衆までが子供といつしょに参加して、夜明けまでいた。翌朝早く家々から赤飯を持ってお参りに来るのを待つていて、その赤飯を食べて解散した（南米岡）。

旧十月二十四日の夜、館野、中居の福荷様や新地の八幡様では、子供が集まつて燃し木をもらい回つて神社の境内でたき火をして夜ふかしをした。「木くん、木くん。木くんなげりやぬすむぞ」とはやし、たださわいで夜が明けるのを持ち、家々から翌朝早くオクンチの赤飯を神社に供えに来ると、もはつて食べて、家に帰った（伊与久）。オクンチは旧九月五日。「木くん、木くん」といつて、一年中の悪魔を払う。秋の仕事が終り、神社のすま（すみ）で、悪魔を焚き上げる。これをしないと病人ができる（保舉）。

十月九日・十九日・二十九日をオクンチといった。イナリは村の一人とも言つた。これ今まで十月三十日に統一した。イナリは村の一

隅にあり、すごい林で、以前はよく犯罪人が逃げこんだりしていたので、警察の者がいつも注意していた。

さてこのオクンチには、村のコワカイシユ（小若衆）は、村中から木クンナ、木クンナ

クンナケリヤ ヌースムゾなどと言いながらも集めた木を荷車につんで、そのイナリに集まり、村の若者たちの手で燃された。中には、櫛の立木のテッベンにはいって、その上に火をつけて、火柱だといつてはやしたり、近くの村の火祭りと競走して大火をもつたりするので、警察から禁止されて、ついにやんだ。

悪魔を済めるためにやつたという。

この日は、どこの家でも、さまざまて赤飯をたいた（中島）。オクンチは、むかし九月二十九日であったが、今は十月十七日。この日は鎮守様のお祭りである。赤飯をたいて祝つた。よそへとついだものは、子供をつれて泊りこみでお客に來た。この日にお獅子を舞つた。お獅子のけいこは、以前は九月二十三日から五晩、お寺を宿にしていた。お獅子は三つあり、やり手は決まつていた。お祭りには村中が出た（上矢島）。

十  
三  
夜

(旧九・一三)

「十五夜にくもりあれど、十三夜にはくもりなし」という。もし雨が降ると、麦まきの時期なので、麦がはずれるという。また「片見月はするな」という。十五夜と同様に祭る（伊与久）。十五夜と大体同じである。だんごの数が十三になり、カヤは十三本になる。「十五夜にくもりあれど、十三夜にくもりなし」といわれ、十三夜はほとんどもらないといわれる。十三夜の晩にくもれば、その年の小麦作はずれるといわれた（上矢島）。

# 十一月

オカマ様のルスンギョウ

(旧十月中)

旧十月は神無月で、神様がるするになるのでオカマ様を祭る。月三回六・十六・二十六日には、ぼた餅を作りカマのふたにのせて、オカマ様に上げるように神棚に供える。オカマ様は子供が大勢いるので、ごちそうをたくさん作って上げるといわれる。初めての嫁は、六日にオカマ様のぼた餅を作て近所に配った。十日夜の前の、六日とか八日とかに、荒神様・オカマ様のルスンギョウで、ぼた餅や焼き餅を作てカマのふたにのせ、流しの出ごうしの棚に上げる家もある。家によっては旧十月中のいつでもいい日に、ルスンギョウダングや焼き餅を作て神棚に進せたが、オカマ様は別に祭らなかつた。今では、シユウトのるすにごちそうを作ることを、オカマ様のルスンギョウと呼んだりする(伊与久)。旧十月六・十六・二十六日の三回祭る。または一日だけ祭る。オカマ様は女の神で、ほかの神々が出来へ出かけた時、ついて行けないで留守居をするから、ぼた餅をついて供える。オカマ様はカマドの神で、荒神様、三宝荒神ともいう。祭るとヤケドをしないようになるという(南米國)。

十月は神無月である。十月十六日はオカマ様のルスンギョウをする。餅をついて、オカマ様に供え、これを流す(下瀬名)。オカマ様は旧十月の六の日三回。麦の準備でいそがしい。働く者は働いたが、食つてべえいる月(東新井)。

十月の六、十六、二十六日にオカマのルスンギョウをした。十月は神様が出来へお客様に行っている月であるが、オカマ様は留守をしているという。これは、オカマ様には子供が沢山あるためだという(上矢島)。

旧十月六日、十六日、二十六日に、神のルスンギョウを行なう。流しの神様で、神様に子供が多くて連れて行けない子供がいるので、ぼたもちを作つて上げるのだ(上瀬名)。お神のルスンギョウは、十月のう

ち、六のつく日にする。たいてい、ぼた餅をする。それを流しの棚に上げる。オカマ様には子供がうんといつといい、オカマ様に、お産のとき頼むと、早く生まれるという。オボタテの飯は、かまのふたを反対にして、お礼としてお勝手の神様にあげた(木島)。

十月の六日、十六日、二十六日、おはぎを作つてオカマ様(三室荒神、お勝手に祭つてある)に上げた。オカマ様には三十六人の子供があるので、出来へお客様に行けないという。

オカマ様については、つきのような話がある。

オカマさまはあるとき人の子を食つてしまつた。そこで神様がオカマさまの子供を一人かくしてしまつた。するとオカマさまは心配のあまり氣ちがいになってしまった。そこで神様はオカマさまに、人の子をたべなければ子供をだしてやるといった。そんなに沢山子供がいるくせに、一人ぐらいかくされそんなどとは、これから人の子を食うなどいわれた。そこで約束して、子供をだしてもらつて、それからはオカマさまは、子供を食わなくなつたという(上矢島)。

十日夜

(旧一〇・一〇)

供え物 餅を十個まるめてミの中に入れ、縁側に供えて戸を開けておく。十日夜には出来に神様がみんな集まって縁結びの相談をする。初めのうちはアレとコレとよく調べて縁を結んでくれるのに、しまいになると忙しくなつて、アリヤコリヤというようになるからうまく縁ができるない。そこで十日夜の餅は早くついて上げないとよくならしい。また、十日夜の餅は必ず二日つくが、十一個まるめて供える。一個はゲーロ(カエル)の分で、ゲーロが一年中害虫を食つてくれたのでくれるのだという。ゲーロ餅ともい、ゲーロが餅をしようって出来まで行くといふ。わらをすぐつてきれいにして上を束ねてミに入れ、その上に二また大根、または二一本の大根をのせて縁側に出しあ月様に供える。これを「月見大根・大根の年取り」という(伊与久)。

餅をついてあんを入れないで十個まるめたものや、大根一本、里イモ

十個を縁側に供える。床の間に供える家もある。十日夜だけは一日早く九日に餅をつかないと、縁組が遅くなり早く継につかないから、一早早く餅をつけといわれる。これを「縁組み餅」といい、机にのせて十日の朝進せる（栗原家）。また、十日夜の餅はザマ餅（粒の残った餅）がないように白くいい餅をつけ、きりょうのいい嫁がもらえるといふ。

また、「真白い米でザマがないよう餅をつけ、畑にそういういい米ができるように」ともいう。また、十日夜の餅は日のあるうちにつけといい、暗くなつてからつくものではない。早く餅をつければ縁組みが早くできてくれ残りにならないといふ。また、十日夜の餅は小さく作るものではないといい、ワラドッコにはみ出すぐらい大きくなるので、一臼の餅から十個まるめる残りがいくらもなくなる。十個まるめた餅をわらを切りそろえて編んだワラドッコ（わらのツトッコ）にのせて、縁側の机の上にあげ、野菜・果物などといっしょに十五夜と同じように供える。十日夜のわら餅は他人様に食べさせるものではないといわれる。この餅は神無月だからお月様に供える（南米岡）。

十日夜の餅は夫婦餅といつて必ず二臼つく。もし一臼なら二回にわけてつく。それをあんを入れないで十個まるめて新わらにのせたり、重箱に入れたりして供える。わらをすぐつて上をたばねたものをミに入れてその上に大根をのせて供える（伊予久）。

東新井では、田から上げてきた稻束を積みあげた上やラニユウの上に、供え餅を大小二個一重ねにして供え、さらには縁側に餅を十個、皿か重箱を入れて机の上にのせて供える（上矢島でも庭のわら束の上に餅を供える家があるという）。家によつては、餅は月の数だけ十二個まるめ、閏年なら十三個まるめて、膳に盛つて庭に取りこんである稻束の上に上げて十日夜様に供える。東村から来た嫁の家では、十日夜の餅はわらのツトッコに入れて供えておくと、カエルがしようて行くといわれたといふ。また、十日夜の餅は十一個作るが、一個はカエルの分で、十個が十日夜様に供えるもの。わらのツトッコの中に餅を十個入れ、横に一個

供えて縁側の月の見える所に出しておく。ほかに月見大根一本と、野菜や果物等を供える。また、十日夜の餅は夫婦餅で、米と粉とか、赤と白とか二色つくことになっている。そうするとよい嫁が得られるという（東新井）。

女嫁では、十日夜の餅は十個まるめて、わらのツトッコに入れ大神宮様に供える（木崎では縁側に供える）。この餅をカエルがしようて出雲へ行くといふ。十日夜の餅は早くつかないと縁組みが遅くなるといい、また餅をつく時によくこねどりして粒のないようにならないと、ジャンカ（あばた面）の嫁がくるといわれる。また、蚕がよく当たった家の大根を一本、そっともらつて来て上げれば蚕がよく当たるようになるという。その他のものは供えない（女嫁）。

白い米の餅をつく。他の物の餅をつくと、ジャンカの嫁をもらうといわれる。ついた餅は臼ぬきの餅といつて、そのままミの上に供える。家によつては十個まるめて供えておく。好きな女のいる家の供え物を吊つて来ると、必ずその家の女が嫁にもらえるという慣習もある（小此木）。

供え餅を一個と、葉のついた大根を一本立てて座敷に供え、おあかりも上げる（上武士）。餅のはかに、二またの大根または大根一本を供える。大根の年取りといい、十日夜からたくあん大根を取り始めていいといふ（南米岡）。十日夜の餅は、俵の上に九箇そなえて、「大尽になつたら箇上げます」という。大根一本をえび様に上げる（上潤名）。

十日夜は縁結びの日といつた。この日は「夫婦餅をつけ」といつて、餅を二臼ついた。餅は早くお神に進ぜろといった。早くしんせば、いい縁結びがしてもらえるといった。十日夜には、神様が出雲へ行って、家にいなくなるといわれた（木島）。

十日夜の晩、餅をついて、カラミ餅をして食べた。十日夜のものはエチゴモチといい、縁結びのもちといった。このものはまるめないで、ちぎりっぱなしで十箇つくつて、新わらのツトッコのなかにいれてお月

様にあげた。机をだして、もちのほかに土地の花やくたものをあげた。お月様にあげたものは、カエルが出来の神様のところへ背負って行くと

いう。それを早いうちなら、出来の神様があれやこれやと、きちんとそれまで、縁むすびをしてくれるという。ところがおそらくると、神様もいそがしくなって、ありやこりや、ありやこりやとなつて、そのためには、十日夜のものは早くつけといつた。

この晩わら（新わら）でわらでつぼうをつくって、はじめはうちのまわりをたたいてあるき、それからよそのうちをあそびあるいた。

「トウカンヤ　トウカンヤ　トウカナヤノワラデッボウ　アサソバキ  
リニ　ヒルダンゴ　ヨウメシクツチ　ブツタタケ」

といって、庭先をたたいてあるいた。これはもぐらがもぐらないようとの意味である（上矢島）。

十日夜は大根の年取りともいう。餅を一臼じゃこけになるからって、二臼にする。よくも悪くも、米・あわ・もろこしと二つの揚ぐ。夫婦餅（保泉）。

十日夜の餅は、ガイロ（カエル）の餅を一つというので、十一作つて取り入れた桶となると、縁結びがこみひつて来るから、ベタベタくつけられる。餅は、ガイロ（カエル）の餅を一つといつたが、今は略して、十日夜のわらでつぼうを十個丸めて大根といつしょに机の上にのせて表座敷に供える。「大根の年取り」ともい、大根を必ず供える（保泉）。家によつては、九日の夜に餅をついて、十日の朝、汁粉にして食べる風習もある（南米岡）。

わらでつぼう 子供がわらでつぼうを作つて、そこらをたたいて回る。モグラが土をもち上げない匂いなどといふ。この時「十日夜のわらでつぼう、夕飯食つてぶつたけ」と唱える（伊与久）。以前は中にイモが入つてわらでつぼうを作り、子供が夕飯後近所をたたいて回り、戦争ごっこをした。モグラがもぐらないようとする。「十日夜のわらでつぼう、朝ソバきりに昼だんご、夕飯食べちゃぶつたけ」と唱えた（南米岡）。子供がわらでつぼうで地面をたたく。「十日夜十日夜、モグラドンはどこ行った。夕飯食つたらぶつたけ」と唱える（東新井）。

十日夜の餅は十個まるめて、ワラックビ（ワラの両端をくびつたもの）の上にのせて、縁側の机の上に供えておく。それをカエルがしよつ

て淡島様へ持つて帰るといわれた。（淡島様はこの辺にはないので、どうこの淡島様だから知らないといふ）。

十日夜の餅はワラの両端をしばつたものの中に包んで土間の俵や庭の稻たばの上に供えておくと、お月様がしよういくといわれた。赤ん坊が生まれて初めての十日夜には、初十日夜なので色餅をつく家もある別に配つたりはしない。イノコ様の餅は十一月の亥（イ）の日についたもので、ふつうのあん入りの餅を大神宮様（神棚）に供えた。十日夜とは別の日だった（花香塚）。

十日夜の餅は夫婦餅といつて二臼ついて、大神宮様と縁側に供える。餅を十個机にのせ、ミに大根一本と果物などを入れて縁側に供える。昔はその餅をカエルが持つて行くといつたのだ。ワラデッボウは子供だけではなく、若い衆も作つてよそ村までけんかに行つたりした。今の子供はあまり作らない（小此木）。

十日夜は十五夜・十三夜と同じ様に月見だから、廊下のない家では表座敷にお供え物をする。昔は夫婦餅といつて餅を二臼ついたが、今は略して一臼つく。餅を十個丸めて大根といつしょに机の上にのせて表座敷に供える。

「大根の年取り」ともい、大根を必ず供える（保泉）。家によつては、九日の夜に餅をついて、十日の朝、汁粉にして食べる風習もある（南米岡）。

わらでつぼう 子供がわらでつぼうを作つて、そこらをたたいて回る。モグラが土をもち上げない匂いなどといふ。この時「十日夜のわらでつぼう、夕飯食つてぶつたけ」と唱える（伊与久）。以前は中にイモが入つてわらでつぼうを作り、子供が夕飯後近所をたたいて回り、戦争ごっこをした。モグラがもぐらないようとする。「十日夜のわらでつぼう、朝ソバきりに昼だんご、夕飯食べちゃぶつたけ」と唱えた（南米岡）。子供がわらでつぼうで地面をたたく。「十日夜十日夜、モグラドンはどこ行った。夕飯食つたらぶつたけ」と唱える（東新井）。子供がイモがらを入れてわらでつぼうを作り、地面をたたくのは、モグ

ヲが作物を荒らさないようにおまじないである（上武士）。子供がモグラ除けにわらでつぼうを作つて、各家庭を打つて歩く。「十日夜わらでつぼう、夕飯食つたらぶつただけ」と唱える（小此木）。この五、六年はわらでつぼうをたかくなつた（伊与久）。トウカソヤといつて、わらでつぼうを作り、子供が家の回りを叩きながら「十日夜、十日夜、わらでつぼう、朝ソバきりに昼だんご、よう飯食つちやぶつただけ」と呼び回る。モグラの害を防ぐためのものである（下潤名）。わらをすぐり、からげた物を持って、家の回りをたたいて回る。モグラがはいらないために行う（上潤名）。

### えびす講

（旧一〇・二〇）

えびす様を宮ごと床の間に出して飾り、はうきにくま手を座敷に立て置く。御飯、サトイモのケンチン汁、魚、カキ、ミカンなど果物を供え、しんしようを上げ出すように、テンプラを上げる。えびす・大黒は一対だが男ばかりの福の神で、俵がいっぱいできると「えびす様のようだ」という（伊与久）。神無月に神様が出雲に集まるが、えびす・大黒だけは残つていて二十日にえびす講の祭りをしてから出雲に出かける。えびす様は百姓の神で、サンマを供えてお祭りする。えびす様は後家様なので、進せた物を娘が食べるといふ。また反対に、運のいい神だから進せた物は子供が食べてもいい、字ができるようになるともいわれる（南米岡）。二十日、えびす様のルスンギョウをする。すしとテンプラとお頭付きをえびす様にお供えする（下潤名）。十一月二十日は、えびす講で、この日は穀物ができたので、えびす様にたつぶりごとちそうを食わしてやつた。山もりいっぱい、こぼれるようにお高もりして上げた。このほかに、カキ・ミカンなどを買ってきて供えた（上矢島）。

お日待ち 麦まきが終えて、十一月十日から十五日ころ、番の家に寄つてぼた餅などを作つて食べた。今はしなくなつた（南米岡）。

秋上げ 麦まきがすんだころ、十一月の六、十六、二十六日のうち

一日、ほた餅を作り嫁が親もとにお客に行く。お返しには同じ様なものを作り返す（伊与久）。ニワガリ（秋あげ）。糸の調整が終つてから、十二月初めごろする。嫁はこの日に里帰りをした（上矢島）。秋上げ餅は糸かりが終つたときつく（東新井）。

### ネズップサゲ

（一一・末）

麦まきが終つてから、夜した。この日はやきもちを焼いて食べた。やきもちの中へ、干葉をいれてあんにした。上等の場合には本もののあんを入れたり、塩あんをいれたりした。やきもちの材料は、くず米を粉にしたの（上矢島）。麦まきが終つた日に、ネズップサゲ餅をつく。麦畑にその餅を埋めたりした。手伝つてくれた人にふるまつた（東新井）。

### 三才、五才、七才

（一一・一五）

三才、五才、七才の子供が雷電神社へお参りする。嫁の親もとから、孫のために帯を貰つてやる（伊与久）。

### ツジューダンゴ

（一一・三〇）

庭で糸をこいた時に足もとにこぼれた米やくず米を、粉にひいてだんごを作り荒神様に供える。十一月三十日、または旧十一月三十日。もとはだんごを作つて、あんころにして食べたが、今は知らない人が多く、日もはつきりしない（伊与久）。昔は小米くず米でだんごを作つたが、今はしなくなつた（東新井・上武士）。これは十一月の末か、十二月の初め、日がはさまっていない。農家では庭に干し物をするが、そのこぼれたもの（米）をツジューといつた。それを集めてだんごを作つた。ツジューを石臼で粉にひいてだんごにして、あんころにして神様に供えた。

子どもがけんこのときに歌ううた。

フジユーダンゴニタイスギテ  
ツジュー・ダンゴニタイホレテ  
ナーベクソラヒリコンド  
（上矢島）。

## 神郷り

(一一一)

旧十一月一日の月遅れの行事。神無月で出雲に行っていた神々がお帰りになる日なので、雷電神社に神主、氏子継代、区長らが出張つて、各戸から大麻を受けに行く。家では赤飯をたいて供える。また、霜月一日は神様が出雲から馬に乗つて帰つて来るといわれ、神社で大神宮様のお礼を配る。「霜月や、神新しき鈴の音」。神送りの時は別に何もしない。今は新十二月一日に神社でお礼を配るから、これに合わせて稻荷祭りをする家もある。また、オカマ様のシメ擺を張る。年々たまつて何十本にもなると、神社に持つて焼く。昔は夜遊びしてタナホトリ(商店)で時間を過ごして、午前二時ごろから雷電神社に神様をお迎えに行き、お礼を受けて来たものだが、今は朝飯過ぎに行く。家では世神宮様に赤飯を上げる(伊与久)。十一月一日、神帰りの日で大國神社にお礼を受けに行く(下瀬名)。

現在でも、旧十一月一日に赤飯を作り、ケンチョン汁を作る。神帰り(上瀬名)。旧十一月一日には、神社へ神迎えに行く。この辺では、世良田の八坂様へ行く程度である。この日は赤飯をふかして祝い、仕事を一日休んだ。家によつては、この日を神げえりといつて、よそへ出ているものが、ちょっと家へ帰つて来た(上矢島)。

(稻荷祭り) 屋敷内に祭る稻荷様を「ウジ神様」とい、わら宮を作つておくが、石宮の家もある。密「寒の内には祭るな」といわれ寒にはいらないうちによい日をみてお祭りする。旧月中旬のお神がいない留守中に祭る家もあるが、旧十一月一日の「神帰り」の日に神社からお札を受けてきて祭る家が多い。旧十一月十五日、十一月二十五日、新十二月中、冬至の前ごろ等、家により所により日はまちまちである。祭り方はまず、わら宮のお仮屋を作り替える。竹の柱を立てわらをふく。真下家では

桃の木を柱にする。赤飯、とうふ、イワシなどを供えてくるが、とうふは四寸みを切つてはしだけ上げて一丁分上げたことにし、イワシも頭と尾だけ切つて上げて一びき分とする(中身は人間が食べる)。翌朝起きて顔を洗つたら、おさこを持ってウジ神様にお参りし、昨晩供えたものをウジ神様が下がたか下げないか見てくる。下げないとウジ神様が受け取つてくんないからというので、また同じようにして供える。ふつう犬なりネコなりが来て食べる所以、たいてい下げてあることになるが、何か気にいらないと、供え物をかづくけるして食べないことがある。その時は気が悪いのでまたあとで供える。ウジ神様は蚕神様と並べて祭つてある家もある(伊与久)。霜月十五日か、神帰りの朝祭る。わら宮を作り直し、わらのツツコに赤飯、とうふ、尾頭つきの魚を盛つて供える(女塚)、オタンチに祭る家もある(小此木)。十一月二十五日または二十八日、稻荷様のお祭り(下瀬名)。

(稻荷祭り) はカマシメを張るので、カマ神の所のはりにいっぱい下つている家がある。また、便所にも幣束を切つて立てる。別に祭らないが、便所をきれいにして置かないと、白血・長血(シラチ・ナガチ)の病いで苦労するといわれ、よく掃除しておく(伊与久)。

百々でも、冬至のころか、その前にウジ神様の屋根をわらでふき替え、オンベロを立てた前に小さい供え餅を一個白紙にのせて供える(百々)。

ウジ神様は新しく身上を持ってから、そのおかみさんが亡くなつて初めて祭るものだとい。子供が病む時には、よく稻荷様が障るからだといわれる。小暮某氏が身上を持ちたてに若い元気のころなので、神様に対抗する気持で屋敷の鬼門除けにあつたわら宮を流してしまった。すると間もなく主人の右耳下がはれて大きくふくれあがり、いくら薬を付けたり冷やしたりしてもおならず、ついに入院して手術しなければならぬようになった。そこで前の鬼門除けの所の砂を持って西北の方に宮を移し建てたら、三、四日のうちにすつかりはれが引つこんで切らずに治つ

てしまつた。不思議なことだが本当にあったことで、人に話してもナン  
ボだいわれる（伊与久）。

油 餅

（旧一・一五）

昔はふつうの餅をついたが、今はしないで話だけ。また、昔は油屋で  
てんぶらをくれた（伊与久）。油祝いといつて、各油屋ではその日に限  
り油のしぶり粕を供した（南米岡）。この日は餅をついて、家の神様に上げた程度。また、この日は七五三  
の祝いをした。また、旧十一月十五日は、どこの畠の木綿を取つてもい  
いといわれた。これに対して苦情はいなかつた。（今から五、六十年  
ほど前、自家用の木綿を作つていた頃の話）。（上矢島）。

（旧一・一五）

旧十一月十五日に、かじ屋が火祭りとして行なつた。新道にかじ屋があ  
つた（上淵名）。

川ビタリ餅

（旧二・一）

カビタリ餅をついて祝う。中島では水神祭りで、お供え餅を作つて川  
にぶつこむ。それを舟に乗つてヤスで突いて取り、黒焼きにしてムシ歯  
に付けると治るといわれた。蓮沼の田島イッケなどはセチ餅がつけない  
ので、カビタリ餅をついて近所に配り、セチ餅の時にお返しをもらつ  
（伊与久）。川で水難がないようにお供え餅を川へ流す。それをヤスで  
突いてきて食べるといつて川流れにならないといふ。今でも船頭の孫さん家で  
はやつているという。餅を川の淵へ持つていつて流すのは、子供がカツ  
バにおそわれないようにすることで、また、これはカエルに餅をくれる  
もので、あとで餅を返してくれるともいわれる（南米岡）。旧十二月一  
日には餅をついて水神様にお供えする（下淵名）。旧十二月一日、この  
日もちをついて川神様におそなえをあけた。子供たちが川でけがをしな  
いよう、川神様をおまつりをすること、今はしていない。おそなえ  
は鎮守様へもつて行つて供えた。（上矢島）

しわす八日

（二・八）

コトナカレといい、ミケーにヒイラギを入れてさおのうらに付けて庭  
に立てたり、かどかどにヒイラギを突つとおした。この日は「水の音も  
させるな」といわれる。二月八日がこと始めで、十一月八日がことじま  
いという（伊与久）。ミケーにヒイラギとつけ木（札のかわり）を入れ  
てさおの先に付けて庭に立てた。お金がたまるといわれた（南米岡）。  
ダイマンを庭に立てる。これはメカゴにヒイラギとマツチまたは付け木  
を入れて、高さおの先に結びつけて立てるもので、また各門へはヒイラ  
ギの小枝をさす。これは不淨をはらう意味と悪魔除けの行事である（小  
此木）。正月の準備を始める日（上武士）。鬼のセイボウ、家の入り  
口、出口、便所、倉の入り口にヒイラギを立てる。また、庭の真中に鍾  
を立てる（下淵名）。八日節供。ヒイラギをメカイにさして、カドロに  
おく。メカイの中に錢を入れておいて、翌朝早起きした者が見付ける  
（上淵名）

すす搗き すすはきの日取りは決まっていない。養蚕のあとで秋祭り  
の前に一度きれいに大掃除してるので、暮は形式的にするだけで、  
すす竹なども作らない。ふつう二十四・五日ごろする（伊与久）。すす  
取りが終つたあと、神棚にお灯明を上げ、家族がそろつて拝む（小此  
木）。二十日以後家長が中心になつてする（上武士）。すすはらいは三  
十日前にする。多くの家では秋蚕後すすはらいをする（下淵名）。む  
かしは旧の十二月十三日に、すすはきをすることに決まつていた。別に  
ごちそうはなかった（上矢島）。

冬 至

（一一・一二）

一年中で一番日の短い日で、冬至コンニャク、冬至カボチャなどとい  
つて、コンニャクにみそをつけて食べると胃の中の砂払いになるとい  
う。一年中で一番いい日で、どんなことをしてもいいといわれ、カマド  
を直す日になつてゐる。星の十二時に餅をついて臼抜きで台の上に出し  
て、庭で天道様に供える家もある。城南村二の宮ではさお占いをする。  
庭に長さ一丈のさおを立てて影の長さを測り、影が長ければ翌年の稻が

豊作、短いと不作、暑って影が取れないと本当に凶作、風が吹けば日照りなど年占いをする（伊与久）。冬至餅をつく。庭に一丈のさおを立てて、影が一丈、「三尺になつたら翌年は水が多い」と占う（小此木）。

この日、コンニャクとトウナスを食べた。これは一年間食べた砂をぬくためといった。コンニャクを食べると、砂がぬけるといった。また、火難や、はやりやましいにもあわないといった。「冬至前に大根のひばをはずせ」といった。これは、火につたといけないからといわれた。また、種荷様の祭りも冬至前にしろといわれた（上矢島）。

太子がゆ アズキッケをして夜食に食う。太子講は職人がする。今はしない家が多い（伊与久）。

#### 歳末諸事

歳暮 婿・嫁・むこがおせえぼに塩ザケを実家へ持つて行く。初孫が生まれると嫁の実家からお祝いに男の子なら破魔弓、女の子なら羽子板などを贈る。破魔弓は前には掛軸が多かったが、飾り物ではつまらないので、最近は布きれが多くなった。羽子板は、この一・二年来はでな物を贈るようになつた（伊与久）。親の生きているうち子供からお歳暮をもらう。別にお返しはしない。子供ができた年には親の方から破魔弓として布きれなどを贈る（南米岡）。初めて正月を迎える子供があると、近所、親戚では、男の場合には破魔弓、女の場合には羽子板を贈る（上武士）。

セチ子 十二月中に、「セチ」といって、親戚を呼び合つてうどん・おこわなどでお祝いをして、一年のくぎりをつける。「あすこの家のセチだから、呼ばれる」などという（南米岡）。

#### 正月を待つ歌

正月くるくる、目の玉ぐるぐる、おらんだはだかでぶるぶる（小此木）。

#### 木暮市

十二月二十五日に、境町に暮市がたつた。そこでお正月の用意をし

た。

正月飾り 「一夜飾りはするな」といわれ、二十八・三十九日ごろ飾り付ける。松は松林がなくなつたので立てないから、ゴボウジメだけ飾りつける。家によりオシメには、大神宮・えびす・床の間・墓・種荷とそれぞれ違うものを作る。前三者オシメにはミカン・紙・松・コンブ・ゴマメなどを付ける（伊与久）。松は業者から買って、各門や建物・神棚、年神棚に飾る。二十八日か三十日。シメにはゴボウジメ・四ツラシメなどいろいろある（小此木）。正月飾りは三十日にする。三十一日は一夜飾りとして嫌う。カド松は内カイドに一本、井戸神に一本、種荷に一本。松には薪二本をゆわえる。家のしきい、または玄関にヨタレベエを張る（下瀬名）。カド松は餅つきの日に立てる。場所は門に一本、ウジ神、便所、井戸。松にはシメを張る。オシメないは二十七日にやる（上武士）。

#### 餅つき

「一夜餅をつくな」といい、二十八日・三十九日に餅をつく（伊与久）。一夜餅を嫌い、二十八日か三十日に餅をつく。お寺は二十二五日に餅をつく（東新井）。餅つきは二十八日か三十日。二十九日は一夜餅として嫌う（下瀬名）。旧の十二月二十八日。一夜餅はつくものではないといわれた（上矢島）。

#### 大みそか

#### （一一・三一）

みそかソバやうどんを作り、御飯をたく。正月を迎える準備をする（伊与久）。大みそかの晩、庭でナスのからとキタのからを「借金ナスがら、よいことキタがら」と唱えながら焚く（下瀬名）。この晩早く寝ると、白髪が出るといわれた。十一時には寝なかつた。むかしは元旦に朝湯をたてた。ばん木や拍子木をたいて「湯がたつたから入りに来てくれ」といつてまわつた（上矢島）。

## 社交・贈答

社交については、村づきあいの範囲を茶グルワと呼んでいるのが目だつてある。茶グルワは隣り組のことをさす語で、祝儀・不幸の際に助け合う共同社会の範囲である。

近隣とのつきあいのほかに、親戚や身うちとのつきあいもふだんからことあるごとに行なわれているが、これらの社交・贈答は年中行事や祝儀・不幸等の際に現われているので、それぞれの項のところを参照されたい。

### 年始礼

もとは大みそかの夜中から朝湯をたてて、一族を呼びあつた。一族（イッケ）は元旦に本家へ集まつて、とそをくんで挨拶してから神社に初参りした。

年始回りも一族と隣家ぐらいをしていたが、今では回り番で一回集まつするようになった（伊与久）。

大正ごろは、元旦に春日神社にあつまつて手ばたきをした程度（木島）。

おへんまち（おひまち）時期は一月四日から十六日までぐらいの間。この間に、どこの家がおへんまちにあたつているかが毎年きまつていた。同じ日にきめられている家は、別にイッケとか家並ではなく、むかしからのくみあわせができていた。一晩に五、六軒ずつまわった。まわるものは、大人も何人かはまわつたが、大抵は子供であった。夕

年間で終つたようだ。

佐藤佐次郎さんのところではオヘンマチの日が旧正月二十一日とまつていた。これに佐藤さんの入っている組では一番しまいの日であった。オヘンマチは正月の三日すぎからはじまつた。これはオヒマチともいつた。大体子供がまわつた（木島）。

### 村づきあい

祝儀・不幸 南米岡では隣組十四軒の子供までがその家に呼ばれて、朝飯から夕飯までごちそうになつた。最近は一戸一人ぐらいずつ呼んだり、組を半分に分けて六軒で間に合わせるように一戸から夫婦一人ずつ呼んで、前日から手伝つてもらつたりする。このごろは神前結婚がはやり手数がからなくなつた。不幸の際も祝儀と同じ範囲の者を呼んで手伝つてもらう（南米岡）。

伊与久では隣保班のことを茶グルワといい、十軒内外の家で組になつ

飯を食べてからまわつた。当日は、おへんまちにあたつている家へ「今夜もオヒマチでおめでとうございます」といって挨拶に行き、お茶をいれてもらい、お茶がしをごちそうになつた。お茶がしは、豆の砂糖ころがしがふつう。そのほかにたくわんなどをだした。座敷へあがりこんで夜の十時頃まであそんで行つた。ごちそうがなくなると、子供が「コメココナ」といつた。

五六回で大体まわりきるようになつていて、この行事は、大体明治年間で終つたようだ。

佐藤佐次郎さんのところではオヘンマチの日が旧正月二十一日とまつていた。これに佐藤さんの入っている組では一番しまいの日であった。オヘンマチは正月の三日すぎからはじまつた。これはオヒマチともいつた。大体子供がまわつた（木島）。

て何とかというと寄つたり助け合つたりしている。タルワというのは部落と同じ意味に使われている。中居のタルワ、熊野のタルワなどといふ

(伊与久)

祝儀の場合には、曲輪全体で手伝つて、皆様よびにした。しかし、現在では、隣保班で近い人が、旦那さんとかみさんとがよばれて行く程度になつてゐる(木島)。

葬式に参加する程度 葬式の手伝いをするのは隣保班の人、人があなつたというはなしがあればすぐにじんぎに行つて手伝いをする。むかしは、葬式の時には村中よつた。手伝いの人には、最食を振舞つた。村中あつまるのではなく、村を一分して、手伝つたこともあつた。その次には曲輪単位になり、その次に隣保班単位になつた。隣保班だけではまかないきれないときには、隣の班から手伝いに出てもらつた。

例を中屋敷にとつてみると、ここは、上と下の二つに分れている。もし上の方に出来事があれば下の方であな方をする。会葬には中屋敷全体ででた(木島)。

## 村入り

むこの場合は、村へきてからある程度日がたつと村つきあいをはじめた。このとき、身内のもの、親戚のものがつれて、村全体をまわつて挨拶をした。もつて行くものは名刺程度。むこがわかつて消防組などへ入るときは、酒をもつて仲間入りをした。むこは、部落の宴会でもあつたときは、酒のかんをつけたりした。

よそから引越してきた場合には、隣保班に挨拶する程度(木島)。

## 挨拶

現在では中学校をおえたものは、人にあつたときにあたまをさげる程

度のあいさつをする。

朝は大体十時頃まで「おはようございます」という。  
星はお天道様のあるかぎりで「こんちわ」という。

夜は「こんばんわ」という。  
日中の挨拶はその場の様子によつてつぎのようにいう。

上気のときには「いいあんぱいです。」  
夏のあついときは「おあつこざいます。」

作物に具合のいい雨のときには「いいおしめりです。」

大降りなどの場合には「こまつた天氣です。」

天氣がすぐれないときは「はつきりしません。」

風がひどいときには「わるい風ですね。」

## 嫁が客に行く日

### 南米岡

一月四日(ナベカリ)——初嫁が夫婦で実家へ行く。日帰りをする。

一月十五日(小正月)——大判餅をおみやげに持つて実家へ行く。

三月三日(節供)——ひし餅を持って行く。

四月三日(春祭)——赤飯を持って行く。

五月五日(節供)——タラの干物を持って行く。

六月(蚕休み)——一日帰りをする。

七月十五日(盆)——行く人もいる。

八月一日(ハツサク)——シウガとお金を持って実家へ行く。お返しにミ・ザルなどをもらつてくる。仲人の所へも魚など買って行くが、別にお返しはない。

### 上矢島

祝儀の翌日嫁さんを村に披露し、三日目はサンニチといつて、里帰りをした。この日は里から女イチゲンがきた。仲人夫婦がつれてきた。こ

れをうけてから、その日のうちに仲人夫婦は嫁をつれて里帰りをした。

むこも一緒に行つた。赤飯をふかして重箱（正式にはホカイ）に入れて里へもつて行つた。里方でも赤飯をふかして近所親類にくばり、また、土産として重箱に入れて嫁家へおかえしとした。

正式には里帰りに行つたそのあと女イチゲンがきた。それが変更になつたのは、かれりがおそくなるためといふ。さらに丁寧なのは、里帰りの日と女イチゲンの日を別の日にした。祝儀の四日目が男イチゲン。

嫁に来てから、早い家では一ヶ月たないうちに里帰りをさせた。土産として、うちでこしらえたものをたせてやつた。この日は泊らずにかえつた方がいいといわれた。

ナベカリ（一月四日）嫁に来てはじめてむかえた正月に、朝から夫婦そろつて里へナベカリに行つた。

何ももつて行かないで、里方で煮たきの道具をかりて若夫婦一人でたべてきた。場所によつては、近所のものをよんでもごちそうをした。この日は泊らずにかえつてきた。

一月十五日 この日は大ばんもち三枚もつて里へ行つた。夫婦そろつて行くがおたな（正月棚）のおりないうちにかえつて来ればいいといわれた。七日がえりは仏がえりになるといふのでよくないといつた。大抵はその前にかえつてきた。むこは一晩ほど泊つてきた。

この日は、里がいく近くとも泊つて來た。子供が生まれても、嫁の座にあるちは行つた。この日はどんなんことがあつても行かねばならぬい日とされた。小づかいは姑がくれた。

三月三日 この日泊つてくるのは自由、土産は家によつてちがついていたが、ひしもち（三枚）とイワシのひらきをもつて行つた。嫁に来て五年以上は行つた。

嫁に来てはじめの節供には夫婦そろつて行つたが、そのあとは夫婦そろつて行くと世間からわらわれた。

彼 岸 彼岸には両親が欠けた場合は行くが、その前は行かない。

行くのは嫁だけ。

五月五日 嫁婿とともに行く。嫁は泊つてくるが、むこは泊らずにかえつて来た。土産としてもつて行くものは、かしわもちとタラ、嫁入り後五年間ぐらいいは行つた。

まいわい。以前は区長がきめて部落一齊にした。これは、春巻が終つてまゆを出荷してからした。土産はもちをついてもつて行つた。泊らずにかえつてきた。毎年行つたが、最近はあまりしていないようだ。

生き盆 六月にした。粉を重箱に入れて里へもつて行き、できとうなものをつくつて食べた。

嫁に来た最初の年は、生き盆までに、姑は嫁に着物をつくつてやつた。ふだん着とよそいぎである。

盆 親のない人は必ず里へ行つた。親のある人は自由。丁度仕事のひまな時分なので、むこも行く人もあつたが、これは例ではない。

ぼんのぼたもちはすえやすいので、ふだんはくれなくとも盆には嫁にもくれるといった。

八 期 この日は節供だから、嫁に来て四、五年以上は行く。赤飯等とショウガと手拭の一つももつて行つた。里からのおかえしとして箕をよこした。これはみごるようとの意味という。むこは行かない。子供でも生まれると行かなくともいいようである。この日は泊つても泊らなくともよかつた。

オクンチ（九月二十九日） この日は村まつり。二晩ぐらいは泊つて来た。嫁と婿がそろつて行つた。むこが泊るのは自由。里のオクンチには、腰がまがるようになつても行ければ行けといわれた。このときは孫もつれて行く。土産としては手拭に栗子折とか砂糖折をもつて行つた。

里方からはこの日の朝赤飯をよこした。  
なお、この日、里方に村芝居でもあれば、適当に花を出した。これは何年でもした。

秋あげ これは家によつて日がちがう。秋の仕事が終つてからぼたもちをもつて行つた。里方でもぼたもちをつくつておかえしによこした。むこは行かなかつた。

「秋あげだからあきるほど泊つてこい」といわれたが、そんなに泊つてくるわけもいかなかつた。姑のやかましい家では、一晩ぐらいたり泊つてからあきるほど泊つてこいといつた。

かえつて來た。

時期は、旧の十一月のはじめか、新の十二月のはじめごろで、穀たりが終わらないうちで、刈りこみやほしもんが終つてからである。

歳暮 サケ(鮭)でもよつて十一月の二十日以後に行つた。嫁

が行つた家もあつた。泊らずにかえつて來た。

歳暮には親の生きているうちは行くものだというが、大体十年以上は行くようだ。

木 島

結婚式のあと、この辺では第一日目に式をし、二日目に披露をし、三日目に里帰りをし、四日目にゴタイギブルメエをし、五日目に整理といふ日程であつた。

三日目のことをサンニチといふ。里帰りの日には、もらい方の両親と仲人と若夫婦とで行つた。このときにもつて行くものは、サンニチの祝いといつて、赤飯をホカイにいれて、娘つかいのものがもつて行つた(家によつてはこのほかに葉子折の一つも加えて行つた)。嫁に来た日にはおもて口から家中の中へ入つたが、里帰りの日には台所から出で行くことになつてゐる。里方でも嫁の入り口は台所である。この日は必ず泊らずにかえつて來た(一飯もらつてかえつて來た)。

里方でも赤飯をふかしてホカイに入れてよこした。これは里方のつかいのものがもつて來た。嫁がもつて行つた赤飯は近親者や近所の人たちに出でたたべてもらつた。たりないときには里方で補充して出した。

以上のようなことをしたのは昭和のはじめごろまでのことで、今ではできないことである。

一月四日 この日はナベカリといふ。むこと嫁がそろつて里帰りをした。うどんとかおおばんもち(三枚)をもつて行つた。

この日は、里方で鍋をかりて近所のものをよんでふるまつた。これは嫁にきてはじめての正月のときだけした。この日は泊らずにかえつて來た。この日泊ると妻がはざれるといった。最近はあまりしていないようである。

一月十五日 この日は嫁の年始日といふ。婿も一緒に行く。もつて行くものは、葉子折、砂糖折ぐらいのもの。この日は二晩でも、三晩でも、姑の許す範囲で泊つて來た。

この日は嫁のお客日ということであった。大体嫁の生きてうちぐらいいはこの日里帰りをした。

三月三日 この日はひしもち(へしもち)三枚もつて行く。このほかに土産として適当なものをもつて行く。むことは行かなくともよかつた。泊ることもあり、泊らずに帰つてくる場合もあつた。これも嫁がいるうちは行つた。

春の彼岸 益彼岸には親のあるうちは行かないのがふつう。親がなくなると墓まいりに行くが、このときは適当な土産をもつて行つた。

春まつり(四月三日)嫁に来て、一年はむこも一緒に行くが、長年たてばむこは行かなくなつて、嫁だけが行つた。泊つて來た。土産物も適當なもの。

五月五日 この日は嫁もむこも行く。もつて行くものは砂糖折、嫁入り後はじめての五日には、タラのひものをもつて行く。嫁は泊つてくるのがふつうだが、この頃になると農作業もいそがしくなるのでなかなかまれなかつた。嫁のあるうちは行つた。

生き盆 これは嫁が来た年だけした。大正の頃までしたが今はしてない。盆月に入つてから嫁に新しいひとえのをつくつてもらつて、手土産をもつて里へ行き、うどんとか赤飯をつくつて近所の人たちもよんでごちそうをした。むこも一緒に行つた。これは親がいてもいなくと

もした。

八朔の節供（八月一日）この日には嫁がショウガをもつて里へお客様に行つた。最近では金をつぶんで行くが、以前はショウガをもつて行つた。里からは節供がえし（たなもんがえしという）としてミ（箕）をもらつてきた。これはみになるようなどいふことで、里の姑が買ってくれた。嫁は一晩程度泊つてきた。むこは行かない。嫁の行ける人は毎年行つた。

秋あげ 十二月のはじめ、秋の仕事が終つてから行つた。このとき姑はほたもちをつくつて、嫁にしょわせてやつた。あきるほど泊つて來てもよいといわれた。あらたまつて行くのは嫁に来た最初の年だけで、あとは行ける人が行く程度、現在もいくらかやつている。

蚕祝い 蚕祝いに餅をもつてお客様に行くものもある。これは春蚕だけでも、嫁だけ手土産ともちをもつて行く。このころはつかれるので、一晩でも泊つてきていいといふ。この行事はまちまちで一般的なものではない。

お歳暮 両親があれば嫁に来てから十年ほどはもつて行く。もつて行くものはあらまきなど。もつて行くものは嫁もあるが、子供がもつて行く場合もある。泊らずにかえつてくる。

### 小此木

ナベカリ 一月四日は嫁が里へ帰る。結婚してから二三年は夫婦そろつて行き、米や豆等を持って行く。ナベを借りて御馳走するというが、今は別に招待する者もない。それに対して帰りには、赤飯・菓子・胡麻・塩などお返しとする。

イキボン 盆（七・一四）になってから夫婦そろつて行く。ちよつとしたみやげ物を持つて。尤も両親のあるうちだけで、一方が欠ければやめる。

節供 八朔 米など持つて行くと、箕・ザマ等の品物を里ではくれる。

秋あげ 麦まきがすんでから。  
歳暮 塩引きはむりをしても持つて行った。今ではみかん一箱ぐらゐ。

仲人礼 仲人三年といふ。仲人の家へは三年ほど挨拶に行く。正月と三月節供にはもちをもつて行き、八朔には赤飯をもつて行く。仲人の方ではその都度適当なものをおかえしとしてよこした。